

明治四十二年一月發行

木曾山林學校友會報

第九號

長野縣立木曾山林學校
校友會

昭和41年11月10日	
木曾山林學校	資料
	9号

本會山林學校校友會報目次

告別之辭

名譽會員 松田力熊

論說

信州は林學研究の源泉地
林業家の自覺を促す

學術

Y E 原霧外 恒生

曲線布設法
本邦の農法及勞力利用上の缺點

詞藻

小松教諭
有川教諭

偶言

高木博士

曾山獨語

雙木博士

亡友を弔ふ

若林博士

出鶴目片々

長谷部先生

人生觀

美城先生

先輩に訴ふ

中島先生

霧外山言

原山先生

片々錄

松澤守生

和歌

霧外生

俳句

霧外生

新小品

霧外生

雜錄

霧外生

桐樹造林法
松林改正主要項目

中田恵介

落葉松の腐心病

林學博士 白澤保美調査

米國に於ける本邦製竹細工概況

加奈太の紙料及木材の發明

米國と樟腦より人造綿の發明

阿里山樟腦と神木

日本木材開業

木實利用の大發明 白木耳の栽培

製紙の新原料

世界稀有の大森林發見

現今林業の趨勢

施業案編成

紀行

修學旅行記

端書便り

雜報

○本會山林學校建校五週年紀念式

○本會山林學校建校十週年紀念式

○本會山林學校建校十五週年紀念式

○本會山林學校建校二十週年紀念式

○本會山林學校建校二十五週年紀念式

○本會山林學校建校三十週年紀念式

○本會山林學校建校三十五週年紀念式

○本會山林學校建校四十週年紀念式

○本會山林學校建校四十五週年紀念式

○本會山林學校建校五十週年紀念式

○本會山林學校建校五十五週年紀念式

○本會山林學校建校六十週年紀念式

○本會山林學校建校六十五週年紀念式

○本會山林學校建校七十週年紀念式

○本會山林學校建校七十五週年紀念式

○本會山林學校建校八十週年紀念式

○本會山林學校建校八十五週年紀念式

○本會山林學校建校九十週年紀念式

○本會山林學校建校九十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百週年紀念式

○本會山林學校建校一百零五週年紀念式

○本會山林學校建校一百一十週年紀念式

○本會山林學校建校一百一十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百二十週年紀念式

○本會山林學校建校一百二十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百三十週年紀念式

○本會山林學校建校一百三十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百四十週年紀念式

○本會山林學校建校一百四十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百五十週年紀念式

○本會山林學校建校一百五十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百六十週年紀念式

○本會山林學校建校一百六十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百七十週年紀念式

○本會山林學校建校一百七十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百八十週年紀念式

○本會山林學校建校一百八十五週年紀念式

○本會山林學校建校一百九十週年紀念式

○本會山林學校建校一百九十五週年紀念式

○本會山林學校建校二百週年紀念式

○本會山林學校建校二百零五週年紀念式

○本會山林學校建校二百一十週年紀念式

緒言

一樹の影は宿り一河の流を汲む尙且つ二世の結縁あり
 と聞く況や三歳の久しき師たり弟たり將た同窓たるも
 のに於てをや飯令ひ身は天涯萬里を隔つと雖とも地位
 階級異ると雖とも亦恩師を慕ひ故舊を懷ふの情なきも
 のはあらざるべし我山林會報は此彼此の間に介在して
 相互の消息を疎通し兼て研學に裨補する所あるを以て
 自ら任ずるもの故に就て之を見れば會員の動靜を知る
 へく我校の情況を観るへく林業界の一斑を窺ふへく研
 學の餘師たるを得へし特に母校との縁固を維き同窓の
 友誼を温むるに於ては尤も重き注意を拂ふに怠らざる
 へし本紙の本領已に此の如くなれば校外會員各位に向
 て期待する處自ら存あり山林影濃かにして他の遊ぶ

に任すべく蘇川の流清を以て人の拘するを待つへし樹陰に宿り河流ま汲む亦難きよあらす若し夫時ま杖を此文林に曳き或は清遊を試み或は活躍の區たらしめんか其花實は長に紙上を飾りて窮りなからんとす豈管に一世の結縁のみと謂はむや

明治四十一年十一月

木曾山林學校に於て

盲蛇生誌す

木曾山林學校校友會會報 第一號



告別之辭

此辭は前年先生が本校を去らるゝに當つて告別式場にて
贈られたるを前編編輯の速記したるものなり

木曾山林學校卒業生並に生徒諸君、予が今回山林學校長の職を辞し宮内省に轉任せしに就ては在職七年の久しきに涉りし關係よりして諸君に對し一言告別の辭を呈せんとす。

予は元來林學の初歩を學びたる經歷あるに過ぎず。故に教育と云ふ方面には全く門外漢であつた、然るに學校長の職責を擔ふに至りし所以のものは、予の理想として常に我國の林業經營は荒地、未立木地の造林、深山の利用將又經理士保護土の問題に至るまで、林業のあらゆる方面に向つて爲すべき事は眼前に横はつて居るが、之を完全に遂行し其目的を達せんとするに

は經費を要することは勿論であるけれどもそれよりも其實務に當る處の人を養成することが最大急務であると思へつゝあつた、日本の林業界に在つては將校たるべき人はあれども下士がないそれ故に官民業共に之が實務に當る所の人を要求する事の切なるに拘らず此種の人物養成の機關がなかつた。只之に應ずべき方法として巡回講話と短期講習とが行はれて居つたに過ぎない。然る所卅四年に至り他府縣に卒先し、去かも天下に有名なる木曾に於て山林學校の設立さるゝに至り計らずも先輩の勸誘を受けて學校長の重任を引き受く事になりました與これが詳細なる理由に至つては本誌第一號の御覽を願ひます。

斯くの如くにして予は此任に當りしと雖ども創業の難かり加ふるに予が教育上に無經驗なる点よりして諸君の在學中幾度か不平不満を買つた場合少なくない諸君之を諒せよ。

予が在職中に於ける學校經營上の詳細は茲に之を陳へずと雖ども特筆すべき一二の事項は卅九年度より縣經濟に移りたる事は其一である。之れによりて學校の基礎は強固となり學校としての設備も年を逐ふて完備すべく輪奐たる校舎の新營を見るも恐らく兩三年を出で

まゝ。第二は卒業生諸氏の社會に於ける活動である言ふまでもなく學校の主体は生徒諸君にして諸君の卒業の成績如何に係りて以て學校の盛衰に關するのである故に予は卒業生諸氏の成績に就て杞憂を抱いた事がある。然るに之を實際に徴するに卅七年度以來今日に至るまで卒業生を出すこと四回、百餘名の卒業生諸君は何れも予が期待せしよりも以上の好成績を擧げらるゝに至りしは満足に堪へません。乍併諸君は前途に於て大なる希望を抱き、之れを小にしては自己一身の上達を計り之れを大にしては吾が林業界に貢獻する所なくはならん。而して智徳の方面に於ても自己の修養を怠らざらん事を切に囑望する所であります。前途せる如く木曾山林學校の創業時代の已に過ぎ、今や學校の基礎は強固となり總ての經營施設漸く完備の域に達せん事期して待つべきであつて在學生諸君に取つては最も幸福である。

茲に諸君に特に注意を請ふべき一事がある予が在職七年の久しき勤績し得たる所以のものは現在及び既往に於ける職員諸氏が後援者となつて熱心に予の職務を補助されたる賜である。諸君は諸先生の鴻恩を忘れざる事を望む。終りに臨み予は諸君の健康と萬福を祈ります併せて將來に於ても深厚なる懇情を受けん事を希望するのであります。



信州は林學の源泉地

Y E 生

歴史は次第に人種間の競争を避けて平和を求めつゝあるを証明し、「カント」の永久平和論が机上の空論にあらずして、堯舜禹禪々たる大平洋和の黄金世界を憧憬せしむるの時に際し、人類が自然と闘争せざるべからざるの變遷を實現しつゝあるなり。森林、荒廢の如き蓋し其一たるべきか、吾人は「サハラ」の大沙漠が嘗て鬱蒼たる森林なりしを、又近く「ヘイデン」博士の探検に依りて漢時代の樓蘭なる大都が僅かに千有餘年を経過したる今日已に「ロブール」沙漠に埋没され又激々洪水の人畜並に財産上に及ぼす危害の激甚なる誠に寒心に堪へざるものあり。

我國にありても此等重大問題を解決し、一面積極的に森林を經營して國利民福を増進せんとし、曰はく森林教育機關及び林業試驗場を増設すべし曰はく山川省及山川調査會を設置すべし曰はく何々、由來森林界に身を投じ青春氣鋭徒らに先人の後蹤を追ふて徳節補綴を快せざる者の多くは保護無き迫害の下に苦楚し肅殺の風氣を望みて自から屏息し、陽春の佳節に遇はずして萎縮したりき。然るを今此等の羈絆に接して衷心限なき痛快と安慰を覺ゆるを禁ずる能はざるなり。八割五分の林地面積を有する信州は中原の香稜と稱せられ、嶺が岳御岳其他一帯の山脈は巒々或は兀として聳立する所、峻拔の氣概として人に逼るの概あり、以て森林氣象を調査すべく以て植物帯を講求し得べし、更らに三天河川の源泉並に水路をなし、其潺々として湧き出づるや危巖の懸れるを逃れ、或は頑石の横はるを過ぎ幾多の小川を合せ、而して奔瀉澎湃一條の素練千山万嶽の間を逶迤して、一つは越の平野に一つは遠洲の中軸を、一は濃勢の二洲を編む千里浩々漫々として日本海と大平洋とに注ぐ、何れも政府直轄河川たり、以て雨量と流量との關係を看破し以て森林と水源涵養に關する高遠の事理を誘導し得べし、木曾の森林は天

下に冠、五樹蒼蔚の中を辿れば歩に従ふて緑愈々濃か

に、幾百の苔類は岩石を襲ひ、奇草珍花之を彩し山氣
鬱として迫る、以て地彼の土壤に及ばず關係並に生長
を論究すべく、以て天然更新に關する疑案を解決し得
べし、淺間山麓の人工美林の均整なる林相は以て収獲
表を調製し、受光伐並に間伐の程度に周密なる積算を
遂げ、其適歸する所を明示し得べし、種々の歴史を有
し而して二千五百尺の高臺に四隣幽渺の風光と應映し
て晴好雨奇風月各々觀を異にし、神思を搖蕩せしむる
諏訪の海は以て養魚を試むべく、以て森林美學を慨味
描破し得べし。

夫れ斯の如し、宇宙の大と壯と美と併有せる信州は、
叙上の調査研讀の資料何れも招呼の間にあり、一舉手
一投量の勞能く捉へて以て之れと親和し之れと同化
し得べし、宜しく山川に關する調査機關及教育機關は
凡て是れを此の高原に致して宇内を睥睨すべし、而し
て此雄大なる自然の教室より林學の源泉は湧々として
盡きせず、以て研究の効果は遠近東西に頌與し、崇高
偉大なる吾人の天職を完ふし、國民の平安福利を増進
せしむべし。完

林業家の自覺を促す

原 霧 外 生

晩近に於ける吾國林業の發達は實に著しき者なり。遺
林然り、保護然り、利用經理共に各其専門家に依つて
研究の道を開拓され殆ど間然する處なきに至れり。豈
林業の爲め之れを賀せずして止まんや。

凡う吾國が泰西の文物を輸入するに至りて以來、總て
の文化は遺憾なく吸取されたりと云へ共、あまりに吾
邦人が其吸收に急にして消化に疎なるの恨なきにあら
ず。故に其末葉を語りて根本を極めず。其表面を見て
裏面を探らず。誠に遺憾の事多しとす。

林業に於ても然り。吾國の林業専門家が甚だ幼稚なり
し吾林業界の爲めに殆ど献身的態度を以て汲々と其研
究に任じたりしは誠に深謝に値すと云へ共、未だ以て
遺憾の事無しとせず。うは以後の研究に依り完璧を期
する事難からすと云へ共、其林業に對する根本義の誤
られたる事こそ真に吾人淺學の沈黙し得ざるものあり
以て先輩諸氏に訴へ、林業家の覺醒を促さんとす所
なり。

誤られたる林業の根本義とは如何。曰く林業家が徒に

其現狀を探るのみにして其自然の起因を思はざるが爲
めあまりに實利に傾き林業の最も美なる点、國土保安
の一念を没却しつ、ある事之れなり。林業も一個の生
産事業たる以上之れを營む林業家が之をして最も有利
たらしめんと勤むるは理の當然なり之を個人的に見る
も國家的に察するも甚だ目下の要務たるぞ知る。然れ
どもこは甚だ淺薄の識なきとせず。真に末業を探りて
根本を極めざるの罪に處すと云ふべし。抑々林業の
起因は如何。人類未だ進まざりし未開時代には野に山
に至る處に喬木叢生し絶へて斧片を見るなき状態なり
しを、漸く人類の増加すると共に人智啓け。種々の用
途の爲めに之れを伐採して供給するに至れり。而して
以來種々の方法を講じて之れが使用の道を啓き、此處
に多少林木の價値を生じたりしや論を俟たず。之れ將
に林木利用の第一歩なり。然れども余は之を以て直に
林業の起因なりとするに躊躇する者なり。何となれば
林木直接の効用は以て林業の根本となすべからざれば
なり。

其の術を講ずるに至つて此處に完全なる林業の途は開
かれたるなり。故に林業の起因は林木の利用即ち實利
にあらずして。國土保安の事に存するや論を俟たず。
假令又林業の起因が如何にせよ、林業の國土保安に重
大なる關係を持つは吾人の日常之を知る處にあらず
や。國土荒廢して吾人何處にか其安きを得ん。國土を
保安する爲めの林業一實に高尚有美ならずや。之の有
美なる根本を忘れて徒に余の卑俗ある生産業と其燈を
一にして全ら實利の方面に汲々たるの必要ありや。生
産も必要なり、否急務なりと云へ共要するに副業のみ
根本の主眼目は國土保安にあらずして何ぞや。
利害の外に超然して全國土保安に身を委ね新鮮なる空
氣を繞りて林間を驅け巡り。林木と其生命を共にす將
に吾人の謳歌する處なりとす。
然るに今の林學なる者の數ある處は表面多少の此意を
傳ふる者ありと云へ共内實有利の一面に傾き、如何に
せば最も小面積の林地を以て最も多額の利益を得るや
と云ふ一事に心勞日も足らざるの有様なり。
而して林業を實地に經營する者に至つては眼中他なく
専心私利に汲々として國土の荒否は敢へて念頭に置か
ざる者の如し。

如上の林業如上の林業家にしうも如何の林業を營み得るや。思ふて此處に至る時吾人は實に國家の前途を憂へずんばあざざるなり。

生等今初夏の候關西地方に旅行し、吉野、北山を巡りて近江に入り其荒廢せる山地を見るに當りて實に言ひ知れざる觀に打たれ、眞に國土の荒廢を思はず眼前の小利に迷ふて國家百年の大計を誤れる細民の多きに驚けり。吾人は此處に斷言す。若し今日の林業家にして徒に濫伐を事とし、利害の一念に汲々たるに於ては國家の前途は實に近江に於て見る斯の荒廢せる禿山のみに時に洪水人畜を害し、時に旱魃米穀を枯らす之れ國家の前途のみ。

噫々憂國の士拱手爲す處なけんや。國土保安は實に國家目下の最大要求なり。而して之を全ふするは林業家の眞に自覺すること否ならざることあり。

然らば自覺の如何、眼前の小利を放棄し、自己の事業を犠牲に供して國土保安に勤むるにあるなり。

實業論

孟夏生 林 恒

余輩をしてこゝ暫し實業論てよ題のもとに余輩が思想

て後となり、彼の國に於て本なるもの此の國に於て未だなるものあり、故に此れが前後本末を云ふもの宜しく其の國勢を觀破して而して後論せざるべからず。

見渡せば廣原千里一望際涯なく、峻嶽万疊天に接し山は良材に富み野は美穀登り。河海亦漁獵の利あり況んや海灣の出入繁雜にして幾多の良港は海岸に散在し實に宇内に其の比を見ざるものは之れ我が大日本帝國にあらずや、之れ豈余輩が所謂其の國の形勢國土現況の實業に好適せるものにあらずや、況んや我が國古來の風習として實業國たるの資格を有するものあるに於てをや。

今や武力的戦争は其の局を結び今日は是れ實に實業的世界大戰の秋なり、武力的の戦争に非ずして機械的金力の戦争なり、此の激戰場裏に立ちて宇内に雄視せんと欲せば須らく財力に富み機械的の事業に精究せざるべからず財力に富み機械的の事業に至らんと欲せば又須らく實業に長ぜざるべからず、こゝに於てか國家は富強を以て顯はるゝ國は皆其の國の實業の隆盛ならざるはなし、試みに見よ、實業興らざる朝鮮は今己に亡びんとし實業振はざる清國は更に自動の活力を有せず、實業盛大なる英國は今や洋の東西を問はず雷轟電撃の

を吐かしめよ。

官途羨望の時代は既に過去に属し今や實業界に乗り出すもの日に益々夥多ならんぞ、經世の道、眞に實業より急なるは無く、致富の要、誠に實業より切なるはなし、されば天下の大勢を觀破し腕を進取有益の域に奮はんと欲するものは身を實業界に入れ勝を練り想を凝さざるべからず、如此者は只個人的たるのみならず苟も我が大日本帝國の隆盛を希ひ富強を欲するもの又實に實業を盛大にし以て骨體臥病の苦を嘗めざるべからず。

手腕の勞力を過多に費し比較的腦力疲勞の少きものは是れを生産的職業即ち實業と云ふ、腦力を過多に費し比較的手腕の勞少なきものは是れを生産的職業と云ふ、以上の兩職國家永遠の富強を謀るに於て未だ一日も此れなかるべからず、然りと雖も物に前後あり、本末あり、輕重あり、又大小あり、其の前者を捨て後に遷るは否なり、其の本を顧みずして末に走るも又否なり、此の兩職國家を維持するに於ては一日も缺くべからずと雖も亦自ら前後本末あらずんばあるべからず、然り之れが前後本末は其國の形勢氣質國土の適否、古來の風習、現況等により或は此の國に於て前なるもの彼の國に於

勢を振ひ實業興起せる北米は將に万丈の光輝を吐きて世界に雄視睥睨しつゝあるにあらずや、嗚呼實業の不振の國家の興亡隆替に關する又大なりと云ふべし。夫れ一家一財を保たんと欲せば相當の注意を要すべきは勿論なるに大家巨財を衛らんと欲せば幾多の倉庫と幾多の壯夫とを以て不虞に備へずんば可ならずや、況んや一國一州を守り其の獨立体面を維持するに於てをや、此の競争の社會に立ちて金匱無缺の邦國を永遠に維持し國威を宣揚せんぞ欲する者に於てをや、此の危機一髪の中にありて獨立体面を保たんと欲せば國先づ此れを備へざる可からず、蓋し之に備ふるは巨多の精兵を養ひ幾多の兵器を貯ふるに在り巨萬の財産を保持するに在り、然り而して精兵を養ひ兵器を貯ふるにも其の國の富に依らざるはなし其國の富は各人の資産に外ならず而して之の資産を生ずる原因を究めば正に之れ枚々汲々として實業を奮勵したる結果と謂はざるべからず、切言せば其國の富強の基は實業の振不振に關すと云ふに在り、是れに依りて是れを見れば實業の富強強兵の基礎たる事瞭々として火を見るが如し、然るに退ひて四十有餘年駸々として進みたる我國一般の狀態を見れば實に長足の進歩あり政事文學法律を始めと

學 術



八

曲線布設法

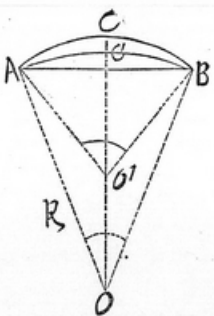
小松 教諭

凡そ曲線の緩急を示すには一は曲線の半径の短長によるもの他は百呎の弦が圓の中心に保つ角度の大小によるものとあり前者は歐洲各國に行はれ後者は北米合衆國加那太地方に専ら用ひらる。

曲線の緩急は圓の半径に係るは明にして即ち半径大なれば曲線は愈緩にして半径小なれば曲線は急なるは極めて暗易き理なるべし。

弦の圓心に保つ角度の如何により其緩急の分るゝの理は圖により説明すればABを一定の弦とすれば其半径大なれば弧ACBは愈弦に接近し弦ABが中心に立つ角は愈小となる半径小なれば弧ACBは弦ABを去る事大にして中心

じて教育衛生其他百般事業皆一新面目を見るに雖も獨り實業の進々として比較的未だ著しき進歩の實績を示さざるは豈慨嘆の至りならずや、況んや林學の如何なる科學なるかを解せざるの人あるに於てをや。
 施政の術如何に善良なるも法律の條文如何に完備せるも一國の元氣となり神髓となる實業の發達を見ざる時は恰も砂上に樓閣を築きたると一般何ぞ安全に獨立維持するを得んや、あゝ今の時に於て實業を盛大にせずんば幾多の辛苦經營より漸く築かれたる樓閣は早晚顛覆の慘狀を見るに至るべし、何とされば是れ其の前後本末を誤れるが故なり、豈思はずして可ならんや。
 今や我國の實業は建設の時代なり、此の幼弱なる不振なる實業をして一轉興隆盛ならしめ彼の富強を以て勝ち誇る赤鯉碧眼奴輩をして戰々慄々失色瞠若たらしむの責あるものは今日の青年輩豈我等の未來にあらずして又何れにか斯輩を求めん。
 あゝ神州の實業學生たるもの益々自己の學業を勵み自己が盡すべき責任を全ふし聊か皇恩に報ひんと欲して一意専心此の所に着眼し進取の氣象を養生し一致團結力を披瀝し國家の土盤たる實業を發達隆盛ならしめずして可ならんやあゝ可ならんや。終り



に立つ角は愈大となる即ちθに於ける中心角よりCに於ける中心角は一定長の弦に對する中心角は半径の大小に

此二式により半径を知りて曲線度を算出し曲線度を知りて半径を知る事容易なり又曲線度法によれば曲線の長さを算出する事簡單なり即ち弧度法によりてLを曲線長Rを半径Cを中心角とせば
 $2\pi R : 360 = L : \theta$
 $L = \frac{2\pi R}{360} \times \theta \dots \dots \dots 3.$
 とすれば同長なり

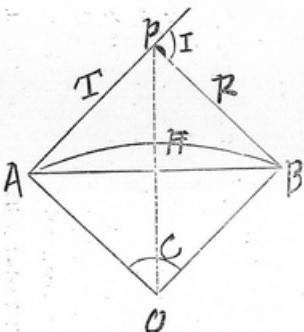
従ひ其値を大小にすべく同時に一定長の弦が中心に立つ角度の大小は曲線の緩急を判断すべき標準なり。
 普通百呎の弦が中心に立つ所の角度を曲線度と稱し其角度一度なるときは一度曲線、二度なるときは二度曲線と云ふ、今百呎の弦が中心に保つ所の角度により曲線の緩急を示すものとせば

$$\sin \frac{\theta}{50} = \frac{D}{R}$$

にして即ちθは所謂曲線度にして普通之れをDを以て示す故に

$$\sin \frac{D}{50} = \frac{D}{R} \dots \dots \dots 1.$$

$$R = 50 \cos \frac{D}{50} \dots \dots \dots 2.$$



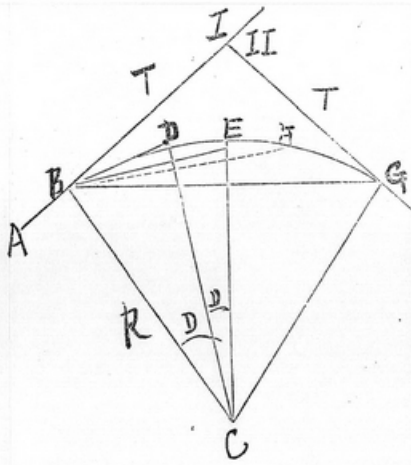
線は互に同長なるを以て角I A Bは交又外角Iの半分
 に等し又圖上より次ぎの式を得べし

九

圖に於てA P、B P、接觸線Iを交又外角、Cを中心角、而して接觸線は半径に垂直なれば角A P Bと角A O Bとは互に補角にして従て中心角θは交又外角Iに等し、接觸

$$T = R \sin^2 \frac{C}{2} + R \sin \frac{I}{2} \dots \dots \dots 4.$$

此等の公式は曲線布設上必要なる原理を示すもの也次ぎの圖に示す如く二直線A IとI RとがIにて交又せり此交角の中にB D E F Gなる弧を畫かんとするに當りD、E、F、等の各點の位置を定めんとするにあり第一にIに於ける交又外角を經術儀により正しく測定



Cより常にRの距離にある點を定むる時は此弧線は決定することを得るなり。
他の方法は次號に述べん。

本邦の農法及勞力利用上の缺點

有川 教諭

日本の農業と謂へば極めて小經營で小區域の地に多くの勞力を加へて耕鋤する所謂勞力的集約の農法であること云ふことが第一の特徴として數わらるゝことであるが然らば他國に比してどの位集約なる勞力的の農業で又其勞力の集約なることが實際經濟的に利用されつゝあるかを研究して見ることに必要が有る」そこで先づ世界各國に於ける農耕地の面積を比較して見ようならば日本は人口一人に對して(農民一人でなく全人口なり)壹反六七畝獨乙は四反二畝英國が四反四畝伊太利は八反五畝佛國は九反六畝米國は實に六町二反六畝と云ふ割合であるから日本の耕地は他國に比して非常に狭少である然らば日本の土地は一反七畝で一人の食料を生産することが出来た利は八反五畝を要し米國は六町余を耕作しなければ一人を養ふことが出来ない即

すべし半徑Rは任意に定むる事を得るものなれば第四式により即ち

「 $T = R \sin^2 \frac{C}{2} + R \sin \frac{I}{2}$ 」によりて接觸線の長さを求めIよりIB、

IGを測定して其算出せる長さによりBとG點とを定むべし即ちBは曲線の始點にしてG點は終點なり次ぎに第一式により半徑Rを知る時はD角を知る事容易なれば之れにより角I B Dの二倍なり故にD角の値を知りB點に經術儀を水平に据ゑ遊尺を零度に合して視線をB I線に一致せしめDを丈尺回轉しB D線を定むべし、而してD點は百呎の所にあるを以てD點は直に決定す。

次にB點はB DよりDを偏倚せしめD Eを百呎に取る時はEとなるF點はB Eより更にDを偏倚せしむべく即ちB I線よりDを經術儀を回轉しE Fを百呎に取ればF點は知ることを得此の如く順次進みて遂にGに至りD、E、F、G、等を連結する弧線の位置を定むるなり

此れは中心Cを見出すに困難なる時に用ひらるゝ法なり、若し平原にしてC點を決定する事容易なれば中心ち日本土地の生産力は他國に比して大に優て居るか云ふに決してそでではない之れは單に全人口一人に對する割合である

次に農家一戸に對する耕作面積はと云ふに日本は壹町歩に充たない漸く九反余に過ぎぬが歐米地方の農家としては五町や十町を耕作するは極めて小農で百町以上の耕作者が多く千町歩以上を耕作するものも決して珍しくはない
斯く耕地を比較して見ると西洋の農法を見ない日本農民の目には如何にして彼等は斯様に廣大なる土地を耕作するか其眞偽でも疑ふ程であるが又續て彼等をして日本人の農法が壹戸に對して一町に充たない小農たることを聽かしめたるならば彼等は又日本の農民は如何にして生活することを得るかを疑問とするだらうと思ふ併し此農法の相違なるものは元來日本の土地が狭少で耕地の少ない上に人口の稠密なることと幕政の方針として農民が他職業者に比して比較的に多いのと歐米は土地が廣い割合に人口の比較上稀少なることも確かに原因には相違はないが他の原因としては農業の經營方式や勞力使用法の相違と農學應用上其發達程度の然らしむる事が主因だらうと思ふ

通運搬の道路を完全にする位には何の苦もなき仕事で其改良の爲めには政府や府縣でも獎勵し有志も奔走し志願に富んだ日本人には凸凹や變曲せざる道路又は不定形の圃場を嗜むと見えて中々改良に着手しないが、道路や圃場は決して寶物や飾り物ではないからして風流を貴んだり古物保存をする必要もあるまい之れは乾度農民の願望に土地改良や耕地整理などの機能が知れ渡らぬからであらう聊も耕地整理土地改良道路の改善には種々の利益がある先耕地整理に就て其大略を述べよ一ならば從來の小區劃不均衡形なる田圃の畦畔は取除へて整然たる劃と改めて耕作を便利にして不便極まる畦畔的の曲灣の道路を改めて交通運搬に便なる直條道路とするからして之れに依て生ずる利益は中々多く即灣曲せる畦畔を取除くから耕地面積は從來よりも増加する其増加する面積は如何程増加しても政府では決して之れに課税はせぬ又土地は元來專有的の性質を有して居るもので人爲にては決して増加せぬ又貴重なるものだから此土地を利用することを得る丈でも未來永久の利益となるので之れは國家から見ても亦個人經濟から見ても實に結構なることである其上に整然たる大區域となるからして器械や畜力を昌に應用することか容易で貴重なる人間の勞力を除き從て農具の改良も發達し比較的に大面積を耕作することが出来る

斯く言へば日本の小經營なる農業は廢めて英國や米國の様な大經營の大農組織に變更するが爲めに耕地の整理を勵むるか云ふに決して是よりではない粗放の大耕作農業は吾人の贊成せぬのでかゝる組織にしたならば箇人の純生産は多からんかなれど一定面積より生ずる粗生産云ふものは小經營なる集約な農法に比して劣ることが數等である其上農場の監理にも手数を要し固定資本も多額を要するから貧乏なる日本の農家のとても堪へ得ざる上に日本國は他國に比して人口の稠密なるは世界稀に見る處だからして農産物の多額を一定面積より收穫せねばならんからなる可く集約的の農法を以て出來得る丈多額の粗生産を生せしめなければならぬ又勤勉にして且プリアなる小作人や小農の耕作土地を擧げて大地主の好餌にすることを欲するのでは無い國家の上から見ても箇人の上から見ても國內に小作人や大地主は少なくし中小自作農家の多いことがよろしいのである此理論は各國の農政者も贊する處で米國の如きも近年次第に耕作面積を縮小しつつある

子の希ふ處は單に從來の様に器械や畜力を使用しないで人間が器械や畜力の代用をなすよ一不經濟な仕事はやめて人間の勞力をもつと價值ある高尚な方面に向け勞力の報酬を一層多額ならしめんことを欲するのである而して之れに依て生し出したる勞力の利用は多方面にありが余は之を副業に利用せんとするのである即農産物の製造より養畜なり養蠶なり養禽養魚の飼養に至る迄或は冬季に於ては染色なり織業なり土地に依ては寒天水豆腐の製造なり何なり其地に應じたる副業を起したならば一層有利ではあるまいか近來の農業は各自専門的に流れたるの結果として單に一種一類の栽培に従事して居るが實は危險極まることで該農作物が農作物で高價なる間は意外の利益を取め得るも不幸にして凶作に遇つたり價格の下落するよ一の事が有れば一時に大失敗を招くことになるのであるから單一なる農法よりも混淆農業の利あるは此點にあるのである

數種の企業をすれば一種の企業に不幸失敗しても他の方面に於て之れを補充することか出來る即氣候の關係上から米麥作に於ては減収を來たしても養蠶に於て上結果を得るか又は他の副業に於て利益を得るからして決して破産するよ一な患はない

其上副業加工の有利なることハ養蠶を見ても知ることか出來る農家が單に田圃を耕作し桑圃を栽培した丈では利益も薄へか其桑葉に依て養蠶を營み取酬を以て製糸機業を經營したならば之れに依て生ずる副業の利は決して少くはない殊に其勞力は餘剰を利用したものであるからして眞に圓儲けてある

以上にくだしく陳述した通りであるとするれば日本の農家は出來得る丈器械や畜力を利用し一方からは耕地の整理改良を施して不經濟なる勞力を除へて昔重なる勞力は他の副業に利用するよ一にしたいで斯くすると一方には農界の勞力が他の方面に奪へ去らるゝことが有ても決して憂ふることがなく耕作反別が倍加するとしても地力は決して衰亡することがなく生産は尙更増加して農家は次第に餘裕を生ずることになり從て子弟の教育も充分に施され農法も改良さるゝことにな





偶言

双木生

諸君覺醒を放つて社會を遠觀し瞑目して考一考せよ。虛榮心益々發達し奢侈の風潮は滔々として流露し質朴の風衰へて遊惰安逸に陥り勤儉尙武の氣象日に消磨するものゝ如し。殊に青年學生輩中進取の氣象に乏しく質朴勤勉を旨とせず徒らに虛榮心に走せ安逸優柔に流れ奢侈を是れ事とする者多きを聞くに至つては我帝國將來のために慨嘆すべき現象ならずや。殊に日露戰爭の瘡痍尙は未だ癒せず三十億の外債は國民の重き負擔なり。經濟界日に切迫を告げ物價日に騰貴する今日國民は大に警戒を要し勤儉尙武の氣風を振起せざるべから

し吾人は勤勞に由て大なる慰安を受け日常觀喜に滿てる生活を送るを得。諸君終日懶惰を事とし朋友の嘲弄を受け家に入つては父母の叱責を受け堂に登つては師の鞭撻を蒙るものと終日勤勞し流すへき限りの汗を流して一日の業務を終へ以て窓外の風光に接するの時眩月高く懸りて清光を送り四圍の山川風物皆な慰安を吾人に與ふる者の如し。吾人這般の感想果して如何實に魂魄は飛んで雲の邊に徜徉するの感あり。懶惰に慰安なく勤勞に慰安あり前者と後者の差は只勤むると勤めざるにあり豈勤めざるへけんや。而して尙ほ勤勞は恩徳を征し貧困を征し遂ひに吾人をして向上せしむ。羅馬の詩人ダハージル歌ふて曰はく「勤勞は一切の惡魔を征服す」と實に「リッコン」の汗は四百万の黒人を救ひナイチンゲールの汗は亦十字業とあり、二宮尊徳先生の汗は遂に公益となり「ベスタロツヂ」の汗は貧民教育の徳となり。今や直下風をなして遊惰放佚に傾くの時諸君青年の責任や誠に大なり。而して青年期は熱情旺盛の時にして歧路に彷徨ふ旅人の如し。危ひて危ひ哉諸君は強固なる意志と銳利なる良心とによりて群起する一切の心賊を征服し勤勞の徳性を涵養して帝國將來の責任を荷はさるべからず。曾て米國人大統領

す。然るに何ぞ徒らに流行を追ひ奢侈を競ひ我が國正貨の海外に流出するをも顧みず高貴なる舶來品に虛榮心を満足せしめんとし爲めに我國の現状を以て益々悲觀の境に陥れんとす。豈榮心せざるべけんや。願ふに奢侈は虛榮心の發現なるを以て之れが風潮に適せんには遊惰安逸の敵たる勤勉勞動の徳を以てせざるべからず。(一)勤勞は情慾を征服す吾人専心一意事物に勤勞する時に於ては野卑なる情慾は遂に發生するの餘地なきも從事すべき業務遊ぶべき適當の方法なき時に於て下劣なる情慾は群起して遂に吾人を誘惑するに至る。蕎麥屋に蕎麥を食はんか、牛肉屋に牛肉を味はんかなと現在に酔ふて希望を没却し遂ひに迷路を踏みて昏沈の情眼を貪るに至る。語に曰はく「勤勞は潔白と道義との擁護者にして心の純潔を保ちて惡魔をして乘するの機無からしむ」と諸君以て如何となす。諸君は眞に國家の中堅となり將來大に活動を要するにあらずや可及的筋肉を勞して強固なる意志と健全なる身体とを鍛練せられよ。下劣なる情慾何んぞ此の勤勞の徳に勝つを得ん。情慾を征服するの道實に勤勞にあり。(二)勤勞は遂に情慾を征して慰安を與ふ勞動なくんば休養なし休養の趣味は勤勞の人に於て始めて知るを得へ

「ガークキールド」青年に教へて曰はく「屋上より落つる水滴の細雨を見よ其南側に落つるものは「セントローゼンス」灣に注ぎ北側に落つるものはメキシコ灣に朝す。然り而して斯くの如く南北數千里の遙きに到るものは實に寸分の差ありしのみ。微風の一搖飛鳥の一轉以て二水の運命を決するに足る。嗚呼青年諸君よ諸子の生涯も亦これと等しきものなからんや。一書一友の選擇、想像の高卑、思想の正邪、決断の良否、其他些少の慣習等之れ實に意に介するに足らざるが如くあれども皆以て諸子が生涯の變更點なり豈慎まざるべけんや」と。言々句句實に抉露の感に堪へざるなり。諸君諸君の感想果して如何已れの責任に顧みて勤めざるべからず。勞せざるべからず。一切の惡魔を征服するの勇者は勤勞なり。

曾山獨語

高樋博
箱舟輕く棹さして平和の氣高く照らし白銀の小波跡に遺しつゝ、乗り出したる暮無き汝は樂園の戸を開かんと

してか辛挫強くも。
怒濤怒らにして押し寄せ只々瞬きのつかの間に脆くも破れて悲しみの境に遇へり然れども全慈の天は未だ汝を全く見捨て賜はず、ダゴタ號の夫れには優りて辛くも土筆が岡の近き邊に導き給ひて一週十有半月にしてなよしくも又再び起つ能はしむ、殊勝なる汝葉舟夫れ自重せずして可ならむや。

余駒場の野に在る二ヶ年有半命せられて秩父林業に職を奉ずる事幾月、本多博士の慈愛深き監督の下に廣遠雲の如く霞の如き無慮三萬町歩の經營主任を代理せしめらる。

嗚呼一躍して過分の大任を帯び何たる幸運兒乎泣いて江息に報じ自重以て大命に悖らざるを期す可きなり。然るに己れを知らざる輕薄の擧は甚しく天の遺麟に觸れ鐵髓忽ち下り激逐急にして辛して僅に身を以て遠く江の南隅養生園に潜む事四ヶ月有餘、今亦流されて木曾の郷裡に漂ふ。

又分を知らざるもの、應報の程こゝ後の日の良き見せしめなるへし。

昨年九月頃の事にてもありしか余或る米國人の案内を命せられて山梨埼玉の兩地を經廻つたる事ありしか氣の投合するものありて夜學の往來は勿論途中にて逢ひし時も訪問せし時も又尋ねられし時も恰も約東にてもなし置きたるか如くブロークンなる我々一流の會話を交へて互に面白可笑しく興しかり居たりしか其時我々の中間にては大低の事は理解出來たりしも倍て此度突然新來の米人に接したりしより随分飛んでもなき間違を仕出して抱腹せし事も屢々なりしが中にも或夜余は彼國の利用學殊に伐木運搬の大仕掛なる由を語り是非一度見度き事など得顔に話し續けたるに肝心の先方へは全く明からさりと見えて頼りに妙な風をかし眼を細くし太くし白黒して居たりしには自分ながら其厚顏の程ホトホト愛想を盡かしたり。

英語と云へは之れからの時代は其必要を感ずる事益深しと雖之れを修得するは又中々の難事なれば大低の者は學校を卒業すれば直ちに放置する様になるものなれど之れは誠に惜しきことなり。

林業上には専ら獨乙語を用ふる事なりしも吾人は大低の處にて高を括り英語丈けにても少しく用の足るまで勉強せる方却て得策なるものと信す、又近頃は二三の英辭書も出來たれば其一班は該書に依りて研究する事國語を以て我地名を解釋せる趣味ある二三の例を示さん

甲州の某地を過ぎりし時の或る朝の事なり、早々より出渡の準備として裝束してありしに彼の米人より馬の置袋を袋に入れて顧み可くコツクに傳へられん事を頼まると余はに話して顧みて輕々しくもオイオイト二三回も續け振に呼び立てしに夫はコツクにはあらずして此の處の一吏員なりしかは俄に激怒憤聲オイトは誰か事乎余は汝如き碧眼の小使にオイト呼ばるる管なし余は本日所長よりの命に依りて案内致す可かりしも斯くの如き禮を知らざるものに案内などする事能はずと氣焰中々に劇しく余は只々仰天して暫時は呆然たりしか斯くなりては致し方もなしと赤面して只管中心過ちを測したり、其中に技手某氏其行き違ひなる事と余は小使にあらす本多先生よりの命によりて案内するものなる事を説き聞かせたれば全く解いて以前の騒動も忘れたるものゝ如く愉快に豫定の行路を辿りしかさても間違は如何なる邊にあるか知れぬものなれば言葉は慎む上にも慎まねばならぬものと深く心に銘したり、如斯事こそ所謂「木ちがい鳥ちがい」なる事の好適例なる可し。

丁度其頃なりし駒場より程近き或る學校の夜學部へ通ひて英、獨語を修めしことあり時に一人の能く余と意きものなり。

聞く處に依れば彼の有名なる農學博士法學博士及び米獨、の哲學文學の兩博士なる新渡戸先生は或は人間以上のエナジーがあるやも知れされども一方には又其攻究の巧妙なる又預て力ある事なるへし。

今其一例を挙げんにナイフと云ふ字を覺えたるとせん
に凡て他物と比較して之れはナイフより大なり或はナイフより小なり或はナイフに似たりとか似すとか又友人に逢ひたる時は君ナイフ有りや君のナイフは僕のより高價なりとか廉きとか力めて多く使つて見、又單語等は日々修むる數を定め置き、夫れだけは何なる事あるも熟得し、又夜ベツトへ入りし後も繰り返して暗誦し若し其中に不確なるものある時は幾度も起き出て夫れを確めた后安じて眠に就かれるとか之れ等は宜しく鞭を踏まざる可からざる事あり。語學にて聯想せしが彼の鳥井龍藏氏夫妻より世に喧傳せらるるに至りし蒙古語は日本語と酷似せる處より恐らくは同一語系に屬するものなるへく又文法の如きもテヌハの使ひ工合まで同じであるとか或る書に見たり而して今彼の國語を以て我地名を解釋せる趣味ある二三の例を示さん

東京の駿河臺のヌルガは蒙古語にて水中の高洲を意味し東京は元海にて駿河台丈は水上に現はれ居たより名づけたるべくと思はる。

又信濃の姥捨山は姥を捨てたる處なりと云ふ事古き歌記録等に殘れるが姥捨は蒙古語のオボヌナなる可く蒙古語のオボは石を祭る處、ヌナは里の意味にて姥捨のある處を更科と云ふがナラは蒙古語にて月の事シナは善き所と云ふ事にてナラシナは月の名所と云ふ事なり。又田毎の月と云ふ、田毎は十三と云ふ意味にて彼國にては昔、人を葬りし時周圍に月に形どりて十二の石を置き中央一つを置く風より出でたれども今は石を祭るには壇を築き十三壇の上に祭るとか若し田毎に十三の田ありとせば彼此偶然にも合致したる譯にて極めて面白き事なり。

是等は全く日本語に當て難める時は少しく可笑しく聞ゆる様なれども言語學上より見たる時は又頗る趣味ある事なる可し。

雷に語學のみに限らず凡と常識の修養は云ふ迄もなく必要の事なり、林業殊に野外の事業に従ふものは實に詩的なる月、星、雅美なる花、粗野なる鳥獸、又愛すへき虫魚を目の邊り見て自然を友とし樂しみを得るを

以て真に幸福なり。

然れども今若し一步を進めて天体運行の狀、星塵の配列、花虫の愛らしき動靜、生涯に關する智識を有するならば如何に其無限の趣きを味ひ得る事ならん。余は出來得る丈常務の外の余暇を利用して自然研究に入らんと欲す。

現今世界に於て發見せられたる學名を有する動物の全數は三十八万六千餘種(米人バツカド氏は二十五万種其五分の四は昆虫なりと云ふ)にして其四分の三は昆虫なりと云へば吾人に關係深き昆虫の數は實に三十万種にも近き驚くべきものなり。

其の夏日蔬菜葉上に飄々たる白蝶は菜葉を食する蠶蛉の成虫にして豫群の萌芽としたる優曇華は蚜虫を食して農家を益するくさかげらうの卵なり又昔に二十八個の黒紋を帯べるてんどうむしだまは茄子に馬芥薯等を食して植物を害すれども七星を帯ぶるなりほしてんどうむしは害虫を捕食する益虫なり。

同じく之れ無害の虫類なれども如斯各々天職を守る處を見れば天然の作用頗る妙にして又彼等の生涯は真に愛す可きものなり。

或は水中に小魚を逐ひ小虫を捕食する田鰍、海上を疾

する海蛛、黄脊隼んで敗軍を駆る蜻蜓、幾千の大軍方向を等しくして數類に寇す飛蝗、糞尿を食して肥料を却せしむる、をながうち或は路上の腐敗物を掃除するまぐろこがね砂虫に滿斗狀の穴を穿ちて其底に隠れ他虫の陥入を待つ沙椀子、十數年の地下生活をなし世に出て僅々數日にして死するかげらう等其狀千差萬別なれども其目的とする處は一つにして天命の儘に墓無き生涯をなす又愛す可きなり。

高さ四百尺に至り周圍百九十尺に餘り雄々として數里の外より望み得る米のギガンテヤ一樹占領せる面積三町歩に及ぶ印度のバカン樹良幹幾丈齶蒼として神靈の深遠なるを傾かしむる巨杉、美花を開く櫻、香氣を放つ梅、華美なる牡丹、芍藥、黄金色なる菜の花より奥深き山邊に可憐なる花を閉く桔梗、秋風に撫でられて野の隅に生ずる尾花、きりぎりすを聯想せしむる、ぎばうし松虫草、庭園日蔭の地に生ずるにはすきごけせに苔に至るまで天分に私淑する處實に愛す可きなり嗚呼草木昆虫のみを以てしても尙且つ自然界は大に吾人の友に廣く且つ多しと云はざるを得ず實に自然を友とするものは幸福なる可し。

自然を友とするものは真に幸福なり然れども余は百尺竿頭數百歩を進めて宇宙を友とせんと思ふ心切なり。而して今余の宇宙觀及宇宙に對する考を呼び起す時は地球の面積は約三千三百萬方里ありて赤道に於ける周圍約一万里なりと云へば其の大なるに驚く若し吾人が赤道に沿ふて地球を一週せんと言定せんに晝夜兼行日に二十里を進むものとするれば僅か一年四月十五日にして遂行する事を得。

又光が一秒時に走る速度は七万六千里なりと云へば一秒時に約七回半を廻る勘定なり。

玆より云ふ時は地球の大きさも大低知れたるものなり然るに此の地球と太陽との關係如何と云はんか太陽は發熱せる球體にして内部は中圓と稱する高温の氣體を以て成り其の氣球の密度は空氣に一倍半し中圓の外皮は専ら熱原をなすものにして其の外部は色圓と云ひて紅色を帯ぶ。

色圓の外層に光圓あり雲狀をなして四方に光輝を發す而して耀光と稱する極めて稀薄なる氣球を以て包圍せらるゝ事恰も我地球に於ける空氣の如くにして七万度の熱を發し其大さ地球に比して百三十万倍すと其大さ及び其組織を想見する時は太陽が吾人の世界に大なる

勢力を致す又怪しむるに足らず。
而して其巨離は實に三千七百萬里なりと云へば本邦の普通列車の速度を以て晝夜兼行五百年を費すに非らざれば到達し能はずと此の二者の關係たる己に吾人の想像の以表に有り。
然れども是れ丈けにては未だ宇宙の幾百千万分の一にも及ばず。

吾人が空靜かに澄み渡り森羅萬象眠れるが如きの深夜満天の星辰溢るゝ許りに煌々時獨り露光る野の小徑に立ちて大空を眺むる時は宇宙の雄大なる神力の偉大なるに驚かざる能はず。

然るに若し吾人の双眸に集まる巨億の星辰を此の大宇宙より取り除きたりと假定せんに果して如何
吾人の想像は最早之れ以上に及ばずと雖近天文學の教ふる處に従へば之れ僅に大海の一粟大森林中の一本にだも値せず。

然り一秒時に地球を七度半以上を廻り又僅々十六七分を以て太陽に往來する光の速度を以てしても幾十百年の時日を費すとも尙ほ宇宙の彼岸に到達する事能はずと云へば只吾人は僅に嗚呼宇宙は偉大なりクリートルの力は無限なりと云ひ得る可きのみ。

を渡るの時、靜に靜に暮れ行かんとする寥々たる蘇山の秋を眺めて立てる時、此神秘的美はわれをして過し方行く末を有形に無形に聯想せしめ思ひをはしなくも亡友の上に乗せしめぬ、君は春秋多き身を持ちて、去りぬる二年の昔、文月の末つ方、黒川河畔に永劫の歴に入りぬ、われ君の死を思ふ毎に、言ひ知らぬ悲哀の情思に迫り、轉た人世の悲惨なるを思ふ、君や眞摯の人然も慈悲なき因果によりて、遠く行きましぬ、實にはかなきは人の運命哉、君や何處、思えは夢の如きか、たごへ泡沫と生し、泡沫と消ゆる命たりとも、さりごはあまりに美はしき君の短生涯なる哉、あゝ君、遠く行きまして、又現し世の人に非ず、君や幸あるか、人世未だ老いざるに、早くも玉帝が膝下に招かれて、風清く氣爽はしき城山山下に、永久の眠たゞたゞ穩なり想ふに、宵々の松風、樂しき無名の夢を護りて、若下の人と共に原の世の、儼なくして、世の人の覺めざるを囁ふながらんか、君行きまして日猶は淺き心地せらるるに、亭々たる綠樹凋落の色をなして、白玉樓中君を忍ばしむる事いや深し、瞑目にして靜に默想すれば、變平たる君が言容剪翫として目前に躍る、あゝ美はしき君の短生涯、君逝くと雖水に神に生く、仰ひて天に

懸て此大空中に懸る粟大の微塊上に細菌の如く生息せる吾人は實に慕無き生涯を送る處の極めて憐れなるものなりと云わざる可からず。
若し此の大宇宙を創造したるクリートルの眼を以て吾人の聲譽を修飾し名利に驅逐する空位に得たる處を望見せしむれば恐らく嘖飯禁す可からざるもの有る可し。

然りと雖草木の各にして天職を全ふするとせば吾人の生涯も決して無意味に生存するに非ず大に天職に向つて奮闘し以て天分を完ふするに努めざる可らず茲に於て吾人は惑ふ吾人の天職は果して那邊にあるや曰く他なし。

吾人のベストを盡して天命を待つ。
之れ總て大宇宙の一員たる完全の資格たり又クリートルに對する吾人の本能なるべきなり可歎。
丁未九月七日夜 孤燈の下にて

亡友を弔ふ

黄昏告ぐる鐘の音、一件又一件、隱々として木曾河畔

訴ふれば天蒼々として音なく、然して地に哭すれば山河茫茫として響なし、さるにても怒み多きは無情の風はかなき空蟬の身なる哉、謹んで君を弔ふ。

出鱈目片々

若林花冠者

◎春去り夏往き秋來りて而かも夫れ半はも疾く過ぎつ吾人は秋を最も好み以て理想のシーズンなりとす、他あるなし、之を春に比して例へんか、春はお轉婆娘の夫れの如くして、秋は淑やかある早乙女の如し
◎春は唯何んとなく陽氣にして、秋何處となく泉床し春若し櫻其他の草花を以て誇らは秋には之れに相呼應する紅葉、七草のあるあり

◎猶且つ春の季は、當年の萬葉の未だ初歩にして向上を應り汝々として晏々たらずに反し、秋は既に半年の苦効なり遂けて、四邊豊年、万歳を誦めて凱歌を奏するの時、何れか是何れか否か？加之秋は所謂天高く氣澄むる季、以て運動の最適期たり、心身共に善く練磨するに適へるの理想的シーズン、諸氏夫れ勵めよや!!!

◎九月廿日以來長野市に於て開會の一府十縣聯合共進會も餘す所僅か數日、日々の入場人員平均一万以上すして六十万になん／＼とす、最初の豫想は五十万なるに之を越す事十萬餘、此點に於てさへ既に成効せるに近し

◎且つ其規模に至つても從來の共進會に未だ且つて見られざりし所の特許館、蠶絲館の設立さるるあり、吾が信州の田吾作連之れに依りて多少なりとも文明風に感染し、新智識を呼入し得たるに相違なかるべし

◎共進會と相提携して長野市縣町に開設されたる長野縣教育品展覽會、之又頗る盛んなるが如し、教育の普及に於て全國に覇たる本縣にしてさもあるべし、其が出品物は其中にありても殊に其精を抜きたるものにして見るべきもの多々ある中に吾が校の出品物たる木曾運材の模型は世にも珍たるものとして場内唯一の呼びものとなり新聞紙は筆を揃へて稱揚す

◎觀覽者には高貴の御歴々も少からず、誰となく驚きの眼をみはつて仔細に注目し之れが爲め觀覽者に吾が校の名の深き印象を興へたるは疑ひ無く、世に吾校の眞値を廣く紹介し得たるは吾人の極めて多とす

日頃の宿願を披瀝すへし、是他かし、新築の運びの曉には奮勵一番、運動場の面積を、少くとも現任運動場の倍を探り以て本校運動部中に大々の野球場を設立すへしとの意はなり。

◎言甚だ暴に似たるが如けれども、之れ吾人が眞面目なる提議にして、敢て不可能の議にあらざるを信ず眼を展ひて本邦、現下の運動界を見よ、數知れぬ運動の其中に在りて、天下の人氣を一身に吸集し其勢力の流水の如く、發展の餘地、滔々として無邊なるを知らずや、嗚呼、野球なる哉／＼。

◎今や東都に於けるベームの趣味は老幼婦女に至る迄も解せられ甚だしきは、横濱に在る職工、労働者にして此技の規則に通せざるは無く其各チームの投手、捕手を立派に評するの能を有するに聞かば豈驚かざるを得んや、野球の趨勢は實に斯の如し、其末來を察する、又難からざるを知る。

◎吾人は時の流行兒たるを欲するものにあらざると雖も然かも、斯の種の學校に於ける、此の技の設立、敢て珍ならざるごなし又必らずしも不可能に屬せざる以上其設立を熱望する者豈獨り余のみならんや。

◎若し夫れ果して設立するの舉に出でんか、吾人不肖

る所

◎本年の聯合運動會、吾校、庭球部選手練習不足の爲り且つ大關株の面々二三病氣の故を以て参加せざりし丈ならん、果しなくも敗れたるは是非もなし、勝敗は武將の常過去は忘弊して須らく來年あるを知れ

◎一校の期望を負へるチャンピオンよ、必らずしも之を以て心落す勿れ、猛虎の勢を以て技を練り來るべき來年を待つて、宜しく仇敵を蹂躙し以て敗辱を注ぎ本縣に於ける覇を掌握せよ、!!!吾人遠からず校を去ると雖も、母校の武運割目して其將來の奮闘を見ん哉。

◎本校運動部の刻々盛んになりつゝあるは喜はしき現象と云ふへし、本年四月より弓術部は置かれ學校裏の空地も之れが爲めに活用せられ、道行く人の歩を止めて覗く者多し、其他、器械体操、木馬、平行棒等の新設さるゝありて練体の具殆んど整へるに似たり。

◎身体の強は本校生徒の生命なり、江畑校長の賢案今更ながら敬すべし此上猶も健全なる發達を望むや切◎學校の新築は曖昧に屬して更に其要領を得ずと雖も其れか期も又遠からざるが如し、此時に當りて吾人

なりと雖も野球狂を以て自ら任するもの、又吾々同人にも野球通の少からざるあり、何時たりとも來つてコーチャーの勞を辭せざらん、豈快なりとせずや、!!!阿々、茲に及んで敢て問ふ校長先生、外諸先生並に校友諸氏以て如何とす。妄言多罪

◎魚芳と云ふ料理屋、寄宿舎、と相對し朝夕、三杯を弄し俗語を放つ、之れが爲め吾々の直接に間接に蒙る打撃夥しく、翠成化の染入するも防ぐへくもあらす、縣の方にては如何とす能はざるものによりや其れにしても學校の新築の一日も早やかれと思ふ。

◎天長節より寄宿舎各室の爐に火が入る、吾人ズクナシ黨の大喜悦、同室の者開鑪として夕に爐を圍ひ其の日のありし事共を語り、ゴタ八百を吹き立てて互に抱腹笑語す、異郷に學ぶ身の之れによりて慰めらるゝ多々、寄宿舎を出てし後は誰も之は唯一の思出の種子なるべし。

◎四月より電燈の點せられて寄宿もお蔭で大に便利となり掃除當番も泣顔をせずして済む元は細き燈心の光り心淋しさ云はん方なく計して済むへき噂の絶へもやらざりし東舎の便所も今は五燭の電燈皎々と輝きて、近頃はドウヤラ幽霊も影を見せぬ様になり

20.

◎一利あれば一害は免れぬ所、齒痒ゆき例は、酒燈の鈴のなりて漸やく温かき夜具にモグリ目み仰向けとなりて今日漸しく新聞を取り、一升五合に目を通し將に佳境に入らんとする刹那、バツ!!!エイ口惜し!

◎米山先生病の爲め九月以來校を一先つ去られ遂ひに十一月四日御家族同伴の上郷里、上伊那に歸らる、生徒一同は痛くこれを悲しみ其別離を惜しむや切。

◎先生の教授の巧妙にして然かも流暢なる、生徒をして寸時も飽かしめざるの態度は真に之れ教授の要領を得たるものなり、後に至りて今一時間なりとも教はつて見たきものなりと云ふ聲は屢々吾人の耳にする所一同の敬慕の情切なる、又宜なり。

◎寄宿舎に於て日に月に新聞雜誌の、入り込むもの頗る多し、就中信濃毎日を第一とし、長野、信州萬朝讀賣の順を以て數ふ、其他各他府縣の新紙數ふべからず雜誌に至りては、中學世界、農業世界、を始めとして政治、實業、文學、宗教の諸雜誌又少からざるが如し、吾が校に於ける有爲讀書の多讀者、多きは甚だ以て慶すべきの現象、希くば永久に此趣向を以て進たきもの。

月を踏んで戻る、中には氣弱き老幼婦女子のあるあり事茲に至つて又感慨物々、噫々貴むべきは人力なるかな、尊ぶべきは勞働者なる哉。然り然り!!!

◎十一月三日舉行の米國大統領選舉の結果、共和黨の候補者タフトは、民主黨の候補者ブライアンを大多數を以て打ち敗り、遂に米國第三十一世の元首となるタフト氏の吾が國に對する温情は諸氏既に知り、世界の平和の爲め、本邦の爲め、新聞紙は輿筆之れを喜論す、吾人又双手を舉げて祝福するものなり。

◎大平山の演習林、七町歩の落葉松、其後の成長状態極めて順當にして梢々相摩し既に開伐の期の近づけるを示す、又遠からず着手さるゝものゝ如し、本校生の實習も爾後漸やく理想的に近づけるに似たり

(終り) 明治四十一年十一月五日稿

二十六

◎本校々歌創作の議は四月以來の問題たりしが悲しむ哉遂に有耶無耶の中に葬られしもの、日夜其れを謳歌するは蓋し益はあるも口には謠ふべき歌のなく、果ては何れにか之を求む、學校の傍らには折悪しく不淨なる某樓の繁昌せるありて卑猥聞くに堪へられざる俗謡を節面白く高唱す、聞かざらむ事を務むれ共其都度、耳朶に響くを如何せん、憊なく悪しき事とは知りつゝも半氣て之れを真似るに至る吾々にも魂あり、之を制止するは却つて罪なりと思ふは無理なるや?、望むらくは、然るへき大家に依職して、一日も早く品位ある校歌の吾々が口より吐くに至らん事を鶴首して待つものなり。

◎中央西線鹽尻、奈良開通、來る四十二年十一月を以て開通するの豫定なりと聞く。本校發展の爲め、本縣商業界の爲め、將に、木曾林業の始め、吾人は滿腔の熱意を以て期待せざるを得ず、今や木曾全線を通して數千の勞働者は、没入し世人の夢想たに及はざる山骨稜々たる谿谷を或は裂き或は埋めて一線の鐵路を敷きつゝあり而かも朝は星を載きて往き夕は

人生觀

長谷部城藏

ルノー言すや「萬物造化の手より成る時は一として善良ならざるはなしと雖も、加之人工を以てするに及んで悉く破壊す」と、ルノーが人間をして太古の舊に復らしめんご方めたるもの、蓋し謂ある也。想ふに人生の眞價は、彼の御雲爛として加陵唾伽の遠香床しき所謂、黄金積んで山の如く、賤貨倉庫に充實し、天下の物望んで得られざるなく、碧瓦燦爛、白壁宏壯の大夏高樓に安眠し山海の珍珠に飽き悠々以て日夕を送るの時代に於て表るゝ者也。

されど是れ吾人の空想? 想像にして今や人智は之れに及はる事遠く、科學の發明、心理の研究は日進月歩の運にありと雖も未だ天機地異を豫知するの明なく、社會は生存競争の渦中に醜醜して漂蕩しつつある也。然れ共過去の歴史を以て未來を徵するに足決して非望の望なるにあらず、幾千萬年の後、吾人の子孫は將に最大幸福を享るや必せり、見すや、彼等幾多の先輩は營々、臥薪嘗膽歲月を重ねる幾千載、終ひに今日の會社に到らしめしを。

二十七

苟くも社會の一員として、生くる者焉んぞ人智を發達せしめて、社會の進運に爪痕を残さずして可ならんや。人類の人類たる所以夫れ是にあればなり。吾人の抱負己にかくの如し、吾人將に之れに向つて勇往邁進せむとす、夫れ其志操の堅實なる、其經論の遠大なる其見識の卓絶なる、其氣膽の剛適なる以て大事をなすに足る可し、然らば今猶春秋に富む吾人、須らく富貴に汲々たらず、貧賤に感々たらず、毀譽褒貶是れを度外に付し以て自修に勉め其本領に突進せしめて可ならんや希望心可なり、名譽心不可なかる可し。然れ共一朝して儂伴心となるに至りては之れ最も畏る可き邪徑なり宜しく堅忍不拔の志を立て、鞠躬業を勵み粉骨經營せむか、天下不成るの事なき也。されは其間邁進する憂懼失敗の如きは固より一時の變遷、何をか意とせん、而も世人往々境遇の逆勢に會して人生を悲觀し、厭世の短氣に入る者の如きは何んぞ憂懼、はた不平は人生の原動力に非ずや、人生百般の事業一として憂懼、はた不平に胚胎せざる者なし、人憂懼失敗なくして成功を欲す、猶船を刻んで剣を求むるの類耳。一夜の安眠は終日憂懼の結果なり、東天白めは再び憂慮の人たるを免る可からず、一生の憂は何を以て慰すへきか、曰

先輩に訴ふ

在校金田美行

居る父母姉妹の心中果して如何りや故に兄弟は自己の安否を父母姉妹に知らせ自分が先輩としての辛苦経験を報し又知得したる新知識は母校にすがりつつある幼少なる弟妹を教導せらるゝが兄姉として子息としての義務にはあらざるかかくして弟なる吾々も先輩なる諸兄の前途を祈り且つ祝ひ常に修得せし知識を報して先輩兄等の實験に供し益々良好なる成績を得而して母校を助けなは遂には好評を以て社界に迎へらるるに至るを得へく次には兄等か如何なる方面に於て如何なる地位に如何なる経験を修得しつつかあるかを待らつつかあるのである然るに目下先輩諸兄の御機子は如何であるか今日では四回五回の卒業諸兄に於ては何處に御停職までも明らかたれども其以前の諸兄に於かれては何處に如何なる地位に如何なる御事業に従事されつつかあるかを知るに由なく常に一部分の先輩が何縣の技手である位は稀には知り得た處が轉變更迭常ならざるが爲めに忽ち行き方知れずと成るので兄を慕う弟に取りては如何にも遺憾の極である

卒業生中指を屈すれば第一第二とも云ふ遠藤宗作氏の陸軍歩兵少尉に任せられ正八位に叙せられし事の如き

く死耳、死は實に吾人の夜のみ、甚しい哉、世人の死を怖るゝや宗教家の一に死後の冥福を説きて現世以外の快樂を勧むるも凡骨をして死の怖る可らざるを知らしむる方便にして、其極彼のガンヂヌ河頭可憐の嬰兒を、鰐魚の腹中に葬りて未來の冥福を祈りし如き慘憺たる光景は、中世印度の天地に演せられたる也。

(完)

親として子を思ひ子として親を慕ふは人情なり兄として弟を憐み弟として兄を慕ふも亦人情なり隨て兩親の繁榮は子息の盛榮にして子息の幸福は亦父母の幸福ならざるへからず故に親子兄弟なるもの協力一致して始めて一家の幸福を増進し一家の危急をも救済し得へきは理の當に然るべき所にあらずや抑も我が木曾山林學校は師なる父母と卒業生なる兄弟と在學中なる吾々弟妹とを以て組織せられたる家族である然るに家族中目下の動靜如何を知り得へからざるのみならず甚しきは其踪跡すら明瞭ならざる者多きに

又中澤龜吉氏の鹿兒島第七高等學校在學中なる事の如き或は宮下信一氏の東京齒科醫學專門學校在學中の如き事どもを知りたる者は百五十名の多き在學中に幾人かある多くは自分は卒業して何れか有望なるか想像たに苦しむ恰も森林主事の養成所にも入りたるかの考を抱いて居る位で殆んど一回の高聲も發し得ず出し度き手足も出す事能はざる有様である而して是れ等は一例に過ぎざれども多くが此の如くして音信不通の爲めに在學生などは卒業生任官昇給轉免の辭令等を新聞紙上に於て見た處は何兵衛やら少しも氣づかず兄弟の名も見た事も聞た事も無い居る處も勿論知らぬのである尙ほ先輩諸兄と雖も他級の者の様子など無論知り得ざる事なる可く同級卒業生間に於ても中には御互ひ様子を知り得ざる人も或は無きにしもあらずです偶々校友會よりの會費徴収等を發するに及んで受信者行衛不明との事にて書狀の返送されしも腹を見る處であるまして事業經驗成績通信云々處では無い故に在校生はかゝる山間一局部の聞見かたは教室に習いし事を互に言い合ふ位に止まり別に面白き事や珍らしき事を御紹介する事柄も無く一ヶ年に二回發行の會報も一回となり其一回すら年々同じ事のみ反復する始末で

誠に御同様面白からざる現象であると思ふ

斯の如くして年々過ぎんには或は券判の不幸を見るの不得止に至らんかど氣遣しき事である萬一の際には吾々始めとし併びに先輩諸兄も義務を果たす事能はざる事になるのである希はくは自今は必ず任官昇給進轉免等は申すに及はず一々御通知あらん事を望む同時に又諸兄の各々活動の方面よりの経験とか又は諸大家より得たる説とか云ふ者をもごしごし御送りあらん事を切に希望してやまざるのである中には或はすじ一本位の昇進でとか昇給額の高が僅か一圓や二圓で面目無くなごのゑんりよをさるるむきもある事と信す而しながらてんから和尙にはなれぬ位の事は誰氏も知り前者は先きに進み後者はをくれて進むは自然の道である決して御心配なく御通信あれさすれば寒國なる北海道より暖國なる九州四國を始め米國は「ワシントン」「バンクーバー」及「シヤトル」「ハワイ」地方滿州韓國内地にては木曾山中の又其奥の阿寺小川に腰をまげつつある人々又東京大坂の都府に腰延はしつある人々の様子も知り西洋人滿州人九州人四國人奥州人の様なる風俗習慣等を知り又事業柄としての方面より申せば先づ森林主事として又大林區署帝室林野管理局北海道廳其他

の縣廳等の技手として郡役所方面の林業巡回教師として林業事務所林業試驗所足尾銅山鑛業所統監府營林廠諸會社の事務員として或は實業學校小學校の教師として或は陸軍の將校として一兵卒として又高等學校醫學專門學校明治大學校等の生徒として若しくは帝國大學の助手として又實力一すじの實業家として各の經驗せし參者談も多かる可く種々の方面のあらゆる情況か知り得る事が出来るのであるのみならず師は生徒の出世を見て安心し且つ喜び弟は兄の指導によりて多くの材料もあらば或ひは會報紙上名文の書きぬ限りも無く愈々校友會は發達し會報は進歩する事疑はないのである要するに母校との關係を疎遠にせず校友の動靜を詳悉し我會報をして賑はする事を切望して止まらないのである 失敬多謝

痴言

其一、自然と林業に就て

會員 中 嶋 生

吾人の腦裏に映する粉々雑多の事象は即ち之れ自然然

らしむるところと云ふならん。自然界に横はる幾多の現象は到底我輩の頭腦に順序整頓して、觀察し記憶し抽象し推理するとは至難の事にして爰は斯道學者の任する者なり。例へば花笑ひ鳥客ら葦林鬱蒼海嶽冥幽にして、朱雀を吐き群嶽雲峰鼎峙たるもの温氣は種芽を滋育して涼風は炎熱を調和し、仰げは星辰となり伏せば地獄となる。地厚ふして萬物を載せ人之れに應じて四時調停晝夜序を誤らず、光暗表裏走獸野に群りて群翼は天空に翔り、呼吸に空氣ありて動植を調和し水ありて呑むへく翅鱗ありて泳ぐへし、聽くに耳あり知るに知覺あり視るに眼構あり、思ふに心あり嗅ぐに臭氣あれは鼻ありて之れに應ず、翼あれは空あり水あれは海ある、魚心あれは水心あり風物に接すれば物激し能く動けば静とあり深沈遂に動搖を生ず。静あれは死あり死あれは生あり、蒸氣天空に昇り熱を失ひは降る春夏秋冬寒暑涼冷火あれば水あり有無黑白相權擧す、則あれは物あり即ち顯はれて之を官す之れ曾に吾人が日常漠然として自然の大様を感知しつゝあるものに過ぎず。特に我輩の感ずるものは自然美なり、青色去りて初夏來り金鏽の風景は濃淡なる青黒色となり、盛夏の炎熱は木葉を燒きて薄褐色に近づかしむ。炎熱草樹

を燒き焦して忽ちにして氣節秋風を送る、早霜草樹を襲ふて其色を化し草葉の緑は茲に錦色となる。秋愈々深くして色愈々濃厚なり、朝輝夕陽之れと觀を脱ふて奇彩名狀すへからざるものあり、又今日の雲峰は明日表はらるゝ雲と異なり、發活揚々として永世其方則の死する如きことは又あらざるへし。又是等の大喬は土用干しを爲すを要せず、寶藏に蓄ふることを要せず大金を出して購ふことを要せず、田夫野郎王公貴人と雖も少しも其眺めに異なることなし、是れ其一例に過ぎざるも幾多の方面に向つて觀察研究愈々積まば進化の大妙實に驚動の外無きよ没すへし。吾人人類は天地を以て親となし萬物を以て己が資用となす、世界は余が家にして元より余が爲めに造られたりと思念するにあり、山も空も深林も野田も過去も現在も一として人類の生存上必要の資財を引き出す寶庫として其觀念の充たさるはなし、野となく貴となく老となく一度此萬物に向ひて智識の號令を發するときは宇宙の萬物は欣然として之れが命を奉し其用となすに至るべし、草樹は風景を作りて吾人を悦ばしめ又其質を以て吾人の病氣を癒す、岩石材木金銀銅鐵は人類の爲めに使用を致して家屋とあり其外諸般の器具器械と

なる。如斯自然界の萬物は人類の各便益を奉公せんと方め、各自に向ひて其慾を満足せんと欲す。又其志望に和調せんご用意す、自然界には無盡蔵の富を以て人類の身邊を圍繞し、人類をして自由にして之れを採用せしめんと欲す、然るに之れが採用の方法を誤り爲めに甚しく日常の不便を感じ風景を損し衛生を毀ひ不慮の大災を被る等、多大の不幸を招きつゝあるもの我國現今の實況あり。曰く何ぞ植物界に於ける林地林木が靈長の爲めに不法なる採用を敢てせられ、今や其悲境に陥落して彼處に此處に溢々たる怨みの涙を流らせて限りも無き忿怒の色を顯はしつゝあり。之れ恰も自然界は吾人に反省の訓戒を與へつゝあるに似たり。倍吾人は如何に進歩發達すると雖も、樹木を離れては此生を維持すること甚だ以て不可能あり。即ち日常使用する器具器械を始め衣食住總てに於て之れに享くる事の多大なる言を俟たす。然るに林木其ものは決して吾人に依らされは其生を全ふするを得ずとは云はざるべし、否太古人類の少なかりし時代に却つて繁茂生長したる形跡に依つて見るも明なり。吾人が樹木の供給に依らざる可らざる以上は彼れの益々優勢ならん事を計らざる可らず。之れ直接に吾人の寶庫を富ます所以なり。何とな

れば彼れの跋扈は愈々盛んにして吾人の發展に資することあるを愈々増加することあるものなればなり。然る我國の往時を案するに大古は國內到るところとして森林ならざるは無かりしも伐採し開墾し森林地面積次第に減するに従ひ、中世紀の始めに森林制度を定め之れが保護の道を講したりと雖も最近なる王政復古の騒亂延いて林木の乱伐を惹起し従つて現今の狀態を見るに至りたり。自然界は無盡蔵の富なりと雖も林木のみの寶庫は無盡蔵にあらず、乱費の結果は遂に悲報に服せざるを得ず、之れ天然因果の法則なり。茲に於て吾人は勤儉貯蓄して以て林木の寶庫を富まして常に其採用の方法を誤らざるときは吾人に享けしむる所の幸福多大なるべきこと獨塊其他の諸國を見て明なり。而して我國は世界に於ける森林國なり、故に邦國の自然界に享くるどころの寶財中森林寶財は最も貴重なるものと心得ざるべからず。此貴重なる寶庫は他の諸寶庫に比して甚だ容易に富ましむることを得るものとなす今茲に比較的容易に得らるゝ農家と雖も林業に比せば到底其及ぶどころにあらざるべし。要するに森林は自然界の一寶庫にして自然力に依つて其富を増加すること、他の諸寶庫の比に非ざる可く、天は之れを邦國に

賜はる吾人須らく天父に感謝すると共に林學の半眞なりとも視かんとするものゝ大に勉めざるべけんや。

其二、余の想像する林業の趣味

趣味は追求するものなり、或る一つの趣味を起せば更に進んで之れを欲し漸次其趣味を追求して罷まざるものなり、而して其因で起る動機は物事を理會して會得したるとき或は何等かの技術の上達進歩したる時或は又勤勞に酬ゆる效驗ありしときなど現出する心的作用にして、何れも輕快愉快爽快の順序を以て快感を起すものなりと云ふ、苟も此世に生を棄けつゝある吾人は趣味の念は常に没却するを得ず、夫れ一國の政事家は國政に參與するを以て其本務となし幾多の學者は學理の研究に力め、其他農工商其階級の上下何れを問はず各人其職に向つて高下大小の趣味を把持しつゝあるものなり、而して其高下大小の趣味は各人の能力程度の如何に依つて其相違を來すもの爲りと云ふ、愈々其職に巧妙なれば愈々趣味を増加し趣味増加するに従ひ愈々濃厚なる趣味を追求し同時に能力之れに連れて進歩發達無限大なるべきも、人生には限りあり且つは其間多少の故障を來し思ふ彼岸には達せざるべし。

要するに吾人にして趣味其ものを失はば華嚴病淺間病など稱する惡魔の神は忽然と觀ひ來つて遂に此世を葬らるべし、然らば吾輩の前途は如何、余は本校にあること己に滿二ヶ年有半に垂々として、享受せし所の智識技術又多少具備すべき筈なり、故に元より林學上の趣味と雖も、虛無因應は言を要せず恩師先輩に對して只管汗顔の極みなり、上陳の如き余が頭腦を以て將來を想像するとは木によつて魚を求むるご何ぞ撰ばん、讀者幸に恕せられよ想ふに趣味其ものは開いた口には餅の如くに容易に入り來るべきものには非るべし、吾人は進み進んで之れを需むることを講究せざるべからず即ち可及的努力を盡して或は研究に或は技術練磨に直進奮闘盤根錯節を排して、而して後に高尚深遠なる趣味は津々として湧き出づるべし、茲に於て油斷大敵格ます挽ます専心に層一層の努力を以て學理と實際とを對照し常に疑問あらば之れを恩師先輩其他の識者に對し、絶えず新知識を獲得することに力め、併も能く刻一刻なりとす、林地林木の念慮に離れざらんことに注意し此生のあらん限りを盡して研鑽と其任とを全ふし、斃れて而して後罷まんの決心を敢てせば我輩の天

稟不才と雖も又多少の趣味を換起するに至るべく、趣味は愈々知識技能を誘出し知識技能は愈々高尚なる趣味を開發すべく、趣味知識技能之れ吾人が將來の生命なる可く之れが爲めに日常の活氣を保有し、進取の氣象之れが爲めに損すること無きを得べし。

アマゾンの流れは世界第一の大流なれども其源は僅か滴る泉なるへし、吾人の林業に於ける趣味今尙微なりと雖も他日目を重ねるに従ひ流れは愈々増して遂にはアマゾン川の如く趣味の世界一とは少しく架空の嫌ひあれども棒大針小の譬喩もあり全々没趣味の儂なきにも陥らまじ、偕吾人本校を出で、林業界に立つべき方面多々ありと雖も大体に於て直接林地林木に接すべきものにして春夏秋冬兼尙ほ暗き林中に此生の大半を送るものとなす、然らば其處に於て林中如何ある趣味の存在するを想像するか、第一に之れを音樂的趣味に徴さん「某氏曰く静夜森林の中に遊ばば樹木又音聲を發して其歌の如き妙震に驚くへし、勿論樹木の發生するときは微震を發するは免れざるころなるが、余は信州と遠州との境界を爲せる青クヅレ峠に一夜を明せしことありし時、妙な現象に接せしことあり、夜は深くして愈々幽寂たりしとき樹木さいも

或は眠らんと夜の半却つて樹木の聲を發するを聞けり或樹木はキンと云ひ或木はシュと云ひ或は近き處にミシャーと聞けばドント云ひ又キンと云ふ或は近き處にミシャとなる、其音調連續して恰も支那の清翠の奏音の如し余は暗中に深山の妙なる音に接せしは此時を始めてなす、之れのみならず樹木の自震するところの樂符は風の來りて動搖するときは其音を自在ならしむることあり、暴風樹枝を折るの大震動にありては、樹木に隠包するところの音樂より非常に大搖を爲す故に、其風調之れと合調すること無きも晚影に至り微風緩々襲ひ來るときは樹木の音樂之れと合して美妙なる哀聲を送るなり、此の如きは造化の大琴を樹木に合調する音にして、美妙の發現するところ又音樂の教科用書なりと」第二抑も吾人の植栽經營する所の森林にして年を追ふて成長すると同時に手入れ保護等遺漏無きを盡して、年次其生長量の大なる状態を目撃しつゝあらは恰も慈母が其子の成長を樂むと何ぞ異ならん、吾人が理想の森林を經營せんとするは慈母が其子を理想的人物に養はんとするに等しけん。慈母にして正に理想的人物に養生し得たりとせば其時の喜び嬉しさ果して幾何ぞ吾人は又林木が理想的の結果を將來に得たりとせば其快感

喜悅何ぞ前者に異らん噫吾人の將來宏大無邊の趣味豈力めざるべけんや。

木曾の氣候と學問とよ就て

會員 K N 生

夫れ學を爲すものは先第一に冷靜なる頭腦を有するを要す。冷靜なる頭腦は是れ文明の宿る所なり。冷靜ならされは組織的ならず、組織的なるに非ずして如何ぞ幽を啓き微を明にし隠れたる真理を紹介し世界の文明に貢獻することを得べきや。茲に氣候と偉人との關係氣候と文明との關係、是を知らんと欲せば一快の文明史、之を説明して餘裕あり。大初の原因元として亞細亞の一角に顯現せしより以來、文明の曉鐘喧しく鳴り響き今日に至る迄で星霜の變は幾許乎而も其間文明と氣候とは常に断えざる連鎖を以て繋がれつつ來れり誰か極北亘寒の地其人や其草木と共に萎縮し去るを疑はんや誰か靈熱強梁の地、文明の氣其と共に蒸發し去るを疑ふものぞ。學問の振興と長縮とを論するものは竟に氣候を忘る可らざるなり。乃ち木曾の氣候を説かんと欲す。蓋し木曾の氣候は最も學問の進歩に好適する

もの茲に學ぶもの恒に冷靜快明なる頭腦を樂むことを得べきなり。之れを夏間に見んか、太陽地中線より出で地平線下に没する迄で曾て酷熱の人を蒸殺するなく、綠色濃き木曾川の邊畫間尙暗き御料林より送らるる清風楚々常に腋下に生ずるの樂みあり。人あり南方より來らば誰か此清鮮の大氣に長嘯するを欲せざらんや。又人あり去つて南方に至らんか、誰か其蒸熱の曇々たるに呻吟せざらんや。知らず、僂まば乃ち御岳駒ヶ岳の清峯に攀じ以て浩然の意氣を養生し傍ら身体を鍛練するを得べし。此清風裏に學び彼の單に蒸熱裏に學ぶものと其享受する所に於て相似の徑ありとするか。問ふことを休めよ熱に熱して膨脹に膨脹を重ねたる腦中如何ぞ能く冷靜の力を蓄ふることを得べき冷靜は爾して涼清と伴はざるべからず。更に冬間の氣候の何似なるやを見んか是れ世人の最も恐るる所にして往々にして荒唐なる空想の胚胎する所なり、或は木曾谷の酷烈なる寒威は、其体軀を萎縮せしめ、同時に其腦髓を凍結するを憂ふるものあり、是れ油に江を見ずして先づ之を濟るを怖るるもの輩のみ。我輩は深く信ず。木曾の冬間最學問修練の好期なりと。人或は其冬間の長きを憂えん然れ雖余輩は之を學問上より見て其短きを嫌

むものなり。蓋し冬間は思想の集中を來し考察の濃密を致す。學問の進捗此時を以て最可なりとす。何ぞ妄りに其永きを是憂ふるを須けんや。況んや其氣温の低下や必ずしも他に比して激甚ならざるに於ておや彼木曾路を以て人の腦漿を凍結せしむべしと云ふ者、誠に世界に於ける學問の淵源果して何處に存するかを知らば思ひ半に過ぐるものあらん。之れを要するに木曾谷の氣候は之を夏間に見るも之れを冬間に見るも何れも學問の刷進を助長すべきものなり。然らば此地に學ぶの輩他日冷靜なる頭腦を以て天然の秘藏を啓發するを得べき乎嗟幸

片々錄

通常會員 松澤 岳水

○一冊の書籍を百回讀むと、百冊の書籍を一回讀むと果して孰れが利益なるかと云ふ問題は吾人の胸中にある疑問なり。余は一冊の書籍を百回讀むを優れりとすものなり。之れ山中若しくは海濱に住する人々か名山大海を遊歴するよりも山海に就きて大なる知識を有するが故あり。

○青年の犯す罪惡の半は其の金錢使用の方法を知らざるに座することなり、吾人は金錢を得るの道と共に使用の道をも知らざるべからず。之れ金錢は徒に貯蓄するがために求むるものにあらずして使ふがために求むるものかれはなり。金は死物なり之れを活用するは人にあり。

○金錢の浪費は世人大呼して非難するも、時の浪費は金錢の浪費よりも弊害多し、而して時の浪費者は世に其の數甚だ多し、而れ金錢は労働によりて再び之を得べきも、一度失ひたる時は未來永遠に亘るも再び得ざるにあらずや。

○なきを有るが如く、知らざるを知るが如くするを虛榮心と云ふ。此心は女子に甚だしくして、これあるものは少しも進歩發達することなし。何人もあるべからざるものなり。殊に學業に従事し修養の途にあるもの、此心あるは恰も餓者の飽きたりと稱して食せざるが如く遂ひに死に至るへし。

○僱に「問ふは當座の耻、知らざるは末代の耻」と知らざるは知らずとして之れを知るものに尋ねよ。孔子極言して曰く「知るを知れるとし知らざるを知らざるとす」。之れ知るなりと已れを偽らざるは道を

知るものと謂ならんも亦以て學生左右の銘となすに足るべし。

○ソクラテス或る人の無知を證明して後自ら己れに語りて曰く、余は此人より知者なり。我れも彼れも何等有益なる事を知るものにあらざるが如し、併し彼れは知らざるに知れるものと想像せり、余は真に知らざるが故に知れるものと思惟せず、是故に余は只此一瑣事に於て彼より知者なるが如し。と

○世に宗教を云爲するもの多し、其少しく解するものは其利益を論し、知らざるものは其の無價値を云ふ何れも感心すべきことに非ず、言の人たらずして行の人とかれ。一の實例を示すは數万の言論に優れり

○實業大家は皆な口の人を避けて手の人を求む。而して學校出身者には口の入多くして手の人少なきと大家口を揃へて言ふ。我が校の出身者は亦此類の人なりや否や。願くは彼等をして此言を挾むの余地なからしめよ。百を知るよりは一を行ふには若かす。

○世の青年たるもの往々にして己れの實力を顧みずしで徒に高位を望む。雞刀は遂ひに牛をはふるに足らず、反て其身を損ふ。キリスト曰へるあり「爾曹よ最も大なるものとならんと欲せば先づ他人の僕た

るへし」と我方に適する位置にあつて充分其の腕を伸べよ。

○屑

山守生

光陰の梭飛ぶ羽よりも急に生等此に三星霜の業を終へて、木曾河時卿と袖を分たんとするに當り、思ふ事胸に溢るれど、徒らに情昂ふりて、筆動かす強ひて其方の一を書き残し候。

思ふて此に至れば、蘇山の地の三星霜はあまりに短かかりし、否爲すなく空徳として、日を涉り後悔今に及はず、幾らぬ過去の悔と未來の望とを繰り返したるのみに候。

生等校に於ける最上級者として、校の爲めはた友の爲め期する處の抱負は實に大なりき、然も今にして追想すれば茫として、何等爲すなく慚愧冷汗を覺ゆる心地する、過去に於ける生等の行爲は、卿等に對してあまりに嚴なりき、然れ共之れ決して私心に非ず、一片友を思ひ校を思ふの熱誠に他ならざりしなり、生等不敏にして其抱負の半だに完成するを得ずして遠からず校

を去らんとす、其罪や深く責や大なりと雖も如何ともする能はず、然りと雖も新進の氣貌の秀才の室に満つ、願くは生等の轍を踏むなく其欠を補ひて吾校の理想と主義とに向つて猛進せられんことを。

校友は研究部員の校友にあらずして、吾等の校友なり假令文辞は如何に拙なるも吾校の血を以てなれるものに非ずや、校友は吾等の意氣と抱負とを代表するものにして、其振否は一枚の意氣と校風の消長に關係せずして己むべきものに非ず、此點に於て吾人は其發展を期すると共に校友を雲煙過眼せざらん事を望むものなり。

校友間制裁多きは、あまりに喜ぶべき現象ならず然も校に於ける有らゆる出来事は此制裁を待たずして他に最良の策なきを如何にせん。

吾人はむしろ制裁なるものの絶えん事を願ふものなりされど吾校の存在と共に絶ゆるの期なからん、要は唯各人の自覺を待つあるのみ。

木曾は之れ修養の好適地に非ずや、夕陽没せんとする木曾河畔に立ちて東に巍然たる駒の雄姿に接し西方御嶽の偉大を仰ぐの時も自然の美は絶大無限の感に惘然として已れあるを忘れしめ、晝夜混々として蘇山の美

を叫びて流る、蘇水は源平の昔に返りて彼の義仲が過去の歴史を語るあるか、吁々美なる哉蘇水壯なる哉蘇山、山靈の吾人に興ふる處何ぞ其れ大なるや、此間に在り學び且修養する清福他に斯の如きありや、惜むらくは交通未だ便ならず、朝野名士の活教訓に接する期なきを恨みんとす。

外形必ずしも内面を意味するものにあらず、外貌吾人に何の關する處かある孜孜として流行に走り夢幻の如き影を追ふの人よ彼の英傑松陰の言を聞かずや、

君曹欲爲士、須先成男子、男子貴剛正

陽道斯爲爾、何爲今世人、一與兒女似

拳々務言貌、不務却爲恥、須去妾婦態

速會剛正字、良馬不在毛、爲士在其志

何等の好辞ぞ讀み來れば松陰の人格躍如たるを見る吾人宜しく斯くあるべきなり。吾人を無窮に繋ぐものは明日なり林業はよく今日ありて明日を知らざる現今的人に向つて一大教訓を興ふるものなり、吾等類に汗して植付たる稚樹の他日轟々として雲を凌ぐの未來を想見する時利益以外一大快感を興ふるに非ずや。

假令星移り人は去るとも忘れんとして忘る能はざるは

黛綠色なせる吾が學ひの舎と手植の稚樹に非ずや、吁々此稚樹と我母校とは又生等未了の因を繋ぐならん。

宜しく趣味の下に活動すへし趣味なく利のみ前にしたる事業は永續せず、これなくして名利功名、何するものぞ趣味なくは人世は荒野のみ荆棘のみ。

今秋川中島に於ける戦に我れはかなくも敗却して無慘や幾多の死屍を殘し涙を振て退く止むなきに至りぬ

吁々敗か敗か未だ機運の熟せざりしかはた練習の足らざるにや、天未だ吾校をして覇者たらしめず蘇山に鑑ひたる腕は敵に對してまたしも雖も何そ永久期のあ

るべき、さらば再び磨きて以て來る秋を待たん哉、再び運拙なくして敗れんかさらば彼の道風が蛙の柳に於ける如くならん哉。

霧外小言

原霧外

▲砂糖の如く甘からず。唐辛の如く辛くもなしさりとして山椒のヒリ／＼もなし。之れを霧外小言と題す。一味増長からざるを期するのみ。されば電光の閃々と

美樂の一曲を欲するものは断して讀むへからず。讀で少しも益なければなり。

▲小言は何處迄も小言なり。其耳に達せざるの故を以て咎むるは野暮なり。蚊の鳴聲を聞き得る程の人恐らくは此小言を聲き得ざるの理なし。

▲凡う吾々が既に人間と生れたが因果なり。斯かる八ヶ間歌時代に生れたが運命なり。何も彼も因果なり運命なり。うう断念めて仕末へは夫れ切りなり、愚痴もなければ泣言もなく從てこんな處に小言を云ふ必要もない。

▲處がどうした者か、此因果と此運命とを絶対に断念して大悟徹底する程の勇氣の無いのが世の常、霧外なとも此群に漏れず。南無阿彌陀佛でも三唱して隨喜の涙でも落せば宜いのに小言などと云ふをこがましい真似をする。唯何事ぞ!!

▲されと恕せ、生れ乍らに有する吾性癖を、而して斯く言はしむる時代の罪とを、只呪ふべきは霧外其物にあらすして其有する性癖と、時代の罪なり、僕又大に此二者を咀ひつつあるなり。

▲霧外の有する性癖とは如何。穢でもない事乍ら一言此處に云ふならば、其何でもかんでも思つた事を云つ

て仕末はねは置かぬのご。随分不平の多い事の二つなり。目下夫々矯正中なり。

▲然らば時代の罪とは何、之れ實に吾が云はんとする小言の本場、あるなり。あるなり。凡う其數を知らず以下少しく列記せんか。只恐る余を目して現代思潮(現實を暴露せんごする)にかふれたる者となすを。此處に於てか霧外にも遠慮あり。

▲先づ余は現代青年の一人として少しく社會に要求せん慈悲にして寛大なる先輩は吾人青年に對して充分なる救済方法を講せらるゝ事と確信すればなり。

▲余は此處に告白す。今日幾多の青年は實に五里霧中に彷徨し、渴げる者の水を求むるが如くサムシングに憧憬しつつありご。

▲憧憬せるサムシングとは何、曰く大思想を發表して吾人をして其歸趨する處を明かならしむる大思想家之れなり。敢へて大思想家と云ふ。かの釋迦孔子基督の如き聖人を意味するにあらざればなり。眞に今日の場合斯くの如き百年千年を隔て、出現する聖人を要求するは苛酷なればなり。

▲現代の青年を誓へんか。恰も沖に漂浪ふ捨小舟の觀あり。一潮來りて西に誘ふかと思へば一風來りて東に

導き寄る邊をき身は遂には粉粹して止まんのみ哀れにも果敢なきは現代青年なるかな。

▲世に百の學者千の識者はありご云へども教ふる處は何ぞ、遂に彼れ等は學者なるのみ識者なるのみ。徒に學ぶのみ徒に識るのみ。何處に吾人青年に其渴望を満す一滴の清水を與ふる者ありや。

▲吾人は此處に除外例を設く。うは假令其思想は古くもあれ兎にも角にも一個確固たる主義を抱き而して何處迄も夫れの爲めに學び其の爲めに教ふる人の少數である。徒に奇を弄して輸入思想吹聴する者ご朝に夕に説く處を異にする人は斷じて取らざるなり。さなきたに迷へる吾人をして益々其迷の雲を増す者なればなり。あゝ呪ふべきは消化せざる輸入品にあらずや。

▲然りと云へども徒に舊に執着するかの保守黨の一人を以て目すへからず。霧外と云へども随分パンは好きなパンも好なり。然れども米臭きパンと味噌臭きパンは斷じて見るも厭なり。

▲現代思潮ごか云ふ六ヶ敷者は知らず。自然主義ごか現實主義ごか生の不安ごか、死の恐怖ごか度々活字に依つてお目に掛れど實の處何にも御存知なし。されども今の人々に左様思へる様な現象のあるのは事實なり

理論では云へず霧外の直覺なり。

▲こんな消化せられざる新思潮の眞只中に苦んで居る吾人は境遇上既に迷ふべく作られたるなり。眞に因果運命とは云ひ條大に不平なり。小言も出つる理なり。徒に吠ゆるに非ざるなり。

▲此處に於てか世に眞個確實の思想生れざる限り。吾人は遂に粉粹するか。之等風潮の防禦を要す。然らずんば吾人の前途は暗黒なり。

▲然れども觀すれば人生の眞意義は此中にあり。吾人々類の奮闘の生涯ごう人生の上に與へられたる最大意義にあらずや。さらば迷はん。

▲兎角卷き込まるへき渦ご知りつつも彼岸に達せんとする努力ごう吾人の須由も忘る可らざる處。

▲吾人の希望は彼岸なり。其處に達せんとする努力ごう吾人の活動なれ。渦に卷かると否ならざるごは一に其手腕に依るのみ。

▲要するに霧外の小言ごはこんなもの。



和歌

○某友人の許へよみ送る

安井正夫

かはらしごかみにちかひしまごころはまちはりてごう
しるひごうしれ

○某の還暦の祝に松ごいふごをよめる

全

ちごせへ松まつのよはひにおくれしごきりふごころや
ごきはなるらん

○我が木曾山の紅葉をめて、

全

きりやまのかさなるみねのうれれよりもふかきはたにの
もみちなりけり

○江崎教諭か岐阜縣教師として同地に赴きけるあわかれに

こむなつはきみをたつねてなからかはくみつゝうふね
さんさんどうおもふ

○元本校教諭たりし百瀬重四郎君か目下韓國にありて校友會によせられし玉章をよみて
きみかすむごりのはやしをなつかしみつはさあらはど
おもひけるかな

舊作 新作

霧 外

わが爲めに衣を織ると古里の縁に糸操る母想ひ出づ。
道者等の鈴の音牙へて曉を木曾の樓狹霧にぞらぬ。
浦嶋の住みし寢覺の初夏や奇しき岩間に小五月の咲く
落葉松の幾町繼く追分の廣野の暮を煙たなびく。
秋の暮栗の落葉をか寄せて歌思ふ子は停みて居ぬ。
谷深み杉の老木に斧たてはあたり匂ふ神代の香
朝またき木曾の山路にわけ入れは炭焼く釜に煙たたよ
ふ。
木曾なれば山なればとて送り來し海魚の魚に舌づよみ打

「忍び出づる時にや來ましまつかしき學びの友の集ふ
はやしに」
春秋の隔てはあらしむつまじき學びの友の集ふ林は

俳句

秋季雜詠 フラワー

木枯しや小足に馬子の過ぎにけり
木枯しや鳥止まつてすぐ飛びつ
早乙女の頬被りして大根引
大根引あつらひ向きの日和かな
鐘の音の消ゆると共に秋は行く
行く秋や池邊に虫の死骸あり
△月夜に、一人散歩して、
静夜や水の中にも秋の月
馬に稻附て戻るや秋の月
秋の月に向つて小便去たりけり
△麓未だ紅葉なるに、駒ヶ岳既に、雪降
小春日に綿入れ着たる男かな
△十一月九日初雪降る

つ。(女なる人の海魚送り來しに)
男の子二十歳腕に筆さる何事ぞ御國の爲めに弊擯へか
し。

あゝわが師子等は生れて足たす繩りてあるに何地行
きます。(松田先生の去らるゝにのりみ)
若ふして行手もわかす迷ひてし小舟救ひし木曾の天地

○友の寫眞の裏に

影のみか心も見えて友垣の隔なきこそ嬉しかりけれ

○御嶽山の巖にて

世の塵を遠く麓の餘所に見て高嶺に立てる心涼しも

○運動會

おのがし力のかきり競ひ見るとに肉も躍る許りに

○共進會

開けゆく御代の光は立ち入りて見る品々にうつろひに
けり

○校友會報

初雪や月日の過つの早き事
初雪と聞いて窓をは開きけり
物憂きに闇へ開へて長夜かな
故郷を思ひ出しけり長夜哉

折句

森田 溪水

「イクサ」

稻妻や くだけて見ゆる 佐渡が島
庵の井や くむひゞきにも 櫻散る

「コフワ」

湖に影を うつして富士は 笑ひけり
小舟さす 宇治川見ゆる 若葉山

「ムスフ」

虫の音も 澄みて淋しき 不破の園
むつまじう 住る庵や 福壽草

こんなも の

フラワー冠者
第七回秋季運動會雜吟
運動會を祝して

△大根を味く煮立て、月の宴

アーチの美しきを見て

△朝寒や芙蓉の峯は薄化粧

將に運動を開始せんとす

△螢狩りの門途小供の騒ぎけり

餘興を見る

△仕事を止めて見上げの鷹のさは

異装百出

△あら可笑し猫も杓子も盆踊り

徒歩競争

△獲を目掛け獵犬走る日和哉

餘興の舞舞拾子に涙を絞る老嫗なり

△秋草の中にも目立つ野菊かな

わが詩二扁

霧 外

▲岐蘇の自然

東に三十六峯聖座を勝し、

西に御嶽の靈山下界を守る、

中には蘇川は滔々西南に注ぐ、

彼處の森に鳥は謳ひ、

「さて恐ろしき今朝の霜、」

聞くより檜は頭上より、

聲もあらはに云ひけるは、

「今朝の初霜身にしてみて、

散り行き給ふや楓殿」

見れば檜は青々と、

緑も深き梢より、

露も滴るいや繁り、

秋や何處ぞ聳へたり、

「さこそ名残は留れど、

所詮免れぬ運命なり、

散るに時失せおめ／＼と、

辛き浮世に漂浪へば、

未練なものも見せしめと、

近きに雪も来るべし、

とく散り行きて來ん春の、

新装ひもせん程に、

「さらば、たなん來ん春を、

とく散り給へ楓殿、

折しも風一としきり、

峯より峯に吹き渡る、

此處の野には蝴蝶舞ふ、
自然の天地二十餘里。

春は湍々しき新緑に、

夏は五木の濃緑に、

秋は萬山凋落の色に、

冬は木枯に積む雪に、

あゝ壯大なる哉!!

岐蘇の自然!

其處を金城鐵壁と守り。

純潔の自然を友として、

俱に歌ひ俱に舞ふ、

自然の兒百有餘。

木曾の健兒は偉ならずや。

▲檜と楓の歌

風寒く暮秋の、

木曾の山路をどぼ／＼と、

夕日を浴びてさまよへば、

散るや楓の二葉三葉、

あなじらしと見返れば、

紅に染めたる葵へし身を、

楓は起し云ひけるは、

縁に交る紅の、

楓は散りて檜のみ、

此の世に一人寂しくも、

勝利の笑をたゞへける、

(完)

○ 笠 檜

森田 溪水

華表の嶺に雲わきて

過ぎ來し道に霧とさし

雨のつぶては横さまに

うちぬ木曾路の岩根みち

雨やどりして響からん

たづきはなくもまばしとて

軒ばに近くたゞすめば

さてもやさしき唄の節

人げありやと窺へば

荒れし庵にたどひどり

檜の笠を世わたりの

手業とたのむ人のあり

つかねもあへぬ鬘の毛に

楊のさし梅落ちんとす
深山の奥にはごくまれ

谷の清水に影うつる
委やさしき山百合の

けにうるはしき面はかな
なにごなけれどまかすがに

山の乙女のやさ業や
旅のあわれの思ひ出に

一ツをこひてゆかんな
いや降りしきる村雨を

いや立ちのぼる夕霧を
なごけの笠の緒にしめて

立つや木曾路の楡笠

○弔學友橋都五郎君(舊作)

松澤 岳水

生者必滅、世の定め 泡沫夢幻、世の習ひ

よごみも浮ぶうたかたは消ては結び、結びては
又もくだくる有様は よくにたるかな人の世に

れも早き木曾川に 長く渡せし、笠橋

二度敵を胃さんと 契りし人は今いづこ

ふりさけ見れば青山も 色はもみちに染めかへて
木の葉のちらふ夕まくれ おく露つらき草むらに

うちも詫ひぬる蟋蟀の 鳴音もいとど身にしみる
初霜月の末つ方 鶴鳴ける夕まぐれ

たへなる情のたへがたく 稼穡の業を助げんと
黄金波よす古さとの 父母の膝下に馳けりにき

父母の辛苦を分たんと 父母の思をば報せんと
筆をば捨てて筆をとり 書をば離れて鋤をとり

あしたに星を頂きて 夕に月の影ふみき
稼穡の業も終へ果てて 二度度校に登りしは

志はし許りの夢にして 聲も枯野の虫の音の
乱るゝ草の心地して 病の床に就きにけり

家に飯りし其折りは 已に美艶の色を去り
病魔益々猩獺に 体軀愈々瘦衰に

只薬石の奏効を 待つも愁悲の極なれや
春風遠く清香を 人の袂に送るべき

春の彌生の中半頃 にはかに病あらたまり

別れを遠く欄により 流れに望み見送れば
空も鎖魂の色深き ゆく島關の夕まぐれ

五郎の君は亡き人に ならせ給ふと一封の
古郷のたより夢なれど 願ひし甲斐もあら浪の

浮世の海を渡るべき たよりの友と思ひしを
昨日は齡二十歳 けふは永劫の曆に入る

芳蘭の花施うして 運命の神ねたみあり
一瞬の前、君ありき 一瞬の後、君あらず

半歳、木曾の山深く 契りし道は浅からず
互に理想を語りつる ひとつの窓の影二つ

其影ひとつ人の世に 今百年の別れとや
こそぞ卯月の中は頃 郷をば辞して旅だちつ

鶴の巢くへる城山の 巖神社の高きいは
夏の逍遙袖かろく 手を携へし日もむかし

金比羅山の夕まぐれ 朧の月も散る花も
昨日は山河二十餘里 今は生死の關幾重

嶮嶮を以て名にし負ふ 駒ケみたけの頂きに
鐘もさひしき夕まぐれ 遂に果敢なく世を去りぬ

かほり空しく花折れて さだめの前に仆れたり
めぐみは篤き父母に 先立つ事の悲しさを

かこもわびてし唇も 今は艶なく力なし
よし孔孟の性なくも よし顔回の智は無くも

英邁、温良、篤實に 聰明、明智、圓満に
君子の風を備わけり 君の日ごろの性行は

こゝに愁の花さきて 長く恨みの實を結び
ひとつ跡なく消えうせて 冥跡のあとを辿りゆき

ひとつ名残りの夢さめて 永き思に沈み行く
同じ時世に生れきて 同じ命の朝ぼらけ

有縁無縁に吹きわたる 松の嵐に心なく
君くれなるの花はちり われは命あり八重葎

かくて三尺の塚一つ 恨やこりて石と立つ
是れより日々に深み行く 昔の縁に花も無く

土にむくらは歸りゆく 魂の行へはいづこぞや
死と悲みと恨みとの 跡をさどむる墓の上

美と喜びと命との 心を示す花ひとつ

色ある花の聲やなに 聲なき墓の意味やなに
 諸行無常は世の定め 有爲轉變は世の習ひ
 月の光りの朧げに 見えては隠れかくれては
 又現はるゝ有様は よく似たるかな人の世に
 (をばり)

小品 二 一 扁

霧外山人

△ 秋の悲哀

何と云つても秋は寂しい。また哀れである。
 渺々たる人の世の事など思ひ出されて夜半静かに一人
 不覺の涙を浮べる事も少くない。人か人として真に考
 へるのは秋である。人生最終の解結は死である。そう
 して秋凋落の悲哀は將に人の世の死ではあるまいか。
 其死に就て考ふる時、他念の入るのを許さない。此場
 合こそ人間が人間として最も嚴肅なる態度を持して居
 るのである。

秋の聲は悲病である。眞面目である。秋は眞に静か
 に考ふべき時である。(十月廿四日夜)

△ 初雪の晨

今朝の初雪は昨夜の風で心配して居たから別に驚き
 はしない。がこんなに寒くては何にも手につかぬ。昨
 日の風で残つた葉をふるひ落された向ふの雜木林の、
 老人の手の様な梢にチラ／＼と雪のかよつて居るのは
 又ない景色だ。駒ヶ嶽の頂はもう眞白になつて居る。
 秋だと思つて居る内に冬は来た。初雪は去年より十日
 あまり早い。(十一月九日朝)

小品

初夏に誓ふ

第三學年 生 本 多 静 雲

梅よ櫻よ、春去りて、今は樂しき、夏となり、四方山
 の緑、滴りて、木々の梢に鳴く蟬の、聲の音もいと涼
 し、彼等草木今の間に、枝葉をのほし秋を待つさらば
 人生も初夏の時より孜々として、學びの道をよく勉め
 秋の時代を迎えなは、錦を捧げ立ちぬらん、初夏にの
 りみて誓ふらん。

對 月 獨 語

孤 舟

月見れば千々に物こがなしかれ我身ひとつの秋には

あらねど、こは我々の先祖千里のお爺さんの讀ましや
 つた歌や、如何様同じ丸い者で、同じ東から出て、
 同じ西へ還入る者でも、あの太陽に對つては誰も何ん
 とも云はないが、妙に此の月と云ふ奴に對ふと、所謂

万感交も胸を衝て来て、涙ごもなり、滯息ごもなり、
 詩ごもなり、歌ごもなる、考へて見れば不思議ではな
 いか世の中に月見と云ふ事は有るが、然し月見と云ふ
 事は今迄聞いた事はない、それは何故だろう、月は涼
 しい日は暑い、月は感情的で有り、日は物質的又實用
 的である、月の光は鈍い、日の光は鋭い。月光の下に
 は休む事が出来るが、日光の下には人が勉めなければ
 ならぬ。此等が其の差異點であらう。バアと云ふ様に
 出て來るのが山の月、水に碎けてにこ／＼出て來るの
 が海の月、又雲は月に取ては無上の味を添ふるもので
 あるが雨は月に取つては大敵だ、而し我は又雨の爲に
 減えた月、雨の爲めに溶けた月あるを聞かない、其の
 證據には、夜半雨がやんだ時、思ひがけな松の梢か
 ら例の笑ひ顔を見せる事が有るではないか。

月を見ながら歩いて行けば、月は妙に人について來る
 一里先で見た月も、門口まで歸つて來て見た月も、殆
 んど同じ見當にあつて、而も其人ごのみ相對して居て

常に其の身をのみ護つて居ると、誰か知らん其の月は
 十里も二十里も遠方に在る人をも、同時に斯く見詰め
 且つ護つて居る事を。
 此處で見れば松の月だが彼處で見れば軒の月、坐つて
 見れば鷹越しの月、さて暇場の月、墓場の月、萱屋の
 月。而も皆な一つの月である、が然し朝から晩まで同
 し顔して出て居られては面白味がないが、うまい事には
 は、日が出れば月は忽ち光を失なふ、光を失へば又誰
 が月を見やう、其れを知つてか月は早速影を取めて仕
 舞ふ、誠に其の時を得たと云ふものか。又うまい事には
 其の時季の變るに従つて、三日月となり、満月ごもな
 り、朧月ごもなる、斯くしてこら、又次の夜をも樂し
 まれもする。





桐樹造林法

會員 三年生 仲田 惠 令

桐樹林の作業法は普通萌芽更新法にて用材林としては林業上他に比類なき作業法なりとす之を繁殖するには播種挿條分根の數法なり就中普通用ひらるゝは分根法なりとす以下分根より順次説述せん。

甲分根造林法、分根によりて桐を繁殖する法は頗る容易にして且つ其の生長又早きが故に現今は桐苗には大抵此の法を用ふ其の法は十一月中旬可成は降霜前(根の凍る恐れる故)直径三寸乃至一尺位の母樹を撰び其の根本より一二間隔りたる所より地面を掘り起し其上根をさがし漸次其れに沿ふて根を掘り出すべし而して其の分根に適する根は直径二寸以下小指大迄のものにして之を長さ四五寸乃至六七寸宛に切り上部は平

五十一

坦に下部は少しく斜に切斷し以て上下を區別し日に乾すこと數日即ち半乾として兩面せる環腹に横穴を穿ち其の内に立て、詰みこみ置き入口を塞ぎ翌春迄貯藏し置くべし或は又家の軒下など乾燥せる所に一列にならべ其の上に乾きたる土を覆ひ又其の上に根を並べて土を覆ひ斯くの如く互に相層積み置く可なり總て貯藏前には半乾になすべし然らざる時は水分多きに過ぎ腐敗又は凍返の害なるべし而して翌春四月中旬に至れば根は既に芽を生し始むるを以て之を損せざる様に丁寧に採り出し西日の當らざる地面特に東面或は南面の地を擇び凡う二尺五寸幅の畦を作り一尺置きに頭部(即ち元母樹に近き方)を上になして一寸程地面に出し北に向つて斜に横わ土を覆ひて軽く押しつけ置くべし若し早魃に際し土地の濕氣を失ひたる時は夕方に水を澆くべし然る時は能く新芽の發育するものなり而して其の新芽二三寸の高さに伸びたる頃其の生長の良好なるものを一ヶを残し他は掻きとるべし斯くして梅雨前に馬糞水灰入糞尿若しくは堆肥等の肥料を施す時は其の年の秋二尺乃至四尺の大きさとなり直ちに造林の用に供し得べし然れ共其の二尺以下のものは尙ほ一年間畑地に床替して置きたる後山出しすべし但し床替の際は根よ

り二三寸上げて切り捨て新たに萌芽せしむるを普通とす。
山地に移植するには秋季落葉後苗を掘りとり其の根を五六寸の長さに切り詰め苗を一所に集めて深目に假植し置き翌春に至りて山地に植出すべし而して苗を掘り採る際切捨てたる根は又之を五六寸の長さに切りて貯藏し苗木繁殖の用に供せらる。

分根法の一類に深き畦を掘り前法の如くに掘り取りたる根を其の上に横たへ兩端のみに土を覆ひ其の中央の部分より發芽せしむるの法なり。

又春季雪融後に至りて桐の根を前の如く掘り採り其の切口へ灰を付け(腐敗を防ぐ爲め)凡う一週間はかり日光に乾かし然る後麥畑の間などに播置くも苗を仕立て得然れ共方法は結果左程良好ならず。

總て桐の根を挿すべき畦は二三尺の幅となし之に八寸乃至一尺五寸位隔て、植え出し此の際及び梅雨の頃に厩肥堆肥其の他の肥料を施し可成く一年生の苗にして山出し苗とするを可とす地方によりては苗の高さ凡う二三尺に至りし頃頂芽を摘み去り以て苗を肥大ならしむる所なり。

桐苗は丈低く太く過ぎしき苗を良とす通例長さ二三尺

中央の直径五分乃至八分位なるを最も良とす苗の値は所によりて差あるも一錢以上十錢以下平均四五錢位なるも一反歩より仕立て得る苗數少なきを以て苗木屋の利益は左程大ならず普通平均一反歩より一千本乃至二千本を得るに過ぎず而も一年生にて山出し苗となるものは其の半數以下なるべし。

分根法によりて最も多く桐苗を仕立つるは埼玉縣の安行地方にて明治六年頃には年々七十万本餘の苗を産出せしと近來は愛知縣木兵衛等の諸縣にても極めて多く産出するに至れり蓋し桐苗は一束となし得る數少なく隨て運賃高きに依り可成と其の地方にて仕立むるを利とす三十九年頃安行地方に於ける桐苗の相場は百本に就き三尺以上のもの四五圓四尺以上のもの五六圓五尺以上のものは八九圓なりと。

植付數は一反歩に六十乃至二百本を可とす桐林を杉林などの如く四五尺四方位に林立せしむるものもあるも到底良材を得ること能はず。

植付けたる翌年の春發芽前或は其の秋落葉後根本より二三寸上げて蓋切をなすことあり若し秋季蓋切をなし冬間切株の凍る恐れある地方にては臺木の上に三四寸土を盛り上げ敷きて是を保護し翌春發芽前に於て其の

土を除き去るへし、莖切の後には數多の萌芽を生ずるを以て其の内發芽良好なるものを一本残して他を掻き去るへし此の際掻き去りたる萌芽は之を挿木になす時は生長して苗木を得へし而して殘されたる萌芽は其の年に長さ一丈餘の肥大なる幹となるへし若し莖切後の萌芽不良なる時は其の秋又は翌春更に第二回の莖切をなすことあるへし但し挿付けたる苗の生育良好なる時は一回も莖切を行ふに及ばず只多くの場合には成長悪しく又は屈曲せる場合にのみ莖切をなすのみなり。桐を早く生長せしめむが爲めに梅雨前に干縮、大豆、人糞木灰厩肥堆肥等を施す所あり然れども林業上に於ては落葉塵芥の類を施し林地の固結する時は根を害せざる様地を耕すを以て十分なりとす彼の林下に農作物を間作する如きは桐の根を害せざる以上は却て桐樹の生育に益ありとす即ち彼の茶園其他農園の間に疎植せるものも却て成長早きを見るへし。

翌春の萌芽を全ふせざる恐ある時は冬間豫め切株を葉又は古俵古菰等にて被ひ若しくは台切の際の如く株の上に土を盛り上げ置くへし而して春に至りて切株より萌芽すれば嫩芽の際不良の萌芽を掻き採りて一本ごなす其の後萌芽漸く成長して横芽を生ずるに至れば六尺五寸乃至九尺五寸以下の所のものは悉く欠き採り枝下を長くして置くへし然れども已に太き枝となりたるものは之が掻き取りを避くべし其の切口より腐敗する恐あるを以てなり故に常に嫩目の内に掻き去るを忘るべからず。

第一回伐採の后には切株大となり萌芽の成長早きにより第二回目の伐期は第一回目のもより二三年短くして同大の材を得るを常とす已にして五六回後の萌芽に至れば株は老朽に傾き著しく其の成長力を減するが故に根株を掘り取りて更新すべし地方によりては桐を切るに深く地中より掘り株を殘さずして却て地中の根の部分より萌芽せしめて其の萌芽は安全なりと稱する所あるも一般に適する法にあらず。

桐の樹には天牛虫の仔虫害をなすこと多し所謂鉄砲虫と稱するものは是なり此のものは其の孔に鉄線を通して是を殺し若しくは鹽俵にて幹を巻き置き或は孔中を硫

黄又は除虫菊にて燻すことあり或は粘土又は味噌などにて孔を埋め置きて窒息せしむることあり然れども石油を水に混して注入するを最も便なりとす又重曹水を注入して虫を馳り出さしめて殺すも可なり又其の成虫は樹幹の下部に産卵するものなれば常に注意して壓殺するの手段を採るべし。

桐の新條は冬期寒氣の爲めに枯死することあり故に霜強き地方にありては初年の間は其の稍二尺許りの間を藁にて包み又は節をつけて切りたる竹筒を被らせ置くことあり又新に植付たる苗若しくは新條は夏期皮焼けの害に罹ることあり故に日當り強き所殊に西日の當る所には幹の南西面に藁又は古菰など縛り付け置くを安全とす其の他介殼虫の害あるも其の度著しからず。

桐樹天狗巢病は一種の分生胞子によりて繁殖し胞子は梅雨前後に於て最も多く發生し雨及び風によりて軟弱なる嫩莖及び葉に傳染し葉は蒼白色を呈し萎縮し且つ短き枝條を發生し著しく生長力を減し枯死するに至る目下九州には盛に發生し殆ど全体に通じ追々内地にも傳染せむとする傾あり然れ共温帯の寒地に至れば其の繁殖著しからざるへし之が豫防法は新梢嫩葉にポンド液を注ぎ病樹並に病葉は之を燒き捨て病樹の根

邊には石灰硫黄水又は木灰汁を散布し樹の切口にはコールタール又は防腐劑を塗ること等なり。

乙播種造林法 種子より苗を仕立つるには實の外皮黒褐色となり一二の實殼は既に裂け種子を散出するものあるを待ちて是を採收すへし若し之を長く放置する時は種子は悉く飛散するの恐れあり故に宜しく注意するを要す而して採取したる實は之を箱若しくは簾にのせ一二週間日光に乾かすへし然る時は實の殼自ら破れて其の中より種子を出す是を布又は紙の袋に入れて乾燥せる所に貯へ置くへし。

翌年四月に至り(上旬)高燥にして濕氣少く排水よき地を撰びて幅三尺の床を設け土を細かに碎き鐵の脊にて能く均らして壓し付け充分に腐朽せる塵芥などを散布し其の上に風の無き日を撰びて播種すへし。

播種の量は一坪に二三合位而して此の種子には別に土を被ふことを要せず只播種したる上を鐵の脊にて軽く壓し付け其上に藁を一本並へに敷き細竹を脊にて之を押さへ置くへし然る時は四五週間に於て發生すべく發生後早天打ち續く時は日覆をなすべし然れ共桐苗は大いに濕氣を忌むものなれば若し濕氣多き時は種苗悉く枯死することあるへし故に梅雨の際には油紙又はトマ

なごにて雨水を屋根にて遮ざるを安全とす。
秋に至れば苗一尺前後の大きさとなる降霜前に腹糞の如きものを以て霜除をなすか又は堀り取りて假植し置て翌春床替すべし。

秋田地方にて行はるる播種法は播種の前床上に柴草を堆積して焼き其の灰を散布し其の上に小石又は瓦片の類を散布し置き秋季熟したる實を手にして破り直ちに之を取播にす然る時は飛散し易き種子も小なる瓦石に遮られて翌春に至りて能く發生すべし而して發生後は屢々雜草を抜き去り且つ肥料として米の洗汁を注ぐことありと云ふ。

又或る地方に於ては茅屋の屋根替をなす時生せる腐朽せる糞を冬間播種すへき床の上に散布し置き果實のまゝ貯へ置きたる實を春に至りて其の上に配列し果實の分裂を自然に放任して置くものなり而して苗發生すれば日除をなし夜間之を除きて温氣を受けしむ又梅雨の候に至れば繊弱なる苗が雨の爲めに倒るるを防ぐ爲めに屋根を設くる事あり。

要するに桐の幼苗は厚き被土と過度の温氣と雨に打たるとことを恐るゝ故に宜しく此の三點に注意すべし。播種によりて成立せる苗は普通發生の秋に之を堀り取り

し。
桐樹は暖温の兩帯を郷土とし台湾小笠原鳩球等を除くの外吾が國の大部分に蕃殖し得べく北海道の如きも其の南部函館小樽地方にては桐林を仕立て、年々二三尺の上長生育をなすを見ると然れども札幌以北に於ては最早寒氣の爲冬季其の新梢枯死すべし。

桐は我が林中幼時成長方の最大なるものに屬し其の切株より生ぜし萌芽樹の如きは一年生にして腕太に至り高さ丈餘に達し三年目には二丈餘に成長し年々幹圍四五寸つゝ増大するものなり然れども二十年生以上幹圍四尺以上に至れば其の生長著しく減するものなり此の樹は單幹を形づくるも枝下短く其の二丈以上に至るもの少し。

桐樹は極めて陽樹にして長く鬱閉を保つこと能はず故に單純林としては二十年以上生長せしむる時は閉鎖破れて樹下に雜草を生し其の他の荒廢を來たすこと多し桐樹は又濕地にありては諸種の病害に罹り易く又風折れ風倒れの害を蒙り易きものなり故に開放せる位地に造林せむとせば西方に杉檜櫛林などを仕立てて西日の害を豫防し或は又桑の類を用ひて其の幹を包みて此の害を防ぐべし又北方にも是等防風林を仕立て寒風を

りて一所に假植し置きて翌春之を床替するか若しくは翌春四月に至り初めて苗を堀り取りて床替すべし但し寒氣強き地方にありては一年生の苗は丈夫なるものご雖も土際まで幹枯し弱き小苗は根共に枯死するの恐あれば降霜前に堀り取りて温かなる場所に假植をなし置くべし若し堀り取らずして其のまゝ置く時は床の北面及び雨脇を糞類を以て被ひ南面の方は油障子を立て晝間は日光を受けしめ夜間は其の上を糞類を以て被ひ置き翌春四月に至りて床替をなすを安全なりとす凡て床替の際には根を切り詰め五六寸の長さとなし二三尺幅の畦に五六寸を隔て、植出すべし或は其の幹をも三四寸の長さを殘して切り去ることあり而して其の幹を切りたる場合には床替后切株より多くの萌芽を生ずるを以て生長最も良好なるもの一本を殘し其の他は悉く除去するべし。

丙挿條造林法 桐苗は又挿木によりて繁殖し得へし其の法たるや春季發芽の前細枝を一尺程に切り取り少しく庇蔭ある適潤地に半分程挿し置き早天の際には水を注ぐべし又前述の床替の際幹を切り去る場合に其の切りたる幹を挿木になす時は最も良く生育すべし然れ共實際に於ては分根法の容易なる爲挿木を用ふるもの少

○木材の纖維より人造綿の發明

經木真田の發明者たる小山善太郎氏が曩に木材の纖維を解舒して綿をなすの方法を發明し之を人造綿と稱し歐米數ヶ國に見本を出したるに至極適品なりとて歡迎さるる傾向あり。尙此の人造綿の用途は果物包被用、布圍、椅子、の中綿に用ひ又紡績として織物に混用するにも適すと云ふ今特許公報に掲載しある人造製綿法の特許の範圍等を適録する左の如し。

第一二三〇六號 人造綿製造法 小山善太郎

本發明は木材を一寸乃至三寸位の長さに切断し之を數箇並合して薄く削り之を綿搥機に掛けて人造綿を製造する方法に係り其目的とする所は容易迅速に且つ經濟的に木材を綿となし加かも硬軟各種の木質纖維を皆和し易からしむるにあり。

本發明を施行するには適當の木材を鋸にて一寸乃至三寸位の長さに切斷したるものを集合し又は適當の長さの木材に横に一寸乃至三寸位の挽割目を入れたるものを集合し飽を以て薄く削るものと之を其薄さは千枚以上に一寸となる様になす次に之を綿掻機に掛けて其纖維を掻き揃へるものとす。抑々木材を飽にて削り經木となすことは公知に屬すと雖も未だ之を以て綿を製造したるものなし

本發明者は種々研究の結果木材を一寸乃至三寸位に切斷したるを集合して薄く削る時は容易に綿となし得べきことを發明せり蓋し木材は其纖維間に多少の空隙あるものなれば極めて薄く削る時は各纖維は互に分離して線狀をなすものなり。

而して材料たる木材を寸斷するを以て纖維の直線ならざるも直線に近からしめ得其節あるものは之を除き去し易し且つ用途に依り硬軟の木質纖維を混和するの必要ある場合には材料を混合並列して之を削り得るが故に其混和完全たるの利あり。

而して本發明に依りて得たる人造綿は單獨又は綿毛等を混して紡績し得べく又は衣類坐布團夜具椅子兼臺腰掛等の中綿に最も適當にして安値なり。故に本

發明は經濟的にして有益なる最先發明なりとす。特許法に依り本發明の特許を請求する範圍は、
一、前記の目的を達する爲め本書に詳記する如く一寸乃至三寸位の長さに切斷したる木材又は適當の長さの木材に一寸乃至三寸位の長に横に挽割目を施したるものゝ一種又は數種を並列して極めて薄く削り綿掻機に掛けて人造綿を製造する方法。

森林法改正主要項目概畧 (山林公報)

現本法にては森林所有者は土地の所有權者に外ならず從ひて地上權者賃借權者等が林木を所有する場合に其の林木の所有者は森林の所有者たらざるの不都合あり改正案は此の不都合を除けり

一公有林社寺有林の管理者をして森林又は森林として管理すへき土地に付施業方法を定め地方長官の認可を受けしむることとしたる事

現行法にては公有林社寺林に對して事後監督の方法即ち是等の森林が經濟の保續を損するの虞ある場合に行政官廳は營林の方法を指定するの規定なるも公共團體又は社寺有に屬する森林に對しては事前監督の方法を

執るを適當と認めたるに依る且つ公共團體若くは社寺の所有地に於て現に森林にあらざるも森林として管理するを適當なりとする土地に付ては亦其の施業の方法を定めしむるの必要あるに因る

一國有林又は御料林を保安林に編入し又は之れを解除する場合に地方森林會の議に附するを要せざることに改めたる事

右は人民に負擔を負はしむるものにあらざるに依り實際上の手續を省ける等に因る

一禁伐保安林に造林を命したる場合に補償を與ふることをしたる事

右は穩當なりと認めたるに因る

一禁伐保安林に關する補償は從來申請に係るものは申請者に於て負擔し命令に係るものは政府之れを負擔せるも改正案は申請者の負擔を廢し保安林編入の爲め特に利益を受くる者をして負擔せしむる事を得るの途を開けること

右は事理に於て然るへしと認めたるに因る
一森林の開墾は凡て行政官廳の許可を受くるを要するの規定を改め原則として開墾許可を要せざることとし必要なる場所に限り許可を受けしむること

右は開墾獎勵の趣旨を原則として之れに國土保安の關係を調和したるなり

一保安林の編入解除其他國土保安に關する調査費は府縣の負擔とするの明文を設けること

右は現時の状態に於て府縣之れを負擔するのみならず國土保安の關係は實際に於て地方的利害を主とするもの大多數なるに因る

一森林產物運搬の爲め又は運搬設備の爲め他人の土地を使用し得るの方法を定めたること

右は實際に於て必要に迫るに因る

一同上の爲め水流に於ける他人の工作物を使用し變更し又は除却し得るの途を開けること

理由前に同じ

一命令の規定を以て流木の取締等を爲し得るの規定を設けたること

一國土保安の爲め又は荒廢せる森林を回復する爲め分立せる森林所有者をして合同經營を爲さしむる爲め林業上必要な道路橋梁其他の運搬設備を施設又は維持する爲め林業上の危害を除去し又は豫防する爲め森林組合を設くるの制を定めたること
右は合同經營を行はしむるを以て公益上必要と認めたる

るに因る

一 森林害虫等驅除豫防に關する規定を爲したること
右は實際に必要なに因る

一 北海道神戶縣に對しては現行法は保安林に關する規定に限り適用するの定めなるも保安林以外の規定も相當の時期に於て相當の特例の下に適用し得ることとしたること

右は必要ありと認めたるに因る

一 荒廢地に造林したる場合に於ける免租の特典の範圍を少しく廣めたること

現行法にては造林を命ぜられたる場合のみ右の特典を與へたるも改正案にては命令を付たす自ら進みて造林したる場合にも之れを及ぼすこととし且つ免租最長期二十五年に延長せり

一 保安林に關する條項を主とし其他現今法全般に涉りて従來の經驗上不備なるを感し又は疑義を招ける條項を増補改正せること

松 烟 (山林公報)

松烟に二種あり一を黒烟と稱し一を乾烟といふ黒烟又

俗に白烟或は正金黒烟ともいひ多し松の油分多き木を煉燒して製造す其光澤を有して製煉用に供せらる乾烟は油分僅少なる松柏より製造し其質粗濕にして主に家屋調壁の塗料として使用せらる延、建、行、郡の上府地方に於ては多く之を製出す其一増即每百斤現價は黒烟銀二兩八錢にして乾烟銀一兩八錢位なり烏烟の輸出仕向地は天津、芝罘、上海、等北方の支那各埠口にして一年間輸出額凡五萬兩内外あり又香港地方にも輸出すと雖も其額極めて小數なり而して其輸出の多くは支那或克船に頼れるを以て今正確なる輸出額を知るに由なしと雖も去る明治三十六年の舊海關の報告に據れば一萬九千九百九十七擔四萬五千四百九十三兩あり之に同年洋海關を經過せし分四千三百六十八擔八千四百七十九兩を合すれば總計二萬四千三百六十五擔五萬兩内外の輸出あるものにして又蜜柑龍眼等の果物に次ぐ當港一重要輸出品たる可し。

落葉松の腐心病

林學博士 白澤保美調査

落葉松は長野縣下南北佐久小縣及南北安曇筑摩等の諸

郡に在りては古來より林地に栽植せられ建築其他の用途に於て使用せられたり富士山にありては五六千尺以上の地に於て天然林を形成し殊に雲類の爲めに唐檜林の絶滅せられたる跡地に於て甚だ美形なる純林を形成する所あり此他秩父日光等の地方にも亦天然生あり或は人為造林に成りたるものありと雖も其數多からず其幼時成長の迅速なるを栽植造林の容易なるを能く冷寒に堪え且つ火山灰質乾燥の土壤にして他の林木の充分に發育すること能はざるが如き場所にあつて是に生育する等は此樹種の特性に於て信州淺間山麓の如き從來委棄せられたる原野に於ける造林も此樹種によりて稍好結果を得たるを以て廿年來之れが造林を施行するも數千町歩に亘り齡級の大差なき大面積の純林を形成して中仙道追分ヶ原と稱して一日荒蕪たる有名の原野も遂て廣大なる森林に化せんとするに至れり

同一樹種を以て齡級の大差なき大面積の林を形成せん事は造林學上甚だ忌むべき處にして森林經濟上又得策にあらず殊に同樹種の大面積に亘る純林に於てをや同地方の如き寒風強き且地力の消耗せる土地に在ては過度時期の造林として此樹種を採用する又已むを得ざる

事なきにしもあらざるが如しと雖も然れども尙精細に實地の調査をなす時は山腹或は溪谷の隅等に於ては尙他樹種を以て造林をなし得る個所少なからず是等は同地方造林の將來に於て大に考慮を要す可き處なり大面積の純林に對し吾人の常に注意す可きは各種の被害にして乾中虫害或は病菌の如きは其傳播甚迅速にして且速きに亘り遂に人力を以て之を驅除御の方法を講ずる事能わざるに至る可し是等は歐洲に於ても已に幾多の經驗あり本邦に於て又松毛虫の被害の如き或は近來吉野其他の地方に於ける有害なる細菌或は甲蟲の害等の如き其好適例なりとす。

信州に於ける落葉松林も今や此種害敵の襲撃に際會せり即ち明治三十四年始めて鱗翅類に屬する害虫の發生を注目したりしが三十五年に至りて其害延て甚だ廣きに亘れり昨年度は幸にして其發生一昨年の如く甚たしきに至らずして止みたりと雖も一旦是等の害虫を發生するに於ては近き將來に於て再び其襲撃を受けざらん事を保證する事能はず今にして之れが適當の驅除法を講せざる時は落葉松林の將來に於て甚だ寒心すべき恐慌を來すに至らんこと。是其の第一なり。

他御代田附近の幼林に於て全林木を通して樹葉の黃落

を見た時、地方の人の説に曰く、此の如き狀況は昨年
も既に之を認めたり而して是等の顯象は已に八月に至
りて起りたるものなれば假令之が爲に林木は多少其成
長を阻害せられたるも未だ之を枯稿するに至らざりし
は幸なり、是等被害の原因は「ケヤマ」屬菌類の寄生
に因れるためにして其種名は未だ此に明言する能わさ
るも之又甚注意すへき被害と認め得へきものにして之
其第二なり。

其第三は即ち茲に標題としてなせるものにして又甚寒
心すへき被害の一なりとす、此の種の病害に就て先に
白河林學士は大日本山林會報第二百二十九號及第貳百
四十四號に之を記述せる處ありと雖も予が研究の結果
は管に同氏の説の如のみにあらざるを以て、左に調査
の成績を記述する處あらんと欲す、此研究は明治三十
五年拾二月第一回及明治三十六年五月の兩度に於ける
實地の調査及材料の採集によりて成るものにして其間
長野大林区署在勤の小山技師は有益なる材料を給せら
れ又山林局寺崎技師は諸種の調査に盡力せられたり予
は特に此等兩氏の好意を謝さざるを得ず。

(一) 被害木の狀況

四、根際にて於ける土壤を五寸乃至一尺の深に發掘し其
主根及側根等を檢する時は被害木にありては必ず或
局部に損傷のあるを見る、殊に其主根に被害ある樹
木は必ず其心材腐朽の遠く進歩せり(第一回)或は
又是等局處の被害によりて其心材腐朽の程度を推定
することを得へし。

五、被害前に於ける林木の勢力は之等の害を惹起する
の因をなさざるが如し然れ共當年の強健なるもの却
て弱者に比して被害の因をなせるが如き觀なきにし
もあらず何者現在の被害木は其前年にあつては多く
の優勢木たりしことを認識し得べければなり。

長大となりたる被害木に在つては、耳を樹幹に接觸
して其對方よりの打衝を聞く時は其音響によりて之
を認識することを得る場合あり、然れ共此方法は確
然百中することを得ず。

乙 内部の觀察

イ 肉眼の觀察

此地方の林木を發掘して其の根部を檢する時は其直根
は皆(第五回)字形に彎曲して其長さ甚だ短く、或は短
圓錐形をなし恰も蕪菜根の如きあり、且つ之より強大
なる支根を發育せるものなし、之に反して側根は大き

甲 外部の觀察

一、樹幹の發育較弱間も枝葉の着生疎其弱少にして且
つ葉色、淡黄を呈せり、然りと雖も其外形健全の狀
を有するもの内にありても亦往々此種の被害木た
るものなきにしもあらず、被害木は群生をなし或は
中央部より周緣的に外方に擴張したるが如き形體を
有する場合あり、或は列狀をなすものあり或は散生
するものあり。

二、被害木は多少偏倚し其側根一方に稍高く發達せり
是等は其主根若しくは他方の側根已に腐朽せるが爲
め外界の抵抗に堪えずして偏倚したる儘生活を保持す
るものに外ならず是故に又大風或は大雪の後に於て
其樹幹倒臥せるものを認むる時は多く此種の被害木
なり。

三、被害の未だ甚たしからず、即ち心材の未だ全く腐
朽せざるものに在ては外部より來る微弱の衝動に對
して著しき反動なしと雖も其甚たしきに至れるもの
は假令其枝葉發達の狀況によりて或は被害木たるこ
とを確認することを得ざるも其衝撃に對する抵抗力
の甚だ弱きを見る、是其直根若しくは主なる側根の
既に損傷せられたることあるを以てなり。

且つ地面に沿ふて延長せり。而して其被害木にあつて
は必ず其側根若しくは主根に數年前に得たる損傷箇所
存するを見る(第一回及第五回)心材の腐朽は必ず此
損傷に連結し其直根より起りたるもの殊に其損傷の甚
たしき、例せば主根全周囲の樹皮を環狀に傷害せられ
たるもの如きは(第一回)此被害中の最も殘酷なる
ものにして速く樹幹の上部に達する迄其心材全然腐朽
し又其直根の下方は全く枯死腐朽せり、概して十年乃
至十五年生の健全なる林木に有ては其片材は最新年輪
の五或は六線に亘り其より内部は即ち心材と稱す可き
ものにして淡紅褐色を呈せり。而して前記の如き被害
の最も甚たしき林木にあつては其腐朽せざる部分に管
に最新年輪の四或は五線に止むるのみ、之を以て其腐
朽の進行甚だ速なるを推知すべく即ち片材より心材に
仕成せんとするの年度に達すると同時に腐朽に至るも
のと稱することを得可し、側根若しくは直根の損傷と
連絡する腐朽は前者の如く其心材の腐朽甚だ廣からず
と雖も之れより上下兩方に迄及し幹にあつては心材を
通して高きに及び下方は根心を通して殆ど頂端に達す
るものなり、樹幹の損傷と連絡するものは其局部よ
り起りて上下に亘りて心材の腐朽を見るも之又直根傷

害の場合に於けるが如く甚たしからず(第六四圖)腐朽せる心材は暗褐色を呈し質甚脆軟を以て之を分離することを得或は兩指頭を以て之を細粉となすことを得可し之を乾燥せしむる時は縱裂、横裂を生じ或は立水中に於て已に全然乾燥して年輪に沿ひ、髓放線を通して深き割裂を生せるものあり(第三三圖)

顯微鏡調査

材部を構成せる「トラヘイド」細胞膜は甚だ脆弱にして容易に割裂し或は其膜上に整然とし排列せる新月形を成せる多數の網裂を見る、然りと雖も此種の裂開は材部収縮の際生じたるものなるへし、此他髓放線の「ハレンボーム」には往々褐色の點滴を認むるのみ。

根株の近き部分の材片中には時として其組織内を通する菌糸を認む。然れども是等は死物寄生菌の菌糸に屬するものと如し。

被害木の本数及存在位置

鹽野保護區宇長坂園有林内の稍窪地に於ける十二年生及南が原山腹の平坦地に於ける十四年生林内、B度の間伐林中平均一割二分の被害木を發見し又同所C度の間伐木には凡そ七分の被害木を見たり、然り而して是等被害の源因は已に數年前にありたるものにして又

其C度の間伐に於て發見せる被害木の木割割合は多少の差あるもD度の間伐に於て上の如き被害木を見るに於ては現在の優勢木にも又殆ど此の如き被害木の存立を推認するを得べし

被害木の在立の位置並に土壤に關しては淺間山麓各地方に於て特別著しき場合を發見することを待ざりしと雖も概して凹窪地殊に濕地或は山腹の林縁に多し此他山腹の平地に於ける森林の内部にも往々被害木の群生をなせる處あり被害木多き場合に於ける土壤の上層は腐朽土の多量の含有し黒色且輕鬆にして恰も灰の如く其深さ凡そ尺餘あり或は尙之より深き處あり下層は粘土塊にして植物の根の浸入容易ならず

(二) 被害の源因

以上列記せる事實によりて之等被害の源因を次の數項に歸する事を得べし

一、鼠害、此地方に於ける鼠害は近年殊に著しく即ち冬季積雪の下に於て彼等は他の食物を得る事能はざる場合には壯年の松樹下幹の地面に接觸せる部分及根株の皮部を嚼食し其甚だしきは全周を廻りて之を食盡すに至るものあり之を以て損樹は次年に至りて其葉黃綠に變し或は全然枯死するに至る

落葉松の根部は前説の如く其の主根彎曲し太き側根は地面に沿ふて廣延し其側根と根株との分枝せる處恰も屋根狀の如く覆蓋を形成して野鼠が冬季の棲息に甚だ適當なる場合を與ふるを以て彼等は冬期此所に閉居し其間之が周圍に存する根株の表皮を食し殊に直根周圍の皮部を食盡して之れを癒合する事を得ざらしめんため

に全然枯稿せしむ此の如きは毎に其損傷の最大なるものにして直根の全部枯稿腐朽せしめ延て心材を通して高きに及ぶ側根の一部を損害せられたる場合に於ては癒合せるものありと雖も又往々腐朽の心材に及べるものありて大なる側根が其全周の皮部を全く傷害せられたる場合には又直根の場合の如く其腐朽の如く心材に及ぶものなきにしもあらず

野鼠の棲息に元來彼の如き局部あるを以て此種の原因より起る被害木は多く群生をなし或は防火線若林道に沿ひたる縁邊樹には列狀をなして存在せり

二、苗圃若しくは林地植栽の際若しくは其の場合に於て苗木の根部に受けたる傷害が充分に癒合するの暇なく其成長に伴ひて傷部より腐朽漸次大となり深く心材に及べるもの亦往々見る處なり

三、諸種の原因より起る樹幹の傷も亦此被害の源因と

なる即ち被傷の部分未だ全然癒着せざる前に於て腐朽は漸次内方の心材に迄及し其傷害部を中央とし上下兩方に心材腐朽の走るを認む

四、湿地或は地下水の淺き場所に於ては其根端容易に枯稿するを以て此れを起点として又心材の腐朽を惹起せしむるものあり之等は成長坂園有林及び輕井澤附近に於ける湿地の森林に往々認むるを得

五、信濃各地方に於て植栽せる落葉松の苗木は苗圃に於て移植するに當り其曲振部は往々傷害を受け易く或は然らざるも再び眞直となる場合なく其儘肥大生長をなすのみにして側根に比する時は其成長力甚だ微弱且つ不完全なるを以て外部の傷害に對する力甚だ強からず爲に腐朽の因を起し易し

六、元來本樹種の特長として樹体の傷害に對する癒合力は甚だ微弱なるを以て皮部に於ける少許の傷害も往々内部に影響するに至る

心材腐朽を惹起するの原因と認むべきものは以上數項に外ならずと雖も其腐朽の迅速なるは殆んど他の樹種に於て見ざる處にして是れ此樹種本來の性質なるが或は之を誘導する或る種の物質の形成によるべきは未だ研究中に屬するを以て茲に是を明言する事を得ず菌類

の寄生は往々此の如き顕象を起すべきものなりと雖も
予は樹幹の内部に於ては菌類の寄生を認むる事を得ず
或は其外方即ち土壤に接する部分に在ては往々其組織
内に侵入せる菌糸を實見する事を得たりと雖も是等は
實に局部に限りたるものにして之を以て全部に於ける
腐朽を促進せるの原因と認むる事を得ざるなり

(三) 除害の方法

被害の状況前述の如く又其原因と認むべきもの果して
上敷項にありとせば現在の森林中に於て已に被害ある
ものに對しては今日是れが救済の方法を講ずる事は等
はず只被害木を認識して速に是れを除去せん事は他の健
全なる林木の保護生育上甚だ急務にして之等は全林を
通して速に施行す可きものなり然り而して將來の造林
に對して大に注意警戒を加ふべき要点を掲記せば
一、野鼠驅除、野鼠の被害は現に尙ほ存立し將來尙ほ
健全なる林木に對して傷害を與へんとするものなるを
以て是等は充分に驅除の方法を講ずるを要す

二、苗木の培養法の改良並に其撰擇を厳密になす事前
記の如く信濃各地方に使用する彎曲せる主根を有する
苗木は實に大なる欠点にして之等は常に前記の被害を
なすのみならず其生長も亦完全にして風害及び雪害に

對する力甚だ弱きを以て苗木培養者並に栽植者も共に
注意して之が改良を計らざるべからず、此他林地栽植
及移植の際に於て根部並に幹枝に損傷をなさしめざる
様十分注意を要すべきものなり
三、樹種並に林地の撰擇、従来淺間山麓の造林地に於
ては單に落葉松栽植を専らせし林地の性質如何に係
らず廣大なる面積に同一樹種のみを以て造林をなせり
之等は少しく林業を解せるもの首肯せざる處にして
其結果の良好ならざる諸種の被害に對する處置の困難
なる今や正に著々其例證を顯出せるを以て將來に於け
る造林は細必務めて其林地に應ずべき樹種を撰擇して
以て造林の經營をなさざるべからず (丁)

○ 桎材黄色部に就ての研究

熱田兵器製造所に於て發生したる桎材黄色部に就
て研究結論せるもの

研究の目的 當所製造に係る彈藥車輻重車の車輻の材
料たる桎材に黄色の斑點を有するもの多くして検査
官は其合格の査定に躊躇するもの多し如く當所は近き
將來に於ける材料補給の困難を懸念するに至れるを

見るに及び之が經濟上決して輕視すべからざるの問
題なるを認め其研究に従事せんと志せしは昨年十一
月の事にして其研知せんと欲する處は實に左の如く
なりき

桎材に浸染したる黄色の斑點は

- (1) 如何なる成分のものなるか
- (2) 如何にして生成するか
- (3) 材の強さに影響を有するか
- (4) 車輻として使用して後歲月を経るに従ひ其斑點
は擴大なるべきか
- (5) 黄色斑點の防禦如何
- (6) 乾燥上の注意如何

研究の方針

成分はこれを檢鏡及び分析の兩面より査定すること
とし檢鏡に關しては名古屋高等工業學校教授物理學
專攻の理學士江口元太郎氏に分析は同校教授有機化
學專攻の理學士川口徳三氏の補助に依頼し當地に於
て大體の見當を著けたる後東京大林區署長林學士
橋口日美氏に乞ひて實地家なるもの鑑定を集め最
後に日本瀧葉樹に就き研究家の名を得たる農科大學
教授林學博士河合勉氏に就き研究結論せん事を

期し其研究を重ね來りしか如何せん文書の往復の如
きを以てするも到底其目的を貫き難きを知り今回上
京の眼目として諸氏に面談し其教を乞ひて解するに
至れり

研究の經過

一、檢鏡はライツ氏顯微鏡を用ひ八十倍までを使用
したり

二、檢鏡材料には桎材の全く黄色なる部、良材にし
て黄色の斑點なき部、小點の黄色斑點を有する
部を採り之を十「ミリ」平方約五十分の一「ミ
リ」位の厚さに切れるものを用ひたり

檢鏡するに黄色の染料は必ず木材の導管に沿ひ
而かも導管壁の纖維組織のみを染め細かく見る
時は細胞内にも充ち居るを認めたり八百倍の檢
微鏡にて見る時は細胞膜は單に黄色の染色をな
すのみにして決して細胞膜の破損光澤の消失等
腐蝕の現象を認めず

三、黄色に染める細胞と染まる細胞との間には何
等の差異なし又白色の部分に鹽酸鐵を注ぎ其含
有する没食子酸の作用にて染色したるものを檢
鏡する時は黒色の細胞を認め其狀態黄色部の照

- 鏡状態と何等の差違なく單に其色を異にするのみ
- 四、黄色の部分に鹽酸鐵を以て没食子酸作用にて染み
黄色の部分に鹽酸鐵を以て没食子酸作用にて染み、色して粉鏡する時は黄色の細胞が重ねて黒みを帯びたるもの、黄色の儘残れるもの、黄色の氣味を失くして單に黒變したる細胞等が錯雜混交して存在するを見る
- 五、黄色混染の部分に黒色染して檢鏡する時は黄色の細胞のみは不變にして黄色に變り他の細胞のみ黒色化し居るを明かに認むる場合多し
- 六、黄色部を浸水し煮沸する時は黄色原料は總て煮出されて黄色帶赤の溶液を得
- 七、此作用により脱色したる木材の細胞は檢鏡の結果純粹なる部分の細胞と異なる事なし
- 八、右六にて得たる溶液より没食子酸鹽類を沈澱する時は黄色の溶液を残す而して此溶液は鐵液に作用せず
- 九、純粹なる白色部を煮て得たる液は無色にして没食子酸反應を呈す
- 十、黄色の染色原料は醱酵試験を施すも繁殖作用をなさず從て黴菌にあらざるを知る

判定 右條項中第十項により黴菌にあらざるを知る又二以下八までの間に其黄色染料が木質を密せざる事没食子酸と同しきを知り四、五、六項によりて其没食子酸と全く別種のものなるか又は其普通の鹽類にあらざるを知る九項によれば其原料と木質全部に擴かり居るものにあらずして其染色したる一部に止まるもの如し而して此黄色は分解等には單に没食子酸の顯出に伴ふ「フェニム」なる現象なりとのみ記して其成分の何物たるか如何にして生成するやは名古屋地方に於て研究する方便を得ざりしを以て今回東京に就て大林區器と農科大學に就き研究したり

其諸説を綜合し之を前記實驗第九項に考査する時は此黄色の染料は常に外皮或は内皮の部分に存在するものにして粉木が其外皮に傷を蒙りたる際内部に入り込み之が汁液の作用にて其木材發育の間に染色斑點を止め其外圍には純粹木質發育圍繞するを以て恰も内部に斯かる色素を含めるが如き現象を呈するものなりと斷定せざるを得ず此立證は木質の黄色部には多少に係わらず必ず傷の伴ふを見る場合多きを以ても知るべし

黄色染色は常緑樹葉樹に屬する樺類にのみ認めらるる現象にして樺類を欠ける外邦には外見難きものなり云ふ又没食子酸が石灰に化合する時は斯の如き黄色をなすものあるよし然は伐木の後運搬貯藏等にて石灰質の土壌面等に放置さるゝ時は黄色斑點を生ずし然れども當製造所に於ける樺材は此種の變化を受けたるものにあらずは現品を調査せず一見して明かなり

農家大學教授河合博士は之を没食子酸なるへしと云はれしも前記實驗の結果を以て其然らざらんかを述へ再査を依頼し置きしか後研究の結果として「クエラントリン」Quercitrinなる色素なりしと云へり此 Quercitrinなる色素は二三の書籍により調査する時は左の如きものなり

「クエルシトリン」
米國の「カナタ」「ゼオルジャ」より「ミッシュビー」の西に至る地方に「ブラックオーク」又は「ダイヤースオーク」と稱する七〇尺より一〇〇尺の高さを有する樺屬を産す學術語にて Quercus laevis と稱す
此樹の木皮を「クエルシトロン」と稱し其内皮は絨

帯又は黄色の染料に用ひらる此染料の主用素をなすものか即ち「クエルシトリン」と稱する色素にして $H_{18}O_{10}$ なる化學式を有し Ca 含有なる有機物にして水分 $H_{18}O_{10}$ を含む此色素を以て「フラビン」Flavin と和して販賣さるゝ處の粉末狀黄色染料を調製し羊毛更紗等の染色に廣く用ひらるゝ（其製法等は Meyers Konversations Lexikon にもあり）

決定 樺材黄色は斯の如き性質の色素を以て前記の如き順序により斑點を止めたるものなれば樺皮を以て樺材を染めたるを全く同一意義を有し其材の強さの上は何等の影響を來たすものにあらず又其斑點の歲月と共に擴大するか如き恐れ更になし故に斯の如き木材は之を使用して差支なきものと斷言して可なり樺材の使用を可成的經濟的にせざるべからざる理由は今更に之を擧げざるの要なしと雖も之を附記するも亦徒爾ならず

元來樺は常緑樹葉樹にして「シヒ」類と共に森林學上暖帯林帯と稱せらるゝ地帯に限りて發育するものなり、然るに此地帯は氣候溫和にして且つ高山の中腹以下の地方を占め最も人の住居に適するを以て土地良く開拓せられ農工業賑盛の地方多きを以て天然

の美林は之れ等の増加に伴ひて次第に其面積を縮少し途に其形を失ひ材の價格年を追ふて騰貴し其補給逐次困難を増すは自然の勢なり

然るに常緑闊葉樹は之が皆伐一回に止まるべきは再び舊來の常緑樹林に復すへしと雖若し數回濫伐するか燃焼する時は遂に全く落葉闊葉樹林と變じてクヌギ・コナラ類の繁茂する雑木林と化するへし其例は地方に於ける神社佛閣の如き竿伐を入れざる處には檜類の常緑闊葉樹が蓄積たるも人家附近には其形を止めざるを見る事多し特に杉の如きは一町歩百年間三千積位を取め得るに係らず檜は八百積位をも取めかたしと云はん加ふるに運搬上の難易其程度を全く異にする以上は植樹造林に如何に篤志を有するものと雖經濟を無視し杉松を採らずして檜類を仕立てんとするか如き愚をなさざるへし、さすれば檜類は天然林のみ其供給の望を賜せざるへからず外國に比なき此良材の前途の壽命を思はし例令一寸立方の小片たりと雖火中に投じて薪炭と席を同くせしむるに忍びざるなり (完)

○米國に於ける本邦製竹細工概況

▲籠類

本邦製竹籠は紙屑入洗濯物入婦人裁縫用(一切地入針入等)辨當入、書類入、香水入、及び菓子入等として相應の需用を有したるが近來本邦原價の騰貴せしこ一には我經木細工の需要漸く増大したるにて賣行較や宜しからざるもの、如く價は細工の精粗容積の大小によりて等差あり一組四六仙位より始まりて六弗若くは夫れ以上に達するもありて一々之が相場知悉せんことは頗る難き所なり用途によりては(例之は紙屑入洗濯物入等の如きもの)竹細工の方經木細工に優るも竹材を以てしては着色意匠等經木の如く自在なるを得ざる而已ならず其の製造費に在りても經木に比しては自ら多きを要するが故に若し經木細工の如く當國人の嗜好に適すへき着色意匠の自在なる方法の案出せられずして今日のまゝ推移せんには愈々倍々經木品の爲めに其の販路を減縮せられん事は殆ど疑なきに似たりと云ふ又經木細工の用途は畧は竹製品に似たれども其の範圍較や廣く殊に手觸れ好く外見華美なるを以て祭日等の贈物に適するも竹製品は之れに適せずとなり

本品市價騰貴の結果は獨り我が經木品の代用を促したるのみならず、外國製並に當國內地製類似品例へは柳の枝にて製したるもの又は草の莖にて製したるもの等の需用を促進しつゝありと云へは本品の需要を維持増進せんには一方着色意匠の上に新生面を開くの傍ら原價の低廉を計ること最も肝要ありとす、

▲家具類

椅子、化粧臺、卓子、書棚等の竹細工品の賣行きは籠類に比して稍々良好の方なるが是等は何れも大量のものなるを以て仕上品を輸入しては其の運賃に多きを要するが故に大抵本邦より原料たる竹材其他を輸入し當地にて仕上げ販賣に供するを例とすと云ふ、

▲簾類

當地に輸入する竹製簾は之を二種に區別する事を得べく其一は主として夏季玄關に用ふるものにして *Paper Shida* と稱し編みたるもの、他の一は *Bamboo Curtain* と稱し主として室内に用ふる條簾にて兩者とも相應の賣行ある事なるが後者の方需用廣きもの、如く兩者とも其大さ一定し前者は六尺(横六呎長六呎の意以下做之)七八、八八、等後者は大抵横四呎半長さ八九呎に限りられぬ。前者は雨等の爲めに變色の虞多きを以て着

色せざる方賣行良く之に反し後者は種々の模様ありて室内粧飾に適する方氣受け宜しと兩品とも近來本邦原價の騰貴に伴れ相場高きを致し昨年比し既に六七分方の高値にて目下編簾は卸一平方呎一仙八分、一條簾は一對二弗位に及ぶと云ふ條簾の中には硝子品、餅玉製、經木等製もあるが硝子製は價高きのみならず心糸に損傷を生し易く餅玉製は鼠喰の虞あり經木製は塵埃附着し易き等の缺點あれば竹製の方賣行き良からんとの事なり、

▲竹行李類

シュートケース形及び手提鞆形のものとも自方軽く容積割合に多くを入るゝに足るを以て旅行用として夏向きの需要可なりにて上品は東北地方に氣受け好く並品は南部方面に賣行き宜しとなり本品も近來本邦原價に伴ひ著しき騰貴を告げ取利薄となりたりと云ふ本品の缺點とする所は合せ目に顔を生し易き事にて此等の缺點を改良すると同時に容易に損傷せざる機新工夫を加ふる事甚だ肝要なりと云ふ、

○加奈太の紙料及木材 (山林公報)

トロトン市の新聞用捲取紙は以前概して二弗の契約な

りしも今は二弗二十五仙以下にては注文に應ずる者なし、貨金及原料の騰昂は益々紙價の引上げを促せり、現下加奈太の市況は過般熾失したるスー工場の影響を蒙れるものゝ如し同工場は罹災前に一日約百十噸の木紙料を製造しつつありしが其の再興には九ヶ月を要すべしと云ふ、目下本紙料業者は新契約を結びつつあるが碎木製は概して昨年十一月よりも二弗高なり既に昨年積込十三弗なりしものが本年は十五弗を獲つゝあり亞硫酸製は平均三四弗の騰貴にして工場受渡三十八弗乃至四十弗なり、原料木材の騰貴は各林業者をして白檜の伐採に着眼せしむることとなり今は同樹は貴重視せらるゝに至る

○米國と樟腦

譯文

儉安を貧るを得ざるへし
最近の形勢に依れば幸ひ日本と戦争せんとするが如きことなかるへきも賢明且つ老練を以て知られたる「ウエルン」氏を局長に戴ける農務局は米國は將來尙安泰の地位に居る事を得へしとは言明せざるなり氏は日

本は兎も角も一朝他國と戦争を開く事ありとせば樟腦は戰時禁制品として布告せらるへき事及び其の結果米國に於ける供給は忽ち杜絶せらるへきことを信ぜり故に氏の所管せる農務局は米國に於て樟腦を産出するの企劃を立て既に著しき進歩を爲せり農務局技師は米國殊に南部各地に於て樟樹の成長すへきことを知り農民をして樟樹の栽培に着手せしめたり「ワシントン」市に於ける技師は先に「フロリダ」人が四十二エーカーに渉る樟林を所有し新材林として之れを伐採せんとするを知れるが故に該樹の保存すへき事を勧告したりしが現今に於ては相當の樟腦を産出するに至れり樟樹は年々収獲あり

農務局は米國に於て樟腦業を經營するの必要を認めそのは全く臺灣に於て行はるゝ不經濟なる方法とは異なるものなり即ち臺灣に於ては樟樹を根元より伐採し樟腦は此の全木より産出せらる此の方法は營林上難事に屬せるは云ふまでもなし是に於て技師は之に優りたる方法を發見し樟樹より年毎に収獲を得らるへきものなる事を知れり即ち年毎に一回普通大さの樹木より枝條を伐採するを得ること及び此の伐採したる枝條より樟腦を産出し得べき事を知るに至りたるは技師等の頗る本

懐とせる所なり由來臺灣に於ては樹木は隔離して植付け充分生長せしめて往々五六十呎の高さに至らしむるも米國の科學者は樟樹は並通風の如く成長せしめ且つ恰も常盤樹にて成れる蠶の整齊せらるゝが如く年々一回枝下しをせらるへきことを知り此の毎年枝條の収穫と取りも直さず樟腦産出の基礎をなせるものなり實見する所に依れば其の枝條は乾燥、荷造の上遠距離に運搬し得て樟腦を産出するを得ると云ふ此の事實に徴し遂に樟腦産出の場所に依り遠距離の土地に樟樹を栽培するを得るに至るなるへし(山林公報轉載)

○阿里山檜林と神木

嘉義廳管内の群山中にあり新高前山の支脈遶つて嘉義方面に赴くもの之を阿里山連峯と稱す就中飯包山、水山、塔山等頗る良材に富み殊に檜の純林に至つては夙に世界其類無しと稱せられ或は三匳の富庫となし或は無蓋の森林とす唯其地群山重疊の中に在り木材の搬出に不便なるを以て麓に藤田組に於て鐵道を架設し之が經營に着手せしも事業の都合に依り一時之を中止するに至れり山中檜の巨材あり直徑三間一樹を以て

八百尺の材積を得るに足るものあり本邦無比の巨木と稱する山下の溪上に蕃人の部落あり阿里山蕃なるもの是れなり、

○

後藤 棧 齋
眼前風物動吟情 詩料叢多句不成
一片心期何處寫 筆鋒隨北自縱橫
蹶陟高山涉大河 巡行不暇惱詩魔
無詩恐惹騷人笑 吟斷雲松樹海歌
願北歌成有幾年 移來樹海豈無緣
欲全天候隨人意 莫怪開山我著鞭

竹 笈

台灣特有の舟にして竹を以て之を編み台灣南部の港灣に於て貨客の運搬を爲せり其巾四五尺長さ二三間にして乗組人員大抵三名搭載斤量約二千斤にして暴風怒濤に遭遇するも容易に顛覆の虞なきを以て安平の如き激浪常に高き港口には唯一の交通運搬機關なり。

○日本木材開業

其筋宛岡部領事發電に依れば木材會社の事務は其後極めて良好に進行し去る卅日には岡部領事より陳督辦及

兩理事長並に清國大官を招きて宴を開き一日午後二時には督辦兩理事長打揃ひ木材廠の廳舎を巡視し買入の準備に取り掛り又午後六時には兩理事長就任披露の宴あり英米領事日清大官紳商等來會せり尙ほ三日には大園遊會を催し大官紳商數百名を招待し開業式を舉行する筈なりと。(四十一年十月三日時事新報より轉載)

○木實利用の大發展

林産物を利用すへしとは吾人が平生唱導し置きたる所なり。然るに今や熱心なる斯道の篤志家あり。吾人の希望は疾く既に實行の途上を馳せつつありと云へり。嘗て本紙にも詳しく紹介したる事ある如く本縣小縣郡長久保出身柳澤李太氏の發明に係る木實を利用する酒精醸法の如き手近き其一例にあらずや。聞くが如くんは柳澤氏は明治卅四年の交日光山申及信濃山中に於て群狼の持にクエルクス種の木實を愛好せることを發見し試験の結果右クエルクス種類の木實中には毫も有害物を含有せざるのみならず人類に必要な澱粉質を多量に含有せることを認め。爾來不屈不撓の苦心を以てして精密なる試験を繼續すること六年有餘。苦

心慘憺の功空しからず、遂に好成績を得たるを以て特許の出願をなしたるに待こと僅に一ヶ月餘にして許可せられ明治四十年十一月廿八日附特許番號一三二九八號にて此名譽ある大發明は一段落を告ぐるに至りしものなりと云。吾人は本縣下の爲に本縣出身柳澤氏の勞を多とせざるべからず。

發明者の語る所と云ふを傳へ聞くに從來糖蜜又は米等より醸造せられたるものは如何に純粹なる酒精と稱するも必ず多少の水分を含有し大抵九十%にして且幾分の臭氣を有するも此發明の法方に依り木實より醸造せられたるものは無水酒精即ち真に純粹の酒精と稱すへきものにして九十六%あり。而して又益も臭氣を感ぜざるは其特色とする所。若夫其の製造費用の廉なるに至りては其特色中の最特色とする所にして世界之に及ぶものなしと。

原料の供給に就ても柳澤氏が自ら調査したる所に依ればクエルクス種の木類が日本國中に於て毎年産出する所の木實は極内輪に見積るも

- 一 赤樫實 三十万石 二 白樫實 五十万石
- 三 ツハメ樫實 五十万石 四 シロツバメ樫實 百万石
- 五 大樽實 二十万石 六 小樽 百万石

- 七 柏實 五十万石 八 山毛櫨實 二十万石
- 九 枋實 五十万石

合計四百七十万石の多きに達し從來山林に委棄せられ全く人の顧みざりしものなりと云ふ。故に今此醸造法に依る時は木實百基に就き酒精二十基を得るの割合合れば百石の木實を以て二十石の酒精となす可く四百七十万石の木實は化して九十四万石の純粹アルコールとなす可し。之を一斗十四圓五拾錢の時價に賣却することすれば一億三千六百三十万圓を得へく此内より原料採取費用、製造費用、税金等を控除するも優に五千万圓の利益を擧げ得らるへしと。

果して氏の言の如くなることを得ば實に驚くべき國益にあらずや。抑も吾人は未だ直接に柳澤氏の説を聞きたるにあらず。復氏の事業も未だ實地の經營に着手したるに非らざれば吾人は如上の説を九呑みして讀者に紹介する程の勇氣あるものに非らず。然れども以上の言は吾人が信賴する友人が直々柳澤氏より聞き得たる所なりとて吾人に語りたる所なれば思ふに大差なかる可きを信す。發明は概して無より有を生ずるもの。今此發明の如きも山野に委棄せられたる廢物を利用して經營宣敷を得は一ヶ年一億万圓近くの國益を擧げんと

するものなり。林産物利用の道も凡斯の如くにして殆んど遺憾なしと云ふ可し。國費の膨脹國運の前途を悲觀して余は徒らに喧囂を極めつゝある間に潜心工夫人知れず斯の如き國家の財源を發明しつゝある篤志家も世には存在することを知らざる可らず。記憶せよ世界は空論の時代にあらずして實行の時代あるを。精進努力の世界なることを。(信毎より轉載)

○白木耳の栽培

白木耳は本邦各地にも産するが我國人には嗜好せられされども清國に於ては非常に愛用せらるる食用菌類にして銀茸の稱あり乾したるものにて一斤貳拾五圓の價するに至ると云へり此白木耳は形鶏頭に似て白く生木茸の如く膠質にして觸ると恰も葛餅の如き感あり壓すと甚だしく粘着性を現はし性寒地を好み嚴寒の候よく發生す。

白木耳は天然に發生するが之れも又推疊の如く播種によりて發生せしむるを得樹種は椴櫨よく其他の落葉樹葉樹にも亦栽培するを得て其法は種子及滑汁を用ひて蕃殖するにあり滑汁と云ふは滑木の白朽部を乾燥する

こたなく水を加へ糊鉢の如きものにて細粉となし更に水を加へて稀すめたる物にして之れを新滑木に注ぐなり。(農家副業案内轉載)

○鋸屑より蓆酸製法

鋸屑より蓆酸を製するには其規模の大小によりて器械も異なるへきが別に精巧なるものを用ひすとも半鍋冷却器(鉛板)硝子製或は鉛製漏斗鉛製濾袋湯煎等にて足るへし原料として用ふる鋸屑は其大きさを一定するを要すれども必ずしも微細なるに及ばず又樹種によりて鋸屑の種類を分つをよしとすれども若し出来ぬならば少くとも材の硬軟は分別するを要す先ず右の標準にて篩分けたる鋸屑を半鍋に之れを薄く敷き之れに鋸屑の量の約二倍に當る亞爾加里(苛性曹達六分苛性加里四分の割合にて混したる比重一、三乃至一、四のもの)を注ぎ徐々に熱を加へ百八十度に至れば鋸屑は分解して蓆酸曹達を生ずべし此際注意すべきは温度二百五十度に昇れば蓆酸分解を始めるなり、斯くして生せる蓆酸は「ボーマー」三十八度に煮詰めて結晶蓆酸曹達とし之れに石灰を加へて蓆酸石灰となし此蓆酸石灰に硫酸

を加えて茲に始めて蓆酸を分離するなり右の作業に於て石灰硫酸を適量に用ひ廢棄加里曹達液を回收して徒費せしめざることは大に注意を要す此ことは餘程熟練を積まされは萬全を期すること多類なるを以て時價一封度三十錢以上なるべし去れば鋸屑を供給す、鋸工場にあらは蓆酸製造を副業として適當に營まは利ありと云ふべし。(農家副業案内轉載)

○世界稀有の大森林發見

此程英國殖民省山林技師某氏が新に西部阿弗利加の英領地に於て發見したるケニア森林は驚くべき大なる森林にして長さ二百八十七哩幅平均八哩を有し木材の總面積凡そ百万エーカー(我が四十万丁歩)あり假りに一立方呎の木材の價を二片三分の一と算する時は價格實に二千三百萬磅(我二億三千万圓)なりと云ふ。

○製紙の新原料

(玉蜀黍の幹莖の利用)

米國農務省林草課に於ては是迄數年間玉蜀黍幹莖の利用方法に就き考試中なりし處熱心なる研究の結果今回

實用の價値ある五種新紙を製出するに至れり内一種は暗灰色を呈し羊皮紙の如く厚く重くして韌性を有し同種にして輕き者あり又他の二種は黄色を帯び而して別に白色を帯びたるもの一種とす其製造工程によれば木材粉より紙を製するに比し一層簡易にして此種幹莖の其の軟弱なるため處理に要する時間は僅に二時間半にして木質纖維軟化に要する時間に比し僅に五分の一に過ぎず農務省は懸がて之れが大規模の製造に着手すべければ非常の廉價を以て製出し獨り紙價の低減するのみならず原料供給者たる農家の所得少からざるべし。

(價値毎日新聞)

○現今林業の趨勢

關東區實業大會に於ける農商務山林技師白澤愷美氏の講演大意

林業の基礎を立てんには世界の大勢に着眼せざるべからず、少くも世界の木材事情に就て述べむか、木材の輸入最も多きは英國にして年額二億萬圓、輸出は僅々二千萬圓に過ぎず、之に次ぐは獨逸は森林事業の最も進歩登立せる所、森林の面積全土の二割五分を占め一

千四百萬町歩を算す、之を一人に割當つれば實に二反歩なり、佛國の輸入額は六千萬圓、輸出は一千七百萬圓、森林の面積を人口に割當つれば、是亦二反歩に當り、和蘭は輸入三千七百萬圓、輸出は二千六百萬圓、國土の小なるに比してかくの如き結果を表すは、航海の便あるを以て、一旦輸入して復び輸出するに因るなり、伊太利丁扶瑞典各一千万圓の輸入をなす、西班牙葡萄牙伯ルガリ牙塞耳比亞等孰れも森林に乏しからず而も各相應の輸入を仰ぎ居れり、更に輸出の最も多き國は之問には先指を埃太利に屈す、輸入は四千万に過ぎず、輸出は實に八千四百萬圓に達す、諾威は輸入百七十万圓、輸出は七千万圓、加奈陀は輸入八百萬圓なり、輸出は六千四百萬圓、露西亞は輸入七百八十万圓輸出は四百三十萬圓なり、米國は、十年前には、輸出超過を爲せしも、近年は之に反して輸入超過して年額二千万圓他に之が供給を仰ぐ、觀じ來れば、工業の發達せる國は輸入すること大に、將に開明の域に達せんことを輸出するは、機寸の軸木年額一千万圓、漆箱五十三萬圓、經木真田八十八萬圓、樟腦五百万圓、漆器(木地漆)の百六十万圓、檜百万圓竹の製品(行李、美篋

細工)の如き百〇八万圓、竹材(釣竿、煤竹の如き)十二万圓、木炭(支那朝鮮在留の邦人に)四十万圓、杭木三百六十万圓、木材八百九十万圓、雜貨百万圓合計約三千四百萬圓に達す、以上の金額中直接森林の産物たる木材のみを産するも二千五百万圓に上る、而して一方輸入品を見れば、炭は五十万圓コルク(佛伊西より)五十万圓、紙原料百廿五万圓、加奈陀、緬甸、新嘉坡等より輸入木材五百萬圓、輸出輸入相對比し、以て其の國の如何なる状態に在るかを知らるべき也、本邦の森林は二千七百万町歩、内國有林は七百万町歩、實測の結果は必ず減少すへきを以て之は五百万町歩とす、民有林は實測の結果必ず増加すべきを以て之は二千五百万町歩とす、而も全部利用する能はざるものあり、因て之を二千万町歩とし、一町歩より年々十尺の生長とせば全森林に於ては二億万尺の生長を見る、而して本邦は木造家屋多きを以て、英、佛、の一人宛よりも大に平均一人一年の需用高約四尺九分とするも尙一億六千万尺を以て十分とす、其の餘餘は輸出せざるべからず、尙新領土樺太の面積は三百七十二万町歩多くは森林なり、現在の森林二百六十万町歩中百五十万町歩は伐採造林し得べき施業の林にして、一町

開東の諸州山多し登之に留意せしめて可ならむや、

(普通毎日新聞)

○施業案編成

今茲に測量済の面積既知の一森林ありとす而して此の區域内には種々の樹種、地味、年齢、材積等あるも漠然として各林分の位置を知ること能はず故に其森林を區劃して事業區、林班、小班等とし其の所在を明ならしむ是れ恰も長野縣の地籍を區別して郡市村番地とし長野縣西筑摩郡島町向城五七六四番地とは山林學校かりと知り得るが如く何事業區何林班何小班と言へば直ちに其所在を知るを得るなり即ち事業區とは郡又は市に對し林班とは町村に對し小班とは番地に對するものなり

森林區劃により其の位置を知りたる後各小班に付地況林况等の森林調査をなし地位材積等を知る即ち此森林調査なるものは各市町村に於て土地の善惡により地價に等級を定め又は各戸に就き身分營業等を調へ其財産を知るが如し。

森林調査により事業區内の材積を知るときは其結果と

歩は五百尺を得るに難からず、即ち全土より七億五千万尺を得べく百年の輪伐として、五百万尺を宛輸出し得べき木材あり、然らば輸出の方法も亦かうきうせざるべからず、第一、木材工場を興すべし、丸太を以て送るは最も不經濟にして、其の地に於て直に使用せらるゝ如くする時は、容積小且需用速かなり、第二、木材工業を起す、即ち原料にて輸出す製品となして送るなり、尙木材の消費に就て云はんには、鐵道の杭木に粟を用ふれば五年乃至七年間保つと云ふ、而して佛國には山毛櫨を以てして廿年乃至三十年間腐朽せず、之れ防腐劑を用ふるに由る、邦人の木材防腐に冷淡なるは遺憾なり尙木材使用に付きて、木材を其備用ふるは極めて經濟なり、歐洲にては、廉價の木地に高價なる薄板を張りつくと盛に行はる、張り板の利益は三あり、比較的輕量なるを狂を生ぜざるに廉價あると是なり内地使用のみならず、輸出も亦かくの如くにするに致らざるべからず、由來本邦は森林の多き所、然るに尙かくの如く使用に就て顧慮するあらば、森林は餘剩を生じて、之が處置に苦むべしと云ふ者あらむ、然れども森林の有る餘は毫も憂ふるに足らざるなり、森林の基礎を立つる者は宜しく世界の大勢に従ふべし

して年々の收穫を豫定することを得。

是れ恰も各市町村にて各戸に付其財産の調査出來たる結果諸種の税金例へは地租營業稅又は戸數割等の賦課をなし年々の収入を得るが如し

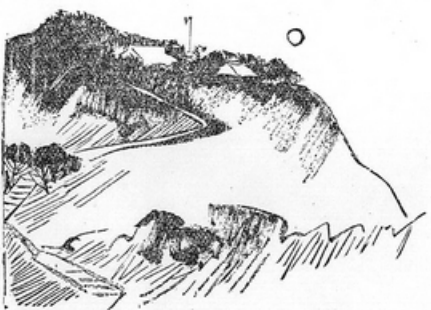
現在の森林にありては多くは其樹種年齢林相等複雑且つ不正なるを以て勢ひ之れが改良をなさざる可からず茲所に於てか始めて知る將來の造林計劃の必要なることを知るべし

是れ各市町村に於て現在甲地は畑地となり居れども人口繁殖又は時世の轉移により土地繁盛に越きたるを以て宅地とす或は建築物を造營し又は草葺の家を瓦葺にする等種々其土地の狀況により變造改良を計劃するが如し

上述の如く森林區劃調査收穫豫定並に林造豫定を終れば是等の豫定又は計劃等をなしたる理由目的を説明するがため施業案說明書の調製をなすにあり

以上の順序により種々の計劃豫定をなし之れを實行するに際し種々の災害又は豫期外の出來事のため或は本年伐採を豫定し居りたる所も全部實行出來ざりしとか或は虫害風害に罹り豫定實行出來ざりしとか附近に大火災ありしたため豫定外に伐採せざる可からざる等種々

變動を生ずるを以て十年毎に施業案検訂して豫定と實
行とを比較し更に十年間の豫定計劃演表等を造る之れ
を施業案編成とは云ふなり。(松澤)



紀行

明治四拾一年度第三學年生

修學旅行記

紙面の經濟を計りて其觀察の主目的を掲載するに止めたり

其一大坂大林區署奈良小林區苗圃

當苗圃は奈良市を距る約拾町の所に在り、略温寺村に
在るを以て略温寺苗圃と稱し。面積四町七反一畝二十
一步にして、地質は粘土より成り苗圃として適當の土
質なりと云ふを得ず、此苗圃に於て養生する主なる樹
種は樺、赤松、扁柏、樟、檜、榲等にして全小林區所
管の菩提山、取山、小僧山等の各伐採跡地に移植の豫
定なりと云ふ。

第二御立敷竹林

御立敷竹林は奈良市を去る約一里の所に於て津川の
沿岸にあり、面積五町五反零二十六歩あり該林は數年

前溪竹若竹の混淆林なりしも自然植に攪り淡竹は殆ん
と全部枯死し現時は若竹の單純林となれり。
自然枯病發生原因に就ては肥料欠乏の結果なりとの説
あれども、同小林區署に於ては其説を確信する能はさ
る点あるを以て未だ其説に従ひ豫防法驅除法等を實施
せし事なしと云ふ。

御敷竹林は面積五町五反貳拾五步にして御立敷竹林と
同じく淡竹の大部分は自然枯病に罹り枯死し、現今は
殆んど若竹の單純林となれり。
今前に掲げし苗圃に於て、本年度實行せし播種、床替
山地移植等の各樹種名、本數、施業地名並に明治貳拾
壹年度以降字御立敷及字御立敷兩竹林に於ける伐竹の
量、品質、新竹發生の量等を左に表示すへし。

略温寺苗圃

種	施業別	樹種	數	量	面積	積	施業法	備	考
播	同	クヌギ	三〇〇	一、一六	一、一六	條	播	地味不真ニシテ肥料欠乏シ成績良好ナラズ	
同	同	アカマツ	一〇〇	一、五	一、五	條	播	種子不真ノ爲メ發芽最少	
同	同	カガシ	二	〇、二〇	〇、二〇	散	播	成績中様	
同	同	ガガシ	二	〇、二〇	〇、二〇	散	播	クヌギニ同ジ	
同	同	マツ	一〇	〇、一五	〇、一五	散	播	クヌギニ同ジ	
同	同	ヤシ	一	〇、〇五	〇、〇五	同	同	同	
同	同	ウシ	三	〇、〇五	〇、〇五	同	同	同	
同	同	ドク	五	〇、〇五	〇、〇五	同	同	種子不真ノ爲メ發芽セズ	
同	同	キナ	五	〇、〇五	〇、〇五	同	同	クヌギニ同ジ	
同	同	モリ	五	〇、〇五	〇、〇五	同	同	クヌギニ同ジ	
合	計		四二四	三、九二	三、九二	條			
			五	五	五				

施業別	播種	本數	備	考
床替	クヌギ	三三、五六八	第一回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	同	五六、二二二	第二回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	アカマツ	一九、四〇六	第一回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	ヒノキ	五四、〇〇〇	第二回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	シラカシ	八、八五五	第一回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	クノス	一四、〇一八	第二回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	同	五二、九二四	第一回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	同	七、八四四	第二回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	同	一一、三三七	第一回床替ハ各樹種共同様ナリ	
同	同	三六〇、一九四	第二回床替ハ各樹種共同様ナリ	
合計	ケヤキ	同	同上苗木代ヲ除キ參照七拾九錢也	
施業地名	新植別	樹種	面積	經費
菅提山	新植	赤松	五、〇〇〇	八八、八九七五
同	同	檜、樺、櫻	九、一四〇〇	五七〇、五七五
同	同	同上	三、八六四〇〇	同上苗木代共六拾貳圓四拾貳錢七厘也
同	同	同上	九、四六二二	同上參拾五圓六拾七錢也
同	同	同上	五、八五〇〇	同上貳拾四圓六拾參錢參厘也
同	同	同上	五、一四二五	同上拾參圓五拾貳錢參厘也
同	同	同上	同	同上苗木代ヲ除キ參照七拾九錢也

其四 多武峯の森林

此森林は總面積約一千餘町歩にして、之れが合理的の經營に着手せしは、百數十年以前にありと云ふ。近時植林大に開ける所杉檜の人造林尙葱として繁茂するを見る。此森林は其創め模範を吉野林業に取りしものなるを以て施業の方法は吉野の方法と異なる所なく、樹種の如きも杉を主とし、檜花柏等の樹種僅に混生する而已なり、當地方に於ては吉野地方と同じく杉檜の外一檢瀝葉樹即ち樺櫟等の如き有用樹種にありと雖も凡て雜木と稱す。從て其材價に就ては信據す可き一定の價格なしと云ふ。杉は山元にて一尺、一圓五拾錢乃至五圓平均三圓位にして、樺井驛の市場價は平均五圓なり

御立裁園有林新竹發生産調査表

原樹	年度	三寸	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸	尺	尺一寸	尺二寸	合計

同上苗木代共拾七圓六拾九錢也

多武峯より樺井驛は陸路約二里にして當驛にて賣却する時は山元にて賣却するより約三十錢の利益ありと云ふ。故に伐木造材運材雜費等を合計して一圓七拾錢即ち一里に付き八拾五錢の經費を要するを知る可し、扁柏は山元にて平均五圓五拾錢位にて樺井驛にて八圓位なり。杉材に比し市場價と山元代價の差の大なるは杉に比し、重量の大なる爲め比較的多くの運搬費を要すると樺井驛にて賣却の際不渡材を生ずる多きを以てなり。

當地方林業夫の賃金は袖夫は一人一日五拾五錢乃至八拾錢なり、植付及び下折人夫は平均四拾五錢にして就業時間は午前七時より午後四時頃迄なりと云ふ。

年度	御立敷園		有林連年伐竹取調表		備考	
	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸
21						
22						
合計						

年度	御立敷園		有林連年伐竹取調表		備考	
	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
合計						

不詳

年度	御立敷園		有林連年伐竹取調表		備考	
	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸
21						
22						
23						
24						
25						
26						
合計						

不詳

年度	御立敷園		有林連年伐竹取調表		備考	
	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸
21						
22						
23						
24						
25						
26						
合計						

年度	御立敷園		有林連年伐竹取調表		備考	
	四寸	五寸	六寸	七寸	八寸	九寸
21						
22						
23						
24						
25						
26						
合計						

- 一 同 中庄郷 同 三名
- 一 同 黒鹿郷 同 三名
- 一 同 西奥郷 同 五名
- 代議員會に於て議決すべき事項は左の如し
- 一 定款の變更に關する事
- 二 經費の豫算及其徴收方法に關する事
- 三 經費の決算認定に關する事
- 四 豫算を以て定むるもの、外新に義務を負担し又は權利を抛棄する事
- 五 不動産の處分並に買受讓受に關する事
- 六 事務所の位置に關する事
- 七 其他定款に規定せる事項及組長に於て必要なりと認むる事項

明治卅九年年度に於ける各組合産出川下し貨物並に經費徴収高は左表の如し

計	組 合	種 貨 類 物	本 個		床 敷		價 格		組 合 經 費	
			數	數	數	數	格	費		
川上	木工材	加工材	八六九	一一一	二七	九三一	六九三	二五二	一〇	三七四
小川	木工材	加工材	五五九	八五三	二二	九六五	三五三	三三二	一	四五九
中庄	木工材	加工材	一九五	七六九	八	四二二	一一二	三八八	二	二六五
西奥	木工材	加工材	三〇一	二一六	三	九四六	二〇〇	七五三	一	二五六
黒鹿	木工材	加工材	二四一	八二四	六	三二五	一四七	〇五四	八	八九〇
計	木工材	加工材	二、一六七	七七三	六三	五四二	一、五〇六	七八二	五	一、八二二
					三九	四一三		二一〇		五、九七〇

同年度中大坂和歌山に於ける木材販賣數量並に價格前年度と比較表を掲ぐれば左表の如し

和歌山	種 貨 類 物	明 治 卅 九 年 度		明 治 卅 八 年 度		比 較 増 減 又 は 高 低
		數	價	數	價	
床	木工材	四二、〇六〇	四一、二二三	四一、二二三	四一、二二三	八四七
一本平均木數	價	一一四、八六六	一一五、二二五	一一五、二二五	一一〇、二八八	一、一〇二
一本に付	單	三六六	九〇、四三一	三十七本	二二三、四三三	一本方太シ
一本に付	單	七十六圓	三十七本	二十一圓	五十八錢弱	五圓高
		七十六圓	五十八錢弱			拾二錢同

大坂	種 貨 類 物	明 治 卅 九 年 度		明 治 卅 八 年 度		比 較 増 減 又 は 高 低
		數	價	數	價	
床	木工材	三、四六五	三、六四九	三、六四九	三、六四九	一八四
一本平均木數	價	一四〇、七三三	一三八、三九六	一三八、三九六	一一三、三三〇	二、三三〇
一本に付	單	四〇本	二二、三九九	二二、三九九	六一七	六、一七〇
一本に付	單	參拾四圓強	參拾參圓強	參拾參圓強	三本方細シ	三本方細シ
		八拾八錢弱	八拾八錢弱	八拾八錢弱	壹圓高	壹圓高

合 格	種 貨 類 物	明 治 卅 九 年 度		明 治 卅 八 年 度		比 較 増 減 又 は 高 低
		數	價	數	價	
床	木工材	四、五二五	四、八六二	四、八六二	四、八六二	六六三
一本平均木數	價	一六八、九五六	一六九、六四七	一六九、六四七	一六九、六四七	九六九
一本に付	單	一三三、七八二	一〇二、三、八三〇	一〇二、三、八三〇	一一四、〇五二	一一四、〇五二

計	一床平均木数	三十七本	三十七本	五圓
	單	一床に付	貳拾七圓	貳拾貳圓
	價	一本に付	七拾貳錢	六拾錢
				拾貳錢

前表に依り前年度と對照するに床數に於て六百六拾參床増加せし木數に於て却て九千六百九十一本の減額を見るに至りしは細口小丸太の仕出し少かりしを示すものなり

に適度に取り廣げ晴天に一日位能く乾燥したる後濕氣の入らざる様蓋紙袋に入れ天井裏等に吊し置き翌春に至る迄貯藏す。

其六 吉野郡王瀧村宇小倉山苗圃並に間伐皆伐施業に就て

(c)小倉山苗圃は當村民共同經營に係り面積約四町歩にして北方に面し地質は壤土より成る水利の便を缺くを以て適當なる苗圃と稱するを得されども周囲の狀況並に傾斜の度合等より考ふる時は耕地尠なき當地方にありては、苗圃としては比較的良好の位置を選定したるものと云ふへし、今當地方人民が苗圃の選擇より種子の採集精選より播種床替、山地移植に至る迄一般苗圃の事業の實行方法は略次に述ぶるが如し。

種子は秋土用前後球實に淡黄色を帯び少しく口を開き初めし頃杉は六十年乃至八十年生扁柏は三十年乃至四十年生の壯木より採取し箕を以て之を風乾し又は篩ひ未熟の種子及び塵埃を除去し澁紙又は琉球青箋等の上

は一尺位の間隔を設く。

移植伏苗は平鐵にて横筋を掘り五寸以上の苗は苗間五寸列間七寸とし一本づつ列植し次筋を掘る土を以て苗木の根を埋むるものなり。五寸以下の小苗は指植法により二本づつ並列し次筋掘り付けの木を以て其の根を埋むるものなり。移植後は株草又は葉を細小に刻みたるものを一面に撒布す之れ雜草の發生を防ぐと共に土地の乾燥並に降雨の際に於ける泥濘を防ぐ爲めなり。

杉苗木は移植の翌年堀り取り一尺三寸以上に達せる者は山地に移植しうれより短かきものは再苗圃に移植す扁柏の伏せ苗は二ヶ年間其儘養成し三年目に掘り杉苗と同一の取扱をなす、而して指狀杉苗は翌年堀り取り主根を切り去り伏苗となし其翌年一尺三寸以上に達せる者を山地に移植し夫れより短かきものは再び苗圃に伏苗をなす。

扁柏の指狀苗木は尙一年其儘培養し再翌年杉苗と同様伏苗をなし其翌年大苗を山地に移植する事前に述べたるが如し而して其の伏苗間隔は苗間を七寸とし列間を一尺とす。

移植 圃の培養は播種苗圃と殆んど同様なり只異なる点として、覆を夏早天酷暑の時のみ實施し施肥は伏せ苗當時の腐株類の振り肥を夏土用中に一回及冬季霜雪降

葉又は莖稈にて畦巾より四五寸廣く日覆厚根を作り床の時隙に細杭を打ち込み竹又は細木を渡し其上に屋根を乗せ取除きを自由にして夜間及び晝間細雨の時に取去るを便にし日覆とす。日覆の高さは最初四五寸とし爾後苗の成長するに従ひ一尺二寸迄高む、午後雜草發生する時は降雨の歇みたる後又は其の翌日地床の乾燥せざる間に之を除去し又苗木發生密に過ぐる時は適度に間引くを常とす。

發牛せし苗木は播種の翌年春彼岸中に掘り取り其長さ五寸以上に成長せし者は伏苗とし五寸以下の小苗は指植とす。若し一般苗木の發育不充分にして三寸以上に達せざる時は其内の優苗のみを抜き取り指植をなし其餘は尙一ヶ年間其儘養成するを可とす。

施肥は播種床仕立の際下肥一回播種後夏季葉糞粕の粉末を稀薄にしたるもの一回立秋以降雨後に下肥を二回施すを普通とす。

害虫の驅除法として、煤を稀薄に撒布し又は蠶糞稀薄に溶解して撒布するを簡便法とす。

移植苗圃の選擇には播種苗圃と大差なきも地味中庸なる傾斜地を選び移植一週前に能く耕耘し濃厚なる下肥を施し移植に際し四五尺巾に畦を作り畦と畦との間

下前に一回即ち前後二回増加施行するにあり

伐木法

間伐は杉樹は二十年牛以内は隣樹と隣樹との枝葉相重ありたる時三十年牛以内は枝端二分以内重なり合ひたる時五十年牛以内は枝端少しく重なりたる時五十年牛以上は將に相接觸せんとするときは好機とす。

扁柏は日光透射し且つ林地の濕潤ならざるを好むものなれば二十年牛以内は杉樹の三十年牛以内の比準に倣ひ以上順次其の比例により施行するものなり。

杉、扁柏の混滑林に有りては杉多ければ杉に扁柏多け間伐の年度歩合等は林木の粗密並に一般林地の状況により異なるを以て一定するを得され共吉野に於て標準とする所を示せば在表の如し

間伐度數	植付後年數	現在木數	間伐歩合	間伐木數
第一番	十六年	七〇〇	二割三歩	一六一〇
第二番	十九年	五三九	二割二歩	一一八五
第三番	二十二年	四二〇	二割一歩	八八五
第四番	二十五	三三二	二割	六六五
第五番	二十八	二六五	一割九歩	五〇五
第六番	三十二年	二六五	一割九歩	五〇五
第七番	三十六年	二一五	一割八歩	三九〇

五十一

第八番	第九番	第十番	第十一番	第十二番	第十三番	皆伐
四十五年	四十五年	五十五年	五十六年	六十三	七十	八十年
一七六〇	一四六〇	一一二〇	一〇四〇	八九五	七七五	六八〇
一割七歩	一割六歩	一割五歩	一割四歩	一割三歩	一割二歩	一割二歩
三〇〇	二三五	一八五	一四五	一二〇	九五	八〇

備考、本表は一町歩一万本植とし其内三千本は風雪害枯損其他劣悪木として棄伐りをなすものとして間伐の初年に現在七千本存在するものとして計算せしものなり。

間伐には鉈を用ひ初伐より三番若しくは四番間伐の材は洗丸太になすものなれば枝節少く表面の美麗なるものを選定して伐採す五番間伐より十三番間伐に至る迄は一貫目内外の菅網を樹の根部にて回り三倍位の輪に結び樹の中央位の高き迄打揚げ伐倒の方へ其網の端を遠く結び付け置き大斧を以て根株を切り最早倒れんとする時此網を絞の引き倒すへし或は便宜により鉈を用ふる事あり、即ち諸口は斧を以て二分通りを切り追手より鋸にて挽き挽目に矢を嵌め鋸を以て打ち締め引倒すなり。

皆伐は古來長伐期を採用したりしも漸次之れを短縮するの傾向を示せり即ち明治三十年頃迄は普通百年を以て最低伐期としたりしも現在に於ては短縮して八十年を適當となすに至れり、然れ共更に短縮して八十年を降るが如きは又採らざる所なり。蓋し八十年生以下のものは酒樽及樽九材の如き所謂吉野材木の特色たる酒造容器の原料に適せざるが故に寧ろ八十年を下るよりも百年を越へざる範圍に於て伐採するを得策なりと云ふにあり、但し扁柏は杉に比し成長遅緩なるのみならず目通周開七尺以上なると以下なるとに依り造林上に非常に價値を異にするを以て成育の状態によりて伐期を短縮すると云ふ

伐採期節は尾柏は絶對的に秋季を良とし杉は之れに反し春季を可とす、然れ共樽九及樽等に加工製作する物は秋季を可とす。

伐採方法は山の頂上より初め大鋸を以て根株を追手より拖き其の挽目に樫木の矢長さ六寸申三寸のものを嵌め手頃の小口槌を以て之れを打ちしめ請口は九さ二分通り切り込み追手八分は鋸にて挽き漸次矢を打ちしめ山形に倒すものなり、然れ共危険なる場合は索網を用ふ即ち最始細網の端に三十匁位の石を付て樹木の中央の大枝に投げ掛け石の重量にて網の一端下降したるものを繰り取り大綱を結び繋ぎ繰り越して細網を取り捨て大綱の一方の端を二尺位に輪に結び之れに一方の端を入れ此の輪を放ち一方に引き締め其端を樹の倒る方に遠く結び着け置き最早倒れんとする時網を引き締め引倒すなり。

以上は事業實施の現場を觀し観察せり
植林に就ては川上郷西河村青年會か西河村共有地約一町歩の一伐期間の借地料を五百五圓として借入れ杉樹一万本を本年春季植栽せし箇所を始めとして道路附近に於て數ヶ所を觀察せり、其成績は何れも多少の優劣ありと雖も植栽本數、植付及手入の方法等總て同一の

方法に依るを以て各別に之れを記するの要なし、故に現時吉野に於ける一般植林法を簡單に記すれば、植栽時季は毎年三月上旬及び七月中旬の二期とし植付苗木類は平均一町歩に付き七千本とす、植付方法は三角植付に依り植穴は圓形に堀り直徑二尺以上深さ一尺以上とし苗木を植込む、深さは五寸位を適度とし堀土を根元に疊に敷らせ其邊を兩足にて踏み締む、林地風當り強き所は長さ三尺内外の細き削杭を打ち込み苗木を結び付く。

補植には長大にして巖に植付けたる苗木と同一の伸長を爲し樹冠を整齊ならしめ得へき苗木を撰定す若し最始の補植多き時は補植苗木損あるを以て更に再補植を爲す事あり。
手入法としては雜木藤葛葛蔓等の刈除根枝打除伐等を行ひ保護方法としては防火線の設置風雪害の豫防及復舊動物諸害の防禦等を行ふ。

以上掲記せる所を以て吉野林業に關する觀察事項の概要を乘せり而して之等は總て實地に付き相對照見聞せしを以て各生徒に於ては其得る所大なりものと認めらる。

其七 北山臺杉

北山は京都市北方に位する山城國葛野郡小野郷村及中川村等の總稱なり。小野村は京都を去る參里中川村は參里餘を距る所に在り、北山臺杉の栽植は此中川村を以て矯矢とす、北山臺杉の沿革は其濫觴詳ならざれども今を去る貳百貳拾餘年前に中川村住人某杉苗若干と挿植し北山丸太を養成し之れより漸次近隣に傳播するに至りたりと云ふ、苗木の養成法は二法あれども挿木を主とす、挿木法は毎年五月凡う二十年生杉樹の梢三年枝長一尺二寸位に切斷し其先端に三四の小枝を存在し末端を一寸許斜に伐り一日水中に浸し粘土塊を以て切口を包み、畑地に六寸申の畦に三寸置に斜に排列し七八寸位に土を覆ひ、其上に口覆を設け、斯くの如くする中に三ヶ年目の春には長三尺餘の苗木となる。是を山地に移植す。植栽は春季三月下旬に至り一町歩に付き四五百本位の割合を以て植付く、一人一日の行程は平均百本とす、手入法は植付後三ヶ年間は毎年梅雨の後下草を薙除し是を樹木の根元に置き肥料となす其後は四ヶ年乃至五ヶ年月毎に枝打の前年下草を薙除す。

伐採法は植付後四拾年を経過すれば普通伐採其時季は春秋二季とす、即春は四月秋は八月を最も適當の時季とす。伐木器具は鉋或は鋸を用ふ、丸太材は人夫一人一日に付き七八本小丸太材は七八拾本を伐採す。用途は普通丸太と稱する太き丸太は茶室或は書院、柱に用ふるを主とし椽丸太と稱し小なる丸太は軒前の垂木天上、椽等に用ふるを常とす。

其八 滋賀縣下砂防工事

本縣は明治十一年創めて内務省の直轄として砂防工事を施業し同十六年より、縣の事務として之れが實行繼續するに至れり。而して現今に至り其成績比較的良好にして稍々見るに足るへき箇所は甲賀郡岩根村、神崎郡山上村、愛知郡泰川村、野洲郡篠原村、祇王村、蒲生郡鏡山村、栗太郡上田上村、等有と雖も多くは里程遠巨離にして豫定の日程を以て充分なる觀察を遂ぐる能はされ共栗太郡上田上村は石山町より約二里半大津町より約五里の處にして比較的距離難なるを以て當村に於ける砂防工事の現場を觀察せり。個所は大津小林區署第六號收保護區署管に係る字具掛外三ヶ所にして明治三十五年以降毎年平均三十五町歩宛實施せし既工面積二百餘町にして、四十四年までに、收保護區署管の分は終了の豫定と云ふ。本個所に於て施したる砂防

は春秋二季とす、即春は四月秋は八月を最も適當の時季とす。伐木器具は鉋或は鋸を用ふ、丸太材は人夫一人一日に付き七八本小丸太材は七八拾本を伐採す。用途は普通丸太と稱する太き丸太は茶室或は書院、柱に用ふるを主とし椽丸太と稱し小なる丸太は軒前の垂木天上、椽等に用ふるを常とす。

工事の種類は積苗工、薬工、土堰堤工、石堰堤工、等なり。積苗工は、急峻なる堅地の山腹に施設するものにして芝類又は附近に成長する草木の根株を以て山腹を以て、水平に巻く工事なり。芝類を二尺位の高に斜に累積し各帯の間は平均一間位とし其間に「バグンバ」リ「アカマツ」ク「ロマツ」等を植栽せり苗木の根付不良の爲の階段の中員を廣くし、積芝の苗側に小溝を設け積芝と溝の間に藁を埋め、此所に苗木を植付け以て水分の保有と肥料とを兼用せしむ。薬の量は苗木一本に付き平均二十日とす本工事の經費一間に付き平均三十七錢ありと云ふ。薬工は前法と同じく傾斜の堅地に施設するものにして、通常六尺毎に水平の階段を設け巾二尺深さ一尺位の溝を掘り之れに芝を並置し「ハダグンバ」リを三尺五寸置に植付くる方法にして前法に比し簡單なり。石堰堤及土堰堤は普通山腹の小谷に施すへき工事にして、前法に比し僅少の部分に設置しある而已なり。栗太郎に於ける砂防工事の概況は略前掲の如し。元來滋賀縣下の露山は禿嶺荒廢せり。今之れに就て牧保護區員森林主事辻長壽の説る所に依れば、其原因遠く奈良朝時代にあるか如し、當時監視甚たしめり。爲め、一面の花崗岩は年を過るに従ひ次第に崩

壞の度を進め終に今日の如き浸狀を呈するに至り殊に明治三年には、全山の崩壞甚たしく當局者に於ても、其忽にすへからざるを知り、是等被害地域一面に國有林に編入し、砂防工設備の計畫するに至りたりと云ふ。爾來縣下の人民には一面種林の奨励を勉め明治卅五年に於ては滋賀縣林業奨励規則を設けたり。今其概要を擧ぐれば、管内を左の四區に分ち第一林區大津市滋賀郡高島郡第二林區栗太郎野洲郡蒲生郡甲賀郡、第三林區神崎郡愛知郡、大上郡第四林區坂田郡東淺井郡伊香郡各林區に主苗圃一ヶ所を置き林野に殖栽すべき樹苗を培養し左の一に該當するものに限り之れを無償にて交附することせり一禿嶺の林野に殖栽するもの、二無立木の林野に殖栽するもの、三森林法に依り營林の指定又は造林を命せられたる林野に殖栽するもの、四小學校の基本財産又は學林に植栽するもの、而して當苗圃に於て養成する苗木は、杉檜落葉松赤松檜栗樺山樺等にして、杉赤松落葉松は三年生以上杉檜栗樺は四年生以上山樺は一年生以上のものを交付し、交附を受けたるものは、左の標準に依りて山植すべきものとせり。一檜杉落葉松は一町歩に付き三千本乃至六千本一、赤松は一町歩に付き四千五百本一、檜栗樺は一町

歩に付き參千本乃至四千五百本一、山樺は一町歩に付き六千本乃至一万二千本其他都市町村又は山林組合等に於て林業講習會を開設するなど専ら林業を奨励するに至りたり。

八尾山

八尾山天然更新林に就ては日程の都合上充分なる視察を遂ぐる能はず。僅に開知したる伐採法、造林法、樹齡並に産根町に於ける木材の市場價額其他入夫賃苗木代植樹法等を掲ぐれば、左の如し。現今伐採しつゝある扁柏の樹齡は八十年生にして伐採法は木曾地方に於ける伐木法と殆ど異ならず、造伐法は丸太及板材に造材するを主とす。産根町に於ける扁柏丸材一尺の價額は平均五圓五十錢同赤松同貳圓貳拾錢同薪材一捆の代價は一圓五十錢柚木一人一日賃金は平均六十錢植付人夫手入人夫等は平均四十五錢扁柏三年生の出山の苗木は一万本に付き平均四十圓植樹の方法は正三角形八尾山に於ける林道開鑿延長は一里拾八丁なりと云ふ。

賣し以て一般の需用に供する所にして名古屋支廳の所轄に屬せり。當場の公賣に應ずるものは名古屋市大坂市桑名町東京市等の材木商其大部を占む。毎月一回の公賣に際し豫定價額に達せざる時は豫定價額を以て最高札者に特賣する事あり。貯藏の方法は普通陸上に重積するを主とす。扁柏材は夏季日割の害に懼る恐あるを以て藁を以て被覆す此の經費一ヶ年に付平均三百圓を要すと云ふ。

材價。扁柏は一間材は圓材尺締に付き平均四圓九拾錢二間材は同八圓三間材は同十二圓花柏は一間材は同く三圓二間材は同五圓羅漢柏一間材は同三圓二間材は同四圓五十錢三間材は同六圓三十錢金松は一圓材は同六圓五十錢二間材は同九圓二十錢三間材は同十三圓位なりと云ふ。

其九 白鳥貯木場

當場は帝室林野管理局木曾支廳及同名古屋支廳の所轄に係る。木曾産及飛彈産の材木を貯藏し毎月一回宛公





端書便り

○豊橋歩兵第十八聯隊第十八中隊川崎本雄君より

小生は豊橋歩兵第十八聯隊に兵役中の身にて、諸君の爲御通信仕る可き事も御無儀候。當今の事業は焼くが如き美天の砂道を、重き背誼を負ふて半島の如く廻りまはり居る次第にて、至つて無趣味に御座候へ共、又其内には多少の樂を見出し得る事も有候。汗に濡れ、鼠の如くなりあがり疔入る時に若しも此半分の氣力を出して事に従事し候わんには如何なる事も成し得るからんと思ひ候軍隊なれば、出来つれ地方にありては利益なし難き事やも知れず候行軍中等には、幸倒する者も随分之有り候へは、………不………(七月三十日)

○駒ヶ根村小川伐木事業所原原吉衛門君より

當所の所在地は小川沢谷にして位置は睡堂の床の背後に接し、上松より約一里半なる山中に之有り候。事業は伐木と運材とにて萬事に付

九十六
けて不便なる事は云ふ迄もなく實際時勢彼れを致す心地致し候。然し森林家の主眼とする所は山中に有之り候ものと認め居り候。事務所には掛り員小生等六名に候。日々外業のみに候へば學術の研究は出来申さず候へ共、實地の研究は充分出来申し候。小生は此實地の研究を無上の友として日々人夫の監督を致し居り候。先は取敢てす御報告(八月廿二日)

○岐阜縣大野郡清見村大原第五號小原保護區官舎内上田鉦治君より

拜呈瑞雲尚去り難く御座候瑞雲先生には如何御消光遊ばされ候の何ひ上げ候。某所は長々御無音に打ち過き何んとも申譯無之平に御容致の程願上候下つて野生殿令回表記の處へ輒勤致候間御了承下され度。先は御伺ひ勞々御一報迄(八月廿四日)

○新潟縣北蒲原郡加治村出張三原昇治君より

瑞雲の候登。御壯健實奉賀候。陳者來る廿日迄に何々投資の御言葉なりしも目今の所開後事業と秋期造林地作り爲少しの開致も無之次第に候致感しからす御了承相成り度候例開暇の節投資致すべく候。先は御一報迄(八月十九日)

○秋田縣廳内務部農務課藤原周崇君より

拜復御照會之御總旨等に拜讀仕り候。未だ御面談の榮を得ず候も爾の御厚恩茲に御禮申し上候也低願平身

○陸奥南郡碓ヶ岡福澤官行事業内岡田恒次君より

拜禮日は失禮仕候。十七日發十九日當地に着仕り候間乍影響御放心願上候。目下調査の研伐事業に勤奮在候。尙學之折御壯健の程願上候致具

○帝室林野管理局靜岡支廳脇田義正君より

其後は大に御無沙汰仕り候諸先生には御變りも無御座候。御御申上候際小生無異思はん申すへば膝ざ流行罷在り候之も十一月限り履業仕り候て一年間足輕と成りて先榮ある下武士に御取立を蒙る事と相成候に付相不御奉願下され度先は御伺ひ方々余事御知らせ申上候早々(九月十四日)

○在加賀金澤輜重兵第九大隊第一中隊西尾忠治君より通信

御校創立以來年々榮を蒙て各地方に活動するもの、今や數百何れも相應に校名を發聲せられたつとあるは履々耳にする處、實に快哉の至と奉存候。私し本年十一月末には、愈々滿期除隊可仕夫よりは宿志とする林業に身を委れ先輩諸士の御指導を仰ぎ一意専心奮勵致度存候。何れ除隊の時には一度出頭御校の令書を拜讀致度存居候。何分宜布御願申入候先は不取致費謹此如新御座候致具(八月五日)

○石川縣熊美郡役所林業技手宮城忠藏君より

各位御禮候段奉賀候。陳者野生保護職地の件に付會長より御照會の次第も有之候。實は迂生志業以來只常身を實地に捧ぐ可くの處、縣下熊美郡に林業技手の缺員を生じ、爲に其補ふとして去月一日より就職致し候に付先は御返事迄時下御自愛專一に折角御勉學の程を祈る。

○東京府下豊多摩郡戸山新道農務官吏青木太一氏力茂拜

諸君其居は打斷て御無音に過ぎ申し候候。平に御禮申し上げ候先生には相擾らす御壯健に御事務の由奉賀候降て私事御實力の結果東京府に止まり冷季に至り梅々餘暇ある森林試験(名園量試驗)にまわされ日々日本大學法科へ通學致し居り候間御安下され度候赴任以來

◎秋田縣白澤小林區署高橋金作君より通信

開設生諸君とわかれ深き秋は来れり思出多き淋し秋のシーズンに來れり紙の露虫の音樹の一葉に秋はよそまじきものに候よ。
あゝ愛する學友諸君よ今日此頃如何に時を移すか増々しげりまかひ給ふならん余も又夢に事なく其の日其の日を送り候まじ他事ながら御安心せられよ。
したわしき諸君と腰折歌一句で長き別れを告げたのも昨日の如く思わらるゝのが早や指折り數ふれば七ヶ月の前だ。
みじき夢の夢のさめぬまに早や秋さは成りぬ、古語に曰く時は金なりき、余は思ふ時間即ち人間の生命なる事を高麗の根本的資産たる事を青年の有望なるも即ち時間を有するを以てなり。フランクソ曰く汝生涯を愛するからば汝等時間を浪費する事勿れ、汝の生涯とは汝の時間より成るものなれば也、と實に然り力量と學識のみにて事なへしと思ふなれ大體とよばるゝ人にして其の修養時代になすべき時なかりせば毎登八万四千登文論語並書各一巻の肉と共に水く土中に埋没せられらんものな人間萬事時間の活用あり。(拾月二日)

◎青森大林区署盛小林區署部内出

張赤岩藤太郎君よりの便り

諸君等々御教養の段奉大賀候。近來其後を経て音信仕らざり、今回會長足下より御芳函に接し恐縮の至りに存じ候。扱て小生即ち四月當大林区署に赴任するや否や御業繁栄を致命候。然るに當署は同年一月何日寄致致段奉居候去月廿二日より突然病に罹り筆取る事も由ならず候間不意御了知被下度候。(八月十九日)

◎長野縣林務課高樋博君よりの便り

拜復此度は校友會報上に新にはがき便りの欄を設けられ、廣く會員の近境を御教養の御座にて、小生にも投書す可き旨の御命に接し正に了承致し候。就ては小生も本會の事に關して際ながら心配致し居り候折柄、今回の御企劃を承はり一閃の光明を認めしと共に、従來の積習は茲に掃き去り胸もスリキ致し申候。而して御趣に依れば、會長閣下御新任早々諸事御多端にも不効此度は現に御出馬遊ばされし御機子、之れ儘に成はしき現象に有之候。幸にして御趣に依れば、泰山の基礎を固められ大に後年の御發展を期せらるゝ御事と確信致し候。又斯く爲さるべからざる事と被存候。今少しくムキ出しに申せば閣下這度の御企劃を感服すると同時に従來の如き悲境に沈淪せしめざらん事を只管器に堪へず候。

尙小生は昨年九月の頃曾山嶺遊。なる長文の御記載を願置き候に付き、少数者の長文よりも多數者の短文に興深と有之候へば、此回には是れ次行て御寄致を願置尤も来る一日は旅行にて上京の途に着く上候へば若し御命にて頭つ程の價値ある材料を得ば喜んで御書可申下候來葉ながら御前先生始め生徒諸君の健康を祈り上候早。(七月十九日長濱直書にて)

◎東京農科大學林科 小瀧升太郎君の便り

拜啓先先生に益々御機密能く滞在候由、奉大賀候借て去日先生よりの

大井の爲め全島烏有に期せし曉にて之が恢復及び一定期限内に完結致す可く、かすならむ書に迄て三千五百町歩以上増設せられ候は、併々容易に無之候。昨年陸奥下北半島にして丈餘の距離に若められしが本年は陸奥陸中四國內にて候。渡般迄に空了せし五寶山の如きは高山にして、頂上殊に巨岩の露出するもの多く、且つ峰下は僅松ノヤツラガ等密生し、是が闊野には頗る冒險致し候。申す迄に候も此の業より冒險多く候へば頗る強固にあらざれば到底堪へ候。近來昨年不幸にして一月以上欠勤致し候も、當年は頗る健康候以て外業に置在候先は御羨勞。御知知まで年末筆蹟産の健康を祈る候。(八月拾七日)

◎越後中頸城郡杉ノ澤村中侯

伍市君よりの便り

開願すれば去る三月父母兄弟とも頼める諸兄等と別れしより以來世舟をこぎ行くことろ悲しき事なり。さらばとていつ別れさらん此身なれば誰なし、世のしづまりたる世山中にありて、水の音鳥の聲を聞くこと同しく、林學に志せし兄等を思ひ出さざる時やなし、諸兄等よ、此書焼くが如き際一層御勇御大切にせられ在候中において充分なる實地御研究を以て他日社會に出でられん事を祈る。懇考なるべきこと多かりと雖も何分にも業務多端の折柄余は候後にして筆を止む。(八月廿四日)

◎長野縣下高井郡科野村全天堂醫 院松澤萬吉君よりの便り

時下酷暑の候貴會堂。御座度之段、奉賀候後今同種御發行に就て御通信の事項に就ては早々御通知申上答の意思御病氣の爲め不斗手候れ致し實に申辭之無く候。候行幸御寄致被下度候。就ては今般般事上の都合により當大學を辭す手段に候此旨御通知申上候。就員(四十二年八月十六日)

◎島根縣美濃郡林業技手 青戸爲九郎君の便り

奉復々御済業の段奉大賀候。扱今回御願會に預り候、小生目今就業の状況は郡設苗圃及び島根林の事業設計業務に關する諸君編成及び之れが實行上の指導監督職務分掌の遺林事業の監督者野村君諸君の監督村有林道林事業の設計者有林整理に關する事業獎勵補助地調査林業講習及び林業講習等を主として操て林業上に關すると監督街よりの照會に對する調査報告の主任たるは勿論林業に關する内勤事務も一切執務致す事に有之候。小生は昨年拾月中林林官の職を辭し本部に奉職致し目も未だ達き事に候自分今の行ふ事業としては何等見るべきものも無之候得共餘有部部分部有林の如きは地方林業の主眼なるものにして事業の成否如何は直に地方林業消長に關するを以て極力本部林業の發展を企及ん事に兼務致し居り候。先は就業の概事仰に依り報告を以て御回答申上候。早々(八月十七日)

◎長野大林区署經理課販賣係 原田義治君よりの便り

時下酷暑の候校友各位益々御清業の段奉大賀候。野生も暑燥、清光親在候陳は最早母校を出で、五ヶ年間相成り引續き林區署に滞在候。現在在當大林区署經理課販賣係に有之候係りに御承知の如く産物處

分實行を掌り即ち土木處分及官行事業によりて得たる製品の販賣處分
に有之候。就中官行事業は創業にして終に本年度に於て百五十万圓余
の大資本を扱じ一大材料所の創設をなし遂に官行事業を擴張し森
林收入の増収に寄む可き方針にて日下大進中にて有之候。將來は林
區内の畜養も密に集約に向ひ候へば、實習の必要は勿論森林利用學及
林業製造の學術に必要に有之候に懸念仕候。會館設置遊學の如き
は森林利用學と相關連し極めて研究及實際應用等活の事と存し候。
茲に特に在學校友諸氏に望むらくは、實習を各學科に通じて深く且つ
重視せられて學說應用に注意を拂ふ事、各實習は研究修學各科の事項
を貫通及時季に一致せしむること具體的、終りに各自の健康範圍に
於て極力御修養他日各種事業に有爲の素養を作られん事を祈り居り
候、先づは暑中御伺ひ勞々申上度如斯に御座候歎息(七月廿日)

○青森縣西津輕郡鵜ヶ澤小林區署 樋口勇君よりの便り

拜啓初秋の候先生には御健全に御事務を掌られ候哉御伺ひ申上候降而
愚生御御除を以て無事當小林區署に在勤致し居り候間御多忙乍御放心
致下候候先日は御芳名に接し早速御返事申上ぐべきの所つひ本日迄失
禮仕り候之れと定まりたる事務も無之候が、左に小生の只今まで爲
したる事及び當小林區署の小生等の如きもか毎年致すべき事務を
なまし記し候間校友會報に御教せ致す此上なき幸に之れ有候。小生
は内容にて時々外務に従事する事も有之候。内容としては初め最受領
の記入及び各保護區員より差出し居る報告簿、人員簿、證書等の記入
の録り、及び夫人の數金員等の檢査又は主副産物揚げの材料積算
帳等の檢査等にして、官署との關係なる往復文案の發達等其の外人員
の出入り、於てなや、敢て愚ふ血の道に非ずして何そや、余幸早々福
崎縣に遣され候後續候特に今年に至る、其間決して短日月にはあ
らざるべし、從つて越下重要山林地は大略觀察する事を得たり又至幸と
云ふし、茲に於て去る七月下旬より山に入り二千三百五十一町五
反七四歩の中に生活致すことばなれり。諸君諸君は必ず間はん其
の山とは何ぞやと……終りに望み諸君の健康を祈ると共に將來の
御交誼を乞ふ。(八月廿日)

○遠藤宗作君よりの便り

謹啓暑毒甚敷御座候哉。御清榮の段大慶主格に奉答候。さて御醫會
の件小生目下は「東京府林業技術(月貳五)」に有之候實は早速御回答
申上ぐへ客の所望らく御醫會下へ出張致居り候爲め延引仕候間不意
御了承成下度願上候。先は貴答まで申上度如斯御座候歎息。追て先
に小生一年志願兵として恩役致致候處今同僚等にも歩兵少尉に任
せられ候間此後申渡候也(八月二十日)

○島根縣能義郡役所鵜飼義義君 よりの便り

拜啓御來御紙音に打ち過ぎ候處御座候。御清榮の段奉答候。あまり御
無音のまに、小生勤勞状況の一編御申上候。幸に多少の御参考
も相成り候へば望外の幸甚に奉答候。本郷には二町三反餘歩の苗圃有
之れが經營の任に當り登地播種整地等農具より夫人の使役監督等總て
小生職務の範圍内に御座候。樹種は杉、黒柏、樟、櫟を重たるに先
致居り候若苗木の一部は町村へ配布し之れに依りて公有林の整理に充
用せし一部は個人に配布するも郡立農業學校林に充用致し居り候

よりの願書の取扱ひ之れが上申者とは指合書等を作る事など普通初歩
のことはかりにて候。報告書として御承知の通り、年報半年報季報
月報に候が月報等簡單なるものは作り得らるも、餘に至りては他の
事務員と共に作る事も有之候。折々臨時の報告書も有之候。又造林確定
案の編成等の補助もなす外にて候が、造林等は例規又は青年の例に依
り作る故に簡單にて候。外務として候は、造林事業の監督即ち苗圃とし
ては播種より監督草取等にて七八月頃に在りては手入事業として、下
刈等に於て當地方にては秋季の播種につき七八月頃林地の別拂を爲して
機き拂ふか或は谷間等の地に堆積する由にて目今林地の最中にて候。
十月にも至れば種々の地を限定の由、以上の事は中々面白く又人
夫の監督の如きは想像外にて有之候。主産物實務は、當小林區には主
に林地の面積を測り、標準地の材積を求め之れに依りて全面積の材積
を求むるものにて更に標準地にて之れ材積によりて拂下くものにて有
之候。測量としては造林地或は他の小面積の周圍測量をゼンクェン
パス」或は「クリノメーター」等にて測定する位に止りて廻きものは
無之候。目今致し居る事業は初歩にて簡單なるもののみにて候(八月
十八日)

○「福島縣有模範林安達郡高川村 駐在平野正平君よりの便り

回顧すれば余等母校に研學せしより早や四年の昔はありぬ、今や學
館の友は一度去り又新らたに入り來りし諸君のみはなれり、余其人
一人たに知らず、然れども諸君皆目に言はずの猶り違ふも多少の縁
と云ふ事あり況んや同門精神によりて實てられ同じ意氣を持てる母校
而して右學生は年々十五町歩以上造林の計畫にて既成面積五十五
町歩有之候、之れ調査設計の爲め該校の講師の講會も被會候。其他公有
私有林の測量設計より一般林業上の實地指導農會員談話の講話等凡て
如新に有之候詳細は追て御報申上ぐ候早々(八月二十五日)

○北米より校友へ

タコマ市にて 清澤巴來爾

月日は電々の如く走つて學館を去りしより早や三とせ想へば懐し我が
母校教を懐し我が師如何におはすや、如何に變りしや或は如何に
ゆかれしや、知る由の片身たになく、嗚呼り、この追想回想、學館時
代の恩師を懐び友を懐びて物た感慨に堪へざるべし、花は散り月
は歸るは此世の常されど恩師は變りもせず、事に變り物に翻れて想起
喚喚涙に咽ぶ、これ人情の然らしむ所、吾が如く人も然らめ、たそひ
折り、いに靡の相やはなむとも、心の糸は結ばれてこしへに折ら
もせず、いやまし太まるころ歸しけれ、
嗚呼恩師よ、其友よ、またとこ、四時の見舞ふみ、共に交はすの機なくさ
も心は長へに通するを、無音をゆるしてよ、
今しづかに四千里の異郷に孤客となり居る生が友達の消息を書きつら
れて御國に在す師友を懐びせんもの哉、
第二回目に母校より生れ出てし四國に愛媛縣に職を執り居りし木曾御
岳村の出身、正又實二郎さん申す吾等が校友は、今は北米華盛頓州
タコマ市の丘高く眺望絶佳、東南白冠を雲表に映けり富士を觀
てヤマト、ジロセマス、ゴセヒルに勞動し而して旁ら寫真術に英
學に専心努力し、而かも異郷無二の財産たる健康は申分なく其の
上賢財も他人に劣らざるに於て、同君の幸福も又益すべきものと云

ひつへし、
 正文の君と同級生たりし、木曾王福村の産平、澤正吉の君は本年渡米せられ、コマ市に求職の爲め奔走せられし意の如くならざりし故を以て、今や華洲の隅隅モシタノの——と申す所に家内労働をなすつゝあることなり。定めし異郷に於ける感想は同君の心中に溢出して餘りある事と思はる。

同君は其親を抱いて後制の地位を放棄し、遠く大洋を越へ来て見れば、意の如くならず、あらず使ひし身分が人に使はるゝ事ありたるに於て、千々に感傷は湧けしならん然れども夫れは獨り同君のみならず、多くの青年男女連綿るべけれ見もあれ平澤の君今も尙大望は厳然として變らず、歩々を進め居るもの、知れば我等同輩は刮目して見ん而して同君の實れを祈らん。

第三回目の卒業生にして秀才凡が抜き前途に望みを馳せし木曾三留野生、杉原秀吉君は不幸にして昨年十一月廿四日二十才を一週に其處に知己友人擁りて石壁を建てらるゝべければ北米を訪ふの友は必らず杖を担ぎ以て同君を慰せしや甲し傳ふ。

次に眞面目にして温厚篤實を以て聞へる信濃北安曇の産、太田喜代松の君卒業後直ちに北米の人となり水戸間コマ市に在つて病院に労働地學しつゝありし、今はボトマウンセンドと稱する、日本船の最初に北米の土地を見る、而かもヒュセツトサウンド等の開門なる其處に家内労働をなし居ることなり。同家内一聞は非常に同君を寵愛して、美らここと、同君の喜ばはなやならず、實に幸福と云ひつへし、信州南佐久郡小海村の入武川保平の君は母校を中絶して渡米せられ、ヤトルに止まりて、求職しつゝ、シヤルソン街の力行會に止宿してあり。

り同君や涙を立つ時必ず大なる願心と大なる希望とを以て、同君の波瀾を越へ來られしならん、希しはうの願心希望を早晩實現せられん事を吾人は祈るものなり。

母校を出て、北米の客となり希望の船に燃へ居るものは知上の四人と小生とあつて、活動奮闘、將來の成功を夢見居ることなり。

終りに申池へたきは北米に在る校友皆が恐らく音信に不問ならん、而して在邦の友の恨らふを受けん然れども知る人は知るならぬ北米に於て始めて實現し價值を呈するものになん、故に筆を振り故國に音するの時間は與かんとして得べからざるも是非もなや、之を以て筆に在る米校友の無沙汰勝ちを許してよこや、而かも御心に餘ざられまほしきは恩師の洪恩、知己友人の恩愛は萬里の他郷に在るとも永久に不變無朽堅く感銘して報恩の時を待ち居るになん。



◎木曾興業株式會社

澁澤榮一、淺野總一郎、大倉喜八郎、諸氏は係はる同會社は資本金百万圓を以て宮内省より木曾御料林の特賣を得て製材製紙の大事業を開始せんとし、過般資本金の四分の一の拂ひ込みを終りたるを以て去月十五日東京に總會を開き直ちに事業に着手することになりたり。同會社の得んとする特權は曩に西筑摩郡が附與せられたる特權を譲り受くるものにして去日帝室林野管理局に向つて右の稟請を發したる由。

◎福島電氣製材株式會社

肥田平五郎、外敷氏の經營に係はる同會社は資本金一百万圓を以て明治四十一年三月組織を終はり爾來其設備

中なりしも漸く竣工して本月五日開業目下試運轉中にあり。

右は二十馬力の電力を以て一臺の鑿鑄と二臺の九鑄とを据ゑ付けたるものにして至極良結果を來さん見込みなりと、而して其主目的は賃挽きにして他に御料林の拂ひ下げを受けて仕事を營む方針なりと。

◎本校の新築

本校は四個年の繼續事業を以て新築する事に決し來年度より工事に着手、建築費の總額六万六千七百六十三圓三十五錢内四十二年度一万五千九百五十三圓餘四十三年度一万七千八百八十四圓四十四年度一万六千三百七十五圓四十五年度一万七千二百五十四圓餘の支出なりと、其建築の見込は四十二年度には敷地を買入れ地均を爲し四十三年度には教務室雨中体操場を建て四十四年度には寄宿舎食堂浴室等を造つて略は完成するなりと、而して新築敷地は當町の東北端に位する黒川に沿ふ田圃の中に略は決定し其坪數約七千坪なりと。

◎第四回卒業業證書授與式

明治四十年三月二十三日午前九時より證書授與式を舉

四壁に絳業を挿し國旗を交叉し電燈を輝して晝夜の觀
 あらしむ職員生徒一同着席の後生徒代表立つて開會の
 辭を述べ續いて顯はれたるは數氏の祝辭演説なりわれ
 より種々の餘興演技は絳綵として顯はれたり。今其重
 なる部類を挙げれば劍舞及詩吟部新体時部ダンス部琵琶
 部唱歌部五分演説部に分れ會員は何れも數十組に分れ
 て各其奥の手を現はす劍舞詩吟の勇壯活潑ダンスの容
 艶琵琶歌の幽妙五分演説の頓智など悉く其特色を發揮
 して遺憾此上なからしめ各番毎に喝采の音響は雷鳴の
 如くに起り會場爲に碎けんことあり取分其粹を
 抜きたるは劍舞詩吟ダンス琵琶歌にして斯場棟梁の感
 あり本會の來賓には松田舊校長刈間郡視學鈴木縣技手
 三名午後十時を告ぐるや學校の万歳を三唱して閉會を
 告げたり。

◎ 校友會彙報

△ 本會役員組織の變更

本會々則第三章事業の部、第四條に於ける研究部雜誌
 部を合せて研究雜誌部となし、會計部庶務部を合せて

散會したり。

○ 通常例會明治四十一年六月十六日 火曜日
 本日午後一時より本校講堂に於て開會す。本會は主として本年度の役員改選並に前項に掲げし役員組織變更の議事あり。

役員改選の結果は左の如し但し各部顧問は次回迄に會長の推擧する事。

- | | |
|--------|---------|
| 研究雜誌部長 | 中嶋 要 人 |
| 副部長 | 松澤 莊 太郎 |
| 擊劍部長 | 仲田 惠 令 |
| 副部長 | 新田 忠 二郎 |
| 庭球部長 | 松尾 忠 恕 |
| 副部長 | 宮川 永 三 |
| 弓術部長 | 本田 清右衛門 |
| 副部長 | 一木 虎 雄 |
| 探險遠足部長 | 宮入 汎 省 |
| 副部長 | 嶋田 雄 太郎 |

終つて會長の校友會に對する希望演説あり。
 五時閉會を告げたり。
 ○ 通常例會明治四十一年七月三日
 本日午後一時より、當校雨天体操場に開會す。偶々來

庶務會計部とあす、第十三條に規定せる理事の六名は
 六名の部長是に任すること、機關雜誌として年二回發
 刊し來りたるものは、年一回とする事。

以上の要旨各都合併並に部長理事兼任の目的は從來の
 經驗に徴し其部類によつては、甚だ近似し或は理事は
 部長に於ける其職務權限明瞭ならず、事業之發達上多
 少の阻害あるを認め、爲に之を除去してより以上の發
 展に資せんことをしに外ならず。雜誌を年一回に縮めし
 は去る四十年に變更せしものにして、之又其九を省き
 て、可及的完全なるものを刊行せんとせしに外ならず。

△ 校友會臨時並に例會

○ 臨時會四十一年三月二十二日

本會は、第五回卒業生諸君送別の目的を以て。開會し
 たるに外ならず。會場には本日の式場を利用し職員卒
 業生在校生一同着席の後、在校生惣代の開會の主意、
 並に卒業生に對するの希望を述べ、次で卒業生惣代脇
 田正義君の謝辭、續いて米山教頭の英語朗讀に依る一
 場の祝辭、新舊兩生の替る替る演説、一同より起る數番
 の餘興續出して、殆ど其際限なかりしも陽春比おかり
 し當日の暖さも、何時か黃昏と同時に寒さを覺わしむ
 るの刻、卒業生の萬歳、合せて我校の万歳を三唱して

福中の飯田聯隊區副官佐藤大尉を聘して一場の演説を
 乞ひたり。其要は南山占領の實戰談、軍機之秘密、我
 校卒業生に對する一年志願兵の勸誘等にして約二時間
 に亘る有益談なりき。

- | | |
|-------------|---------|
| 研究雜誌部の今後の方針 | 中島 要 人 |
| 探險遠足部の必要 | 宮入 汎 省 |
| 雜 感 | 松澤 莊 太郎 |
| 擊劍の獎勵 | 仲田 惠 令 |

次いで江畑校長登壇せられ校友會、事業各部の委員並
 に顧問の照會あり。閉會を告げたるは四時なりき。
 顧問左記の如し

- | | |
|---------|---------|
| 研究雜誌部顧問 | 米山 教 頭 |
| 擊劍部顧問 | 江崎 教 諭 |
| 庭球部顧問 | 有川 教 諭 |
| 弓術部顧問 | 征矢野助 教諭 |
| 探險遠足部顧問 | 林 教 諭 |
| 庶務會計部顧問 | 森田 書 記 |

○ 通常例會明治四十一年九月五日 土曜日
 午後三時本校講堂に開催江畑校長開會の辭並に一場の
 演説あり。續いて左記の辯士續出せり。

學生とは如何

暑中休日中の感

探險遊足に付て

勳勉

漫遊登山談

暑中休日中支應酒量屋を

務めし實驗談

紀念

砂防工に就て

學問の應用

吾々の本務

尙演説希望のものはたまなかりしも時は已に五時を

報し、應行寺の暮鐘夏の涼しき城山の夕風を送り越さ

る時刻となり。已むなく會長は徐ろに立つて閉會を告

げたり。

○通常例會明治四拾一年拾壹月七日 土曜日

出席會員八十七人

本日の例會は午後二時半より本校講堂に開會し同五時

を以て閉會す。本會は本校囑託教授赤浦林學士に約一

時間半に渡る演説を乞ふ今其の要を擧ぐれば先づ題を

本會の運材に就て諸君の視察すべき要項、本會の運

材は其方法の巧みか果た其の規模の大なる爲めか世間

には評判噴々たるもので一ツの名物と成り居ること

二、御料林に關する沿革畧史三、現今の伐木材積小川

阿寺は三万尺、瀧湯舟澤各二万五千尺計十一万尺、

あれども今後六十年を経過せば今日の三倍即ち三十万

以上の材積を産出する事となる四、出落小谷狩、の現

況五、經費は中一木に就て伐木拾錢山落し四拾錢小

川に於ける二里の小谷狩費五拾錢大川狩四拾錢各古屋

支應のみの運材費が五拾錢計壹圓九拾錢を要す而して

立木のまゝにては貳圓五拾錢市場に於て五圓乃至六圓

とす然る時は差引約壹圓の利益を見る六、他の工業製

造業等に比して多數の工夫を要する爲に今後は工夫に

不足を來し從て賃銀は騰貴し終始償はざるへし將來は

此の方法を改革せざる可らざると目今同所には森林鐵

道を設けつゝ有る事小事業ならば今日の運材法を以て

するも大事業には必ず文明の裝置をせざる可らざる

事。

右學士の演説に前後して二名の會員演説有り。

雜 威 會 員 中 島 要 人

人 生 會 員 服 部 啓 次 郎

◎會長の交迭

○送松田舊會長、我々が巖山の下に呱呱の聲を揚げし

以來終始一日の如く常に青藜の杖を植えられ同時に

本會々長に當たらせられ而も多大の貢獻を惜まれず

本會の今日あるを致せる所以のもの正に先生の賜に

あらざるとなし、然るに惜い哉先生にわ昨四十年七

月廿四日を以て宮内省に御榮轉被遊茲に於て本校は

七月廿四日午前九時より告別式を舉行し午後は本會

聊か送別の意を表せんが爲めに送別茶菓會を開催

す、米山副會長の送辭並に謝辭其他諸氏の送辭あり

て閉會す。

○迎江畑新會長 前に宮城大林區署技師たりし江畑校

長には去る四十年九月十三日附の辭令を以て本校々

長に御轉任被下本會並に舊會長に告別し今は茲に新

會長を戴くことゝなる轉た今昔の感に堪へざるもの

あり、乃ち五月卅日は米山敬頭の御案内にて着校せ

られ同時に新任式あり終つて本會歡迎茶菓會を開催

せり、因みに記す以來先生には大に本校の刷新を期

せられ同時に本會の發展に非常なる御盡力あらせら

れつゝあり。

◎會員動靜

○名譽會員松田力熊先生 先生には帝室林野管理局技

師に榮轉せられ其後間も無く本會支應隊副飯田教原

警川福島の出張所監督官に從事せられ、以來至極御

壯勵の過き時々我々に御臨席あり本校の爲め又本會

の爲め御盡力を辱ふすること多大かり

○特別會員福澤桃十先生 先生には多年本校助教兼兼

合監とし指導薫陶の任に當らせられ而も其御老齡な

るにも關はらず益御壯健にて本會に對する御盡力少

なからざりし昨四十年四月依願御退職と相成り

後上伊那郡伊那町なる郷里の小學校に御奉職あら

れしも本年四月よりは更に御退職被遊郷里に御靜

養中の御事

○同上 百瀬重四郎先生には多年本校教諭兼合監とし

て熱心に子弟薫陶の任に當らせられ兼て又本會の願

問として貢獻せられし所些少なかりしも昨四十年

四月は南佐久郡立乙種農學校長に御轉任被遊更らに

又本年四月は韓國政府の招聘に應じ京畿道なる驪州

普通養教頭に御赴任あらせらる以來愈御壯健にて頗

る熱心に教鞭を振はれつゝあり、

憶ふに先生の教育的偉大なる人格を以て韓國民教育の大事業に従事せらるゝこと正しく近き將來に一大光明を發揮せらるゝこと疑ひなげん豈邦國の爲り視せざるを得んや。因みに記す韓國普通費は四拾校現存し統韓府とは何等の關係なし恰も我國の普通教育の程度に等し校長と稱するものを置かざ各郡可是れが監督の任に當る

○同上小松吉次郎先生 先生には前に足尾銅山鑛業所林業主任たりしが昨四十年五月四日を以て本校教諭に御赴任被下以來測量幾何保護等の學科を担当せられ兼て本會顧問として多分の御盡力被下つゝあり

○同上高木本校先生 會て下伊那郡山吹小學校長たりし先生には昨四十年五月一日本校助教諭兼會監として御赴任被下以來國語漢文を担当され兼て本會顧問として御盡力被下こと多大なるものあり

○名譽會員加賀美判事 本校教授囑托として第三學年法制經濟の二科を担当せられし先生にわ先年七月上伊那郡伊那町區裁判所判事に轉任せられ同時に本校囑托を辭せられたり

○特別會員有川仙之助先生 先生は小縣郡東鹽田小學校長たりしが先年十一月本校教諭として御轉任被下

就かれ以來經過宜しからず爲めに去る拾一月四日を以て御家族同伴にて御歸郷被遊専ら御療養中なりしも遂に同月二十一日を以て御退職の御事となる先生の本校にある七ヶ年の久しき間、銳意經營本校の改善を圖り常に温容以て生徒に接し寛嚴懇恰も慈母の赤子に於けるが如かりき。本校今や數回の卒業生を出し而も升が幾多の林業界に活動しつゝあるものと云ひ果た又僕等魯鈍の身を以て本日あるに至れるものと云ひ纏に先生の賜にあらざるはなし。延いて又本校々友會には副會長の任を負はれ而も多大の盡力を敢てせられし事、こゝに饒筆するを要せず圖らざりき今や離別の悲境に至らんとは、たゞ蕭然として消魂の情に堪へず。

○卒業生方向調

- ▲東京府西多摩郡水川村林業事務所技手 遠藤 宗作
- ▲鳥根縣藏川郡役所林業技手 齋藤 正雄
- ▲長野縣内務郡林務課長野野縣技手 高 樋 博
- ▲長野大林区署松本小林区署森林主事 宮下 作治
- ▲富山縣内務郡富山縣技手 小瀧升太郎

以來農學化學算術等の學科を担当せられ本會顧問として多大の勞を盡されつゝあり

○同上 浮田吉太郎先生 多年本校教諭として熱心なる教鞭を執られし先生には現今更級郡役所農事巡回教師を奉職し兼て同郡乙種實業學校教授を囑托されつゝあり

○同上 黒河内祐紀先生 本校教諭として主として測量科を担当せられし先生には、本年一月一年志願兵除隊とかり豫備少尉に昇進被遊、現今は青森大林区署に御在勤中なり

○同上 江崎熊太郎先生 先生には昨四十年四月十七日を以て帝室林野管理局木曾支廳技師より本校教諭に御轉任被下以來測樹造林利用等の諸學科を擔當せられ而も熱誠なる御教鞭を揮はれつゝありしも突然四十一年十二月十三日を以て岐阜縣技師に御榮轉被遊る去月十六日を以て當地を御出發拾七日無事御着の御通信ありたり。

米山教頭の退職

本校教頭たりし米山先生には不幸にも本年八月病床に

- ▲東京市牛込區若松町七二加納方 輪湖 正由
- ▲松本小林区署内山林技手 中村 豊次
- ▲長野大林区署經理課山林技手 原田 義治
- ▲西筑摩郡田立村 林 哲治
- ▲鹿兒島大林区署川内小林区署山林技手 坪倉藤三郎
- ▲長野大林区署岩村田小林区署森林主事 森 正治
- ▲西筑摩郡福島町自宅 杉本 昌平
- ▲鹿兒島縣熊毛郡立農林學校助教諭兼會監 原 咬也
- ▲嶋根縣美濃郡郡役所林業技手 青戸爲九郎
- ▲北海道廳林務課技手 原 四郎
- ▲帝室林野管理局木曾支廳小川代木事務所 技手 大森 久治
- ▲石川縣石川郡役所林業技手 福田友次郎
- ▲岐阜縣惠那郡郡役所林業技手 福井利吉
- ▲北海道廳林務課石狩國空知郡沼貝村 峰邊地方森林事務所 林業技手 伊 藤 兵 太
- ▲鹿兒島大林区署鹿兒島小林区署技手 古根 是
- ▲習志野歩兵第六十聯隊第九中隊第二班 兒野 榮
- ▲鹿兒島大林区署森林主事 征矢野克巳
- ▲尙修學ノ爲メ上京 小松 精内

- ▲西筑摩郡福嶋町自宅
 - ▲北海道廳林務課技手
 - ▲兵庫縣美方郡役所林業技手
 - ▲韓國統監府營林廠惠嶺支廠新開溝作業班
 - ▲東筑摩郡片丘村自宅
 - ▲嶋根縣濱田步兵第二十一聯隊第六中隊
 - ▲朽木縣上郡賀部足尾鑛業所根利出張所
 - ▲西筑摩郡大桑村阿寺伐木事務所技手
 - ▲島根縣能義郡役所林業技手
 - ▲福嶋縣廳
 - ▲M.Hirasawa, Iarnel, Mont
P.O.Box 46, U.S.A.
 - ▲長野大林區署經理課山林技手
 - ▲豐橋步兵第拾八聯隊第十中隊
 - ▲長野大林區署大町小林區署森林主事
 - ▲朽木縣上郡賀部足尾鑛業事務所
 - ▲石川縣羽咋郡役所
 - ▲三重縣廳
 - ▲金澤輻重兵第九大隊第二中隊
 - ▲伊豫國別子住友鑛業所
 - ▲北海道廳林務課技手
- 原庄次郎
 - 岡戸廣治
 - 杉本 貢
 - 林與五郎
 - 大熊俊彦
 - 遠藤治一郎
 - 川岸滋次郎
 - 仁科 春
 - 鶴飼政義
 - 平野 正平
 - 平澤 政吉
 - 坂本忠二
 - 木村鐵次郎
 - 原 傳
 - 下條初太郎
 - 温井 誠一
 - 武久 貞一
 - 西尾 忠次
 - 乙谷 耕吉
 - 南 勇次郎
- ▲韓國咸鏡南道惠山鎮木材廠
 - ▲帝室林野管理局名古屋支廳白馬貯木所
 - ▲習志野騎兵第十九聯隊第一中隊第一班
 - ▲山梨縣廳第三部雇
 - ▲秋田大林區署内
 - ▲伊豫國別子住友鑛業所
 - ▲高知大林區署西條小林區署
 - ▲西筑摩郡三岳村自宅
 - ▲高知大林區署大枋小林區署
 - ▲Franki, Shamoto, Tacoma, Wash
P.O. Box 1527, Tacoma, Ave. U.S.A.
 - ▲第七高等學校内
 - ▲長野大林區安曇小林區署
 - ▲自宅
 - ▲鹿兒島大林區署大根古小林區署
 - ▲青森大林區署藏館小林區署
 - ▲Macos, M. Kiyosawa, Wash.
4-1527 Tacoma, Ave. U.S.A.
 - ▲足尾鑛山鑛業事務所根利出張所
 - ▲韓國咸鏡南道惠山鎮營林廠支廠
- 柳澤邦信
 - 松井定道
 - 下知徳十
 - 林 卓治
 - 岡田直一
 - 木下 清
 - 中島源一郎
 - 奥收金次郎
 - 倉澤 眞
 - 南村末吉
 - 正又實次郎
 - 中澤 龜吉
 - 藤原周紫
 - 加藤純一
 - 岩久常治
 - 岡田恒治
 - 清澤己未術
 - 山下藤一
 - 鶴殿 正雄

- ▲青森大林區署盛岡小林區署
 - ▲青森大林區署川内小林區署技手
 - ▲熊本大林區署
 - ▲金澤輻重兵第九大隊第二中隊一年志願兵
 - ▲帝室林野管理局木曾支廳蘆原出張所雇
 - ▲自宅
 - ▲帝室林野管理局札幌支廳
 - ▲長野縣下伊那郡上郷村自宅
 - ▲長野縣西筑摩郡吾妻村自宅
 - ▲青森大林區署藏館小林區署第四號官舎
 - ▲朽木縣足尾鑛山古河鑛業所
 - ▲欽南惠山鎮
 - ▲帝室林野管理局木曾支廳雇
 - ▲青森大林區署今別小林區署
 - ▲青森大林區署青森小林區署山林技手
 - ▲長野大林區署村松小林區署森林主事
 - ▲青森大林區署今別小林區署
 - ▲長野縣西筑摩郡福島町自宅
 - ▲尚修學ノ爲メ上京
- 柳澤熊治
 - 小林桂一郎
 - 山下常記
 - 寺尾敬二
 - 千村重喜
 - 池井深一
 - 但馬廣造
 - 宮崎清太郎
 - 北原利雄
 - 代田善次郎
 - 戸田 續
 - 古畑金藏
 - 杉本 純平
 - 前野 慶一
 - 宮田 實
 - 小藤作四郎
 - 野知里慶助
 - 寺島 正治
 - 三宅周吉
 - 宮下信一
- ▲帝室林野管理局木曾支廳阿寺伐木事務所
 - ▲青森大林區署盛岡小林區署
 - ▲帝室林野管理局木曾支廳雇
 - ▲帝室林野管理局木曾支廳蘆原出張所
 - ▲帝室林野管理局木曾支廳阿寺伐木事務所
 - ▲長野大林區署經理課
 - ▲S. Nagata
c/o Mr. J. Inoué, Hirohiti
P.O. Box 4 28 U.S.A.
 - ▲青森大林區署藏館小林區署
 - ▲長野縣上水内郡島居村自宅
 - ▲青森大林區署
 - ▲Geogek, Ota, Port, Lawrence,
P.O. Box 375, Wash, U.S.A.
 - ▲長野大林區署長野小林區署森林主事
 - ▲長野大林區署六日町小林區署森林主事
 - ▲長野大林區署飯山小林區署森林主事
 - ▲韓國咸鏡南道佐郡大澤村自宅
- 岡田彌兵衛
 - 木下安太郎
 - 西之入徳
 - 川崎本雄
 - 宮崎 二郎
 - 澤田貞二郎
 - 永田精一郎
 - 瀬廣静之進
 - 赤岩藤太郎
 - 矢島駒二
 - 山尾 忠助
 - 太田喜代松
 - 和田 宗吉
 - 肥後金四郎
 - 宮崎源一郎
 - 大島角藏
 - 市川 潔

- ▲長野縣西筑摩郡福島町自宅
- ▲長野大林区署五十公野小林區署森林主事 三原 昇
- ▲伊豫國新居郡大保木村住友山林課 小澤 順
- ▲長野大林区署上田小林區署森林主事 新井喜多雄
- ▲長野大林区署長野小林區署森林主事 上條嘉一郎
- ▲青森大林区署別小林區署森林主事 竹内房太郎
- ▲高知大林区署田野野小林區署森林主事 木村晋次郎
- ▲高知大林区署宇和島小林區署森林主事 松島九平
- ▲長野大林区署村上小林區署森林主事 中島昌利
- ▲青森大林区署川内小林區署 肥田幸一郎
- ▲長野縣西筑摩郡福島町自宅 小林 泰一
- ▲青森大林区署 武居 文作
- ▲長野大林区署白田小林區署森林主事 平田 稻男
- ▲長野大林区署長野小林區署森林主事 瀨 在 實
- ▲長野縣立甲種木曾山林學校林業助手 久保田壽一郎
- ▲東京大林区署森林主事 櫻井 忠
- ▲長野大林区署經理課 雇 仲 俣 伍 市
- ▲東京大林区署第一部長務課 雇 水 橋 要 作
- ▲東京大林区署大田原小林區署森林主事 横山 治 人
- ▲熊本大林区署經理課 雇 小 林 彪
- ▲青森大林区署遠野小林區署森林主事 藤 卷 壽 一
- ▲帝室林野管理局木曾支廳關伐木事務所 北 川 信 美
- ▲靜岡縣靜岡市東草深町二丁目十二番地 龜山弘二郎機方
- ▲石川縣羽咋郡志雄村林業巡回教師 鷗田 義 正
- ▲大坂大林区署森林主事 宮 崎 忠 造
- ▲東京大林区署利用係森林主事 土 田 錦 二
- ▲大坂大林区署森林主事 林 省 三
- ▲青森大林区署鯉ヶ澤小林區署 雇 樋 口 勇
- ▲帝室林野管理局木曾支廳阿寺伐木事務所 小池 新 吾
- ▲長野大林区署岩村田小林區署森林主事 北澤時三郎
- ▲青森大林区署住沼地小林區署 雇 千 村 善 三
- ▲秋田大林区署白澤小林區署 高橋 金 作
- ▲豐橋步兵第六十聯隊 奥原吉右衛門
- ▲東京府西多摩郡永川村林業事務所技手小山田善十郎 雇 竹 内 茂
- ▲東京大林区署利用係 雇 松 澤 萬 吉
- ▲長野縣下水内郡秋津村自宅 寺 嶋 俊 一
- ▲大坂大林区署技手 雇 池 田 藤 三 郎
- ▲足尾銅山古川鑛業所利根出張所 雇 池 田 藤 三 郎

◎新入會員諸君姓名左の如し

- 一、明治四十年度の入會員
- 長野縣 原 耕民君 長野縣 日野 雅亮君
- 同上 上 原 上君 同上 松本 清太君
- 同上 長谷部 兵治君 同上 原田 久保作君
- 同上 中澤 揚君 同上 宮澤 嘉一君
- 同上 甲田 林君 同上 小石 彌三郎君
- 同上 村井 正三郎君 同上 北村 竹二郎君
- 同上 米山 修君 同上 市岡 淳一郎君
- 同上 高柴 真二郎君 同上 小林 佐久馬君
- 同上 遠山 一郎君 同上 澤木 儀一君
- 同上 和守 衛君 同上 小池 金三郎君
- 同上 金田 美行君 山形縣 伊藤 憲一君
- 山梨縣 向井 政勝君 熊本縣 木村 康明君
- 一、明治四十一年度の入會員
- 長野縣 原 元君 長野縣 市川 左金吾君
- 同上 中澤 淳四郎君 同上 林 恒君
- 同上 宮崎 新太郎君 同上 徳武 國久君
- 同上 岡西 謙三君 同上 伊藤 昇二君
- 同上 倉澤 建雄君 同上 柳澤 章次君
- 同上 原 芳太郎君 同上 水野 忠四郎君
- 梨原 貞次君 同 柏澤 國治君
- 山本 政之助君 同 小林 秀一君
- 曲田 秀二君 同 征矢 朴郎君
- 鹽川 金治君 同 三澤 義忠君
- 小池 金三郎君 同 丸山 榮太郎君
- 小林 準一君 同 藤田 要吾君
- 塚本 三樹君 同 小林 哲三君
- 井上 秀夫君 同 樋口 久治郎君
- 山下 賢治君 同 瀧澤 正雄君
- 征矢野 和夫君 同 丸山 金三郎君
- 篠原 昇士君 同 今井 實太郎君
- 加藤 正治君 同 吉村 金次郎君
- 宮崎 光治君 同 西尾 長一君
- 安藤 次郎君 同 大洞 盛一君
- 長谷川 義雄君 同 安藤 定治君
- 新潟縣 服部 啓次郎君 高知縣 徳弘 正夫君
- 群馬縣 神戶 林三君 岐阜縣 織 綱 錦太郎君
- 岐阜縣 嶋田 勘四郎君 兵庫縣 多田 慶次郎君

◎會員の遠逝

▲特別會員手塚長十先生。本校創立以來五年間の長き。

間終始一日の如くに敬鞭をどられたる同先生には突然韓國惠山鎮木村殿に榮轉せられし事前號紙上の通りなりしも其後更に鴨綠江森林業に従事せられつゝありし所患哉客年十一月廿三日を以て不歸の客となりたる憶ふに我校出身者之志を韓國に飽みしもの先生の指導によつて多大の便益を受けつゝありしこと言を俟たざるべし。嗚呼雄偉なりし先生の希望は空しく鴨綠江畔一朝の露と消え失せたり豈邦國の爲め果た本會の爲め惜まざるを得んや茲に於て同僚及生徒よりなる據金を以て縣下南安巖郡高家村なる先生の墓地に一基の紀念碑を設立し以て芳名を千古に傳んとせり而して其餘金を以てナルソン百科全書一部を本校に在職紀念として寄贈せられたり。右の碑は目下建造中にして近く除幕式を舉げらるゝ運びとなる又來る十一月二十三日は一週年法會を執行せらるゝ都合なり

碑文、
柯亭手塚長十君明治三十四年四月就職于木曾山林學校也偶當校開設之時百事草創校務極多踴君鞠躬奮勉能盡其任在職五年間終始如一日懇々切々能導諸受教

碑文を左に記す

突然急性腦膜炎の併發する所となり、果敢なくも、黄泉の客と化さる。同君の葬儀に當り、本會より吊詞を贈る。

▲會員加藤十七三君、君は本校卒業後秋田大林區署に赴任し、四十一年四月同署より第一師團輜重兵第一大隊へ入營同年五月七日發病六月十九日免役除隊の上歸郷療養中途に八月十五日を一期として白玉樓中の人と爲る本會より米山副會長並に、安井書記會葬す。

▲會員山田五郎九君、君は明治三十九年本校に入學し以來、前途有望なる苦學生なりしが、同年七月廿九日第一期試験中、單獨にして我校裏山實習林の麓を流るゝ深淵の中に水泳中、急性腦溢血の發する處となり。遂に川中に於て空しく黄泉の客となられたり君の無き骸は、當福島町長福寺の聖墓地に、埋葬す本校の職員生徒、一同會葬し、嚴肅なる葬儀を営みたり。

▲會員福壽五郎君、明治三十九年四月本校に入學し同年九月より、發病し爲に歸省療養中なりしが、明治四十年三月十日を以て空しく現世を後にして華胥の國にと遊はれたり。本會よりは吊詞を贈りたり。

者實達二百三十餘人之多皆蒸德仰風焉三十八年十一月轉任于韓國惠山鎮木村殿爾後專從事于鴨綠江畔森林業不幸獲病四拾年十一月二十三日遂逝焉嗚呼哀哉天何畜若人之速也嗚呼其容諒如其言猶存目前也今茲吾僑友及受君教者百有餘人胥謀建一碑於君墓畔以表追慕之意云

明治四十一年八月

代表者帝室林野管理局技師正六位松田力熊代
表者木曾山林學校教諭正八位米山太郎吉代表
者木曾山林學校教諭林重郎

▲會員松原秀吉君、君は明治三十九年本校を卒業し御料局木曾支廳に奉職しつゝありしが、同君の宿望は米の天地にあり。偶々明治四十年晚春決然故國を去つて、米國華洲、シヤトルに上陸タコマニヤ市に勉學中不時の病魔の襲ふところとなり、三旬餘日に於て弱冠を一期に同年十一月二十四日空しく黄泉の客と化し亡骸をタコマニヤ、聖墓地に遺せり。其より郷里西筑摩郡讀書村の實家に於て葬儀を營まる、本會よりは、副會長米山太郎吉君會葬あり。

▲會員與牧金藏君、君は本校卒業後在宅専ら實業に従事なりしも。脚氣病に罹り、松本市に治療中の處

◎ 紀念運動會

紅葉の盛り稍過ぎんとして秋風頻りに紅黄の片々を天空に弄ひ或は木曾の溪流に運び去つては錦の模様を裝はしむるの時是れ暢月廿八日我校紀念大運動會は本校運動場に開かれたり。校門前には高さ數間に渉る大アーチにして山林なる文字を型取り之れに五木の種子を以て大書せる巨額を掲ぐそれより同門前老松の頂高く鶴の巢籠する様を裝ふ正面なる玄關の屋上高く、
其の大額を掲ぐ同口には紅白の幕を張り詰む其他賣店餘興部の裝飾何れも紅葉彩葉を以て其丹誠を單めたる有様は各處に現はれぬ場の周囲の處々にうよぎを樹て飾れるあり更に天空に懸る幾千の國旗は左右の錦繡と掩映して一入の見栄もあり、扱て運動會は前日が其當日なりしも雨天順延して本日とはなるものなり、此日は朝來霧深くして午前九時號砲を合圖にも追々模様を恢復し來りたれば午前九時號砲を合圖に職員生徒一同整列校長の開會の辭次で豫定五十有餘番の競技は見事に進行して午後四時卅五分總ての競技は遺憾なく盡され校長は閉會を告げ一同散會す。
知說本日は次第次第に晴れ來つて寒暖恰も我校健兒の活動に跳ひたるが如し、本日の月桂冠は二學年生伊藤

憲一君の八百ヤードに勝を得て本校々友會優勝旗並に時事新聞寄贈の金牌受領三學年生松尾忠怒君の六百ヤードに勝ちを得て大阪毎日の銀牌を手にしたものなり餘興は劍舞、東西古今の行列、喜劇の三種なりしも何れも目覺しき花を映かす運動時事を報すべく怪報社あり大小浅らさず數百員を發刊したり。本日の賓客には部長、判事、支應員、稅務署長、豫防事務所長を主として其他の各位父兄保證人同家族約三百名悉く晝餐を供す、場外を閉む參觀人の多數なる又數千を以て算したり。

- 一、二百ヤード徒歩競争
 - 一等 村井庄三郎 二等 中澤淳四郎 三等 岡戸信二
 - 二、棒術競争
 - 一等 山下賢次 長谷部兵次
 - 二、土屋清三 二等 樋口久次郎 三等 新田忠次郎 上原上
 - 三、鐵籠スプーン
 - 一等 中田長雄 二等 塚本三樹 三等 宮川永三
 - 四、二人三脚
 - 一等 原田兵二 二等 宮澤嘉一 三等 甲田林清澤三 小林
 - 佐久馬 向井政勝
 - 五、竹馬競争
 - 一等 和田守清 二等 市川淳一郎 三等 徳武國久
 - 六、背負負球

- 七、松澤莊太郎 二等 埴川金次 三等 田中玲重
- 七、徒歩三百ヤード競争
 - 一等 原耕 民 二等 伊澤唐三 三等 徳須賀宮次郎
 - 八、刺陣
 - 一等 原 龍助 二等 長谷部兵治 三等 原喜四三 本多
 - 清右衛門 金田美行 粟之原治平 遠山一 郎 多田慶
 - 次郎 澤木儀一
 - 九、旗裝点燈
 - 一等 徳須賀宮次郎 二等 伊藤憲一 三等 宮澤嘉一
 - 拾、徒歩百ヤード競争
 - 一等 岡戸信二 二等 倉科浦一郎 三等 若林遊龜尾
 - 十一、觀音競争
 - 一等 松尾忠怒 二等 原喜四三 三等 土屋清三 原
 - 龍助 粟之原治平 上原上
 - 十二、蛙飛競争
 - 一等 梨原貞次 二等 米山修 三等 山下賢治 三澤
 - 義忠 澤木儀一 樋口久次郎
 - 十三、サツクレース
 - 一等 小林佐久馬 二等 土屋清三 三等 甲田林
 - 十四、數學競争
 - 一等 中田長雄 二等 原七郎
 - 十五、四百ヤード徒歩競争
 - 一等 松尾忠怒 二等 村井庄三郎 三等 新田忠次郎
 - 十六、異動百出
 - 一等 宮澤嘉一 二等 上原上 三等 馬七郎

- 十七、棒拾競争
 - 一等 若林遊龜尾 二等 米山修 三等 原喜四三
 - 十八、餘興
 - 十九、鐵籠スプーン
 - 一等 伊藤憲一 二等 小林佐久馬 三等 中田憲令
 - 二十、三百ヤード徒歩競争
 - 一等 中澤淳四郎 二等 上岡原上 三等 宮澤嘉一
 - 番外、サツクレース
 - 一等 宮川永三 二等 中田憲令 三等 原喜四三
 - 廿一、二人三脚
 - 一等 原耕 民 二等 本多清右衛門 三等 松本清太
 - 番外、五百ヤード徒歩競争
 - 一等 村井庄三郎 二等 梨原貞次 三等 若林遊龜尾
 - 廿二、餘興
 - 廿三、三百ヤード徒歩競争
 - 一等 向井政勝 二等 原芳太郎 三等 小林佐久馬
 - 廿四、武裝競争
 - 一等 中田憲令 二等 磯村金三郎 三等 埴川金次
 - 廿五、五百ヤード徒歩競争
 - 一等 宮澤嘉一 二等 村井庄三郎 三等 若林遊龜尾
 - 廿六、電燈競争
 - 一等 倉科浦一郎 二等 甲田林 三等 中澤揚
 - 廿七、盲目觀附
 - 一等 小松六三郎 二等 小林智三 三等 小林佐久馬
 - 廿八、餘興

- 廿九、六百ヤード徒歩競争
 - 一等 松尾忠怒 二等 村井庄三郎 三等 埴川金次
 - 三十、鳩鳴小學校(高等)二百ヤード徒歩競争
 - 一等 中澤 誠 二等 大田中甲三 三等 藤江茂
 - 同上(高等)四百ヤード徒歩競争
 - 一等 三尾 實 二等 古畑 廣 三等 杉本廣助
 - 卅一、贈物競争
 - (甲) 一等 安藤次郎 二等 粟之原治平 三等 一木虎雄
 - (乙) 一等 甲田林 二等 小林佐久馬 三等 米山修
 - 卅二、四百ヤード徒歩競争
 - 一等 倉科浦一郎 二等 中澤淳四郎 三等 若林遊龜尾
 - 卅三、英字觀競争
 - 一等 中田長雄 二等 野村光智 三等 原 龍助
 - 卅四、番外百ヤード徒歩競争(新聞小學校不参ニ付)
 - 一等 小林佐久馬 二等 伊藤憲一 三等 新田忠次郎
 - 卅五、觀引競争
 - 一等 小林佐久馬 二等 瀧澤正雄 三等 原喜四三
 - 卅六、一、
 - 卅七、刺陣競争
 - 一等 徳須賀宮次郎 二等 倉科浦一郎 三等 小松先生
 - 卅八、來賓徒歩競争(二百ヤード)
 - 一等 水野忠一 二等 三 三等 諸角
 - 卅九、職員觀舞スプーン
 - 一等 征矢野先生 二等 小松先生 三等 森田書記
 - 四十、旗裝点燈

- 一等 松木 清水 二等 土屋 清三 三等 宮澤 嘉一
- 四十一、礼合
- 一等 加藤 精一 二等 原 藤助 三等 遠山 一耶
- 番外、段原 スアン
- 一等 中田 貞雄 二等 瀧澤 正雄 三等 加藤 精一
- 四十二、松 貞
- 四十三、段原 クリツヲ
- 一等 原 貞三 二等 磯村 登雄 三等 加藤 精一
- 四十四、段原 清
- 一等 伴 司 嘉令 二等 宮川 水三 三等 土屋 清三
- 四十五、各組 屋号 八百ヤ、
- 一等 伊藤 聖一 二等 原 幹 良 三等 岡 戸 信二

◎演習林の近況

當校附屬の演習林は二圃地にして其一圃地は長野縣西筑摩郡福嶋町宇城山の内大澤仲ヶ澤等ヶ澤此の山林反別台帳面積四十三町五反九畝八歩同上苑ヶ澤より臨澤迄同上十四町九反五畝十一歩同上宇小平裏同上十一町七反二十二歩合計面積十七町二反五畝十一歩の地積の圖

地にして之れを裏山演習林と稱す
 他の一圃地は同上宇城山の内大平此の台帳面積十三町一反二畝九歩の地積にして之れを大平演習林と稱す
 此の演習林は二圃地共福嶋町福嶋區の所有にして當校が西筑摩郡立として開設せられし際則ち明治三十五年三月十一日付を以て西筑摩郡と福嶋町福嶋區との間に地上權設定及び其附帶事項の契約をなし西筑摩郡立甲種木曾山林學校生徒の演習林とせり
 其契約の概要は明治三十五年四月より向ふ七十七ヶ年の期限とし地上權者は地代を拂はず所謂部分木の方法に準し相當時期に於て伐採したる樹木の代金は二分し其一つを土地所有者に配當し他の一つを郡の所得とせり而して當校が明治三十九年度に於て長野縣立に移さるるに當り前記契約により西筑摩郡が有する權利義務は同年四月一日以降總て長野縣に於て之れを承継し長野縣立甲種木曾山林學校生徒の演習林に充つる事となり長野縣知事と福嶋區有地管理者との間に權利義務承継の契約を締結せり今此の二圃演習林に於ける植栽方法並に現況等を概説すれば
 其一大平演習林大平演習林は實測面積七町八反三畝十三歩にして地勢東北に面し平均約三十度の勾配を有す

る強斜地なり元雜木雜草を以て覆はれ専ら福嶋町區民の柴草採取地なりしか明治三十五年度以降は當校に於て毎年春季約二町五反餘つと三ヶ年間繼續して落葉松を植栽せり現時に於ける林木の生立数は三万九千餘本にして其内落葉松等なるものは樹高三間高直徑四寸餘のもの尠なからず

其二裏山演習林 裏山演習林は實測面積九十三町七畝三步にして地勢北方に面し平均約二十度の勾配を有し宇城山御嶽林の裏手に在る一圃地なる此の演習林は

植栽面積並に植栽樹苗數

| 年 度 | 面 積 | 植 栽 樹 苗 數 | 備 考 |
|--------|----------|-----------|------------------------|
| 三十五年 度 | 4,111.0 | 1,800 | 遺跡三ヶ年庄にして別圃面積六五反〇畝三角形植 |
| 三十九年 度 | 11,000.0 | 1,800 | |
| 四十一年 度 | 11,000.0 | 1,800 | 遺跡三ヶ年庄にして別圃面積六五反〇畝三角形植 |
| 計 | 26,111.0 | 3,600 | |

當校附屬の苗圃は總て校の近隣に介在する民有地地を借り入れたるものにして總面積四反一畝十八歩餘あり其内一反餘歩を學校園及び農業實習地に充て他は全部

播種床善並に播種試験等の林業苗圃事業實習用地に使用せり今昨年度該苗圃に於て木曾産樹苗の播種試験を施行したる結果並に當校の養成に係る苗木現數等を現せば次表の如し

養成苗木現在數

| 面積年 | 苗木種類 | | | | | 合計 | 備考 |
|------|-------|-----|----|------|------|-------|----|
| | ヒノキ | サハラ | スギ | カラマツ | アカマツ | | |
| 一 年生 | 1,200 | | | | | 1,200 | |
| 二 年生 | 1,110 | | | | | 1,110 | |
| 三 年生 | 3,000 | | | | | 3,000 | |
| 四 年生 | 3,000 | | | | | 3,000 | |
| 五 年生 | 600 | | | | | 600 | |
| 計 | 9,910 | | | | | 9,910 | |

本試験は播種實習を兼ね専ら生徒各自の担任する所なれば十分なる成績を得ざりし部分も亦少からず特に晩霜と旱魃の害を受けんこと認む今後試験を経て其成績を覚めんのみ

播種苗圃試験報告

| 試験種類 | 頁 |
|---------|-----|
| 被土試験 | 1-3 |
| 被陰試験 | 4 |
| 被覆物厚薄試験 | 5-6 |
| 床ノ硬軟試験 | 7-8 |
| 被覆物種類試験 | 9 |

被土試験

| 被土厚 | 樹種 | 播種粒数 | 播種月日 | 発芽粒数 | 発芽月日 |
|-----|-------|--------|-------|--------|-------|
| 3 | きはだ | 250 | 四月廿五日 | | |
| 5 | 〃 | 〃 | | | |
| 7 | 〃 | 〃 | | | |
| 9 | 〃 | 〃 | | | |
| 7 | うしろし | 320 | | | |
| 9 | 〃 | 〃 | | | |
| 1 | ひのき | 17,500 | | 4,100 | 七月廿三日 |
| 2 | 〃 | 〃 | | 5,190 | 〃 |
| 3 | 〃 | 〃 | | 3,680 | 〃 |
| 4 | 〃 | 〃 | | 1,950 | 〃 |
| 5 | 〃 | 〃 | | 4,020 | 〃 |
| 6 | 〃 | 〃 | | 700 | 〃 |
| 1 | 〃 | 13,650 | | 5,600 | 五月廿五日 |
| 2 | 〃 | 〃 | | 4,960 | 〃 |
| 3 | 〃 | 〃 | | 4,780 | 〃 |
| 4 | 〃 | 〃 | | 4,600 | 〃 |
| 5 | 〃 | 〃 | | 4,520 | 〃 |
| 1 | さきはら | 31,255 | | 21,880 | 五月十六日 |
| 2 | 〃 | 29,610 | | 20,720 | 五月十一日 |
| 3 | 〃 | 34,545 | | 29,450 | 五月十二日 |
| 4 | 〃 | 27,965 | | 18,170 | 五月十三日 |
| 1 | きり | 20,000 | | 33 | 七月廿三日 |
| 2 | 〃 | 〃 | | 30 | 〃 |
| 3 | 〃 | 〃 | | 4 | 〃 |
| 4 | 〃 | 〃 | | 20 | 〃 |
| 5 | 〃 | 〃 | | 40 | 〃 |
| 5 | かみやまき | 1,528 | | | |
| 7 | 〃 | 〃 | | | |
| 9 | 〃 | 〃 | | | |
| 3 | さくもみ | 298 | | 89 | 六月廿六日 |
| 5 | 〃 | 〃 | | 64 | 六月廿九日 |
| 7 | 〃 | 〃 | | 64 | 六月三十日 |
| 9 | 〃 | 〃 | | 57 | 七月二日 |

| 生長調査 | | | 備 | 考 |
|------|-----|----------|--------|----------|
| 幹長 | 根長 | 重量 | | |
| 10.0 | 8.0 | 2.0 | | |
| 8.5 | 8.5 | 2.0 | | |
| 8.5 | 7.0 | 1.4 | | |
| 5.5 | 8.0 | 1.8 | | |
| 1.5 | 1.0 | | 350 | 九月末日現在本数 |
| 2.1 | 2.5 | | 950 | |
| 2.5 | 1.5 | | 400 | |
| 1.7 | 1.5 | | 2500 | |
| 1.5 | 1.5 | | 200 | |
| 2.5 | 2.7 | | 300 | |
| 1.5 | 1.0 | 0.03 | 300 | 現在本数 |
| 1.5 | 1.2 | 0.02 | 250 | |
| 1.9 | 1.1 | 0.03 | 350 | |
| 1.2 | 1.1 | 0.06 | 400 | |
| 1.1 | 0.9 | 0.019 | 420 | |
| 0.9 | 2.3 | 1.2 甘木=付 | 11,580 | 九月末日現在本数 |
| 1.0 | 2.5 | 〃 | 11,930 | 〃 |
| 1.3 | 2.1 | 〃 | 14,850 | 〃 |
| 1.3 | 2.6 | 〃 | 13,200 | 〃 |
| 0.9 | 0.8 | | | |
| 1.5 | 1.1 | | | |
| 0.9 | 1.2 | | | |
| 0.3 | 1.6 | | | |
| 4.2 | 8.4 | 2.3 | | |
| 〃 | 9.3 | 2.4 | | |
| 6.1 | 8.7 | 2.35 | | |
| 7.1 | 8.6 | 2.37 | | |

被土試験

| 被土厚 | 樹種 | 播種粒数 | 播種月日 | 發芽粒数 | 發芽月日 |
|-----|------|--------|------|------|-------|
| 1 | みねばり | 22,400 | | 520 | 五月三十日 |
| 2 | ク | ク | | ク | ク |
| 3 | ク | ク | | ク | ク |
| 4 | ク | ク | | ク | ク |
| 5 | ク | ク | | ク | ク |
| 5 | こなら | 121 | | 40 | 六月十四日 |
| 10 | ク | ク | | 39 | ク |
| 15 | ク | ク | | 36 | ク |
| 20 | ク | ク | | 30 | ク |
| 3 | みよん | 130 | | | |
| 5 | ク | ク | | | |
| 7 | ク | ク | | | |
| 9 | ク | ク | | | |
| 3 | けやき | | | | |
| 5 | ク | | | | |
| 7 | ク | | | | |
| 9 | ク | | | | |
| 3 | あさぐら | | | | |
| 5 | ク | | | | |

| 生長調査 九月末日調査 | | | 備考 |
|-------------|-------|------|----------|
| 幹長 | 根ノ長 | 重量 | |
| 8.0 | 5.5 | 7.5 | |
| 6.5 | 4.0 | 7.1 | |
| 6.0 | 3.5 | 6.0 | |
| 4.5 | 3.0 | 4.5 | |
| 3.5 | 3.5 | 0.5 | 39 現在本数 |
| 3.0 | 3.0 | 0.3 | 38 |
| 5.0 | 4.5 | 0.7 | 50 |
| 3.5 | 5.2 | 0.9 | 46 |
| 10,335 | 5,571 | 0.90 | |
| 11,750 | 6,375 | 0.56 | |
| 11,750 | 5,500 | 0.90 | |
| 10,000 | 5,900 | 1.16 | 宗ノ根ノ發芽々々 |

被 陰 試 験

| 被陰有無 | 樹 種 | 播種粒數 | 播種月日 | 發芽本數 | 發芽月日 |
|--|-------|--------|------|-------|-------|
| 無
ク
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無
有
無 | みねばり | 22,400 | | 163 | 五月三十日 |
| | かふやまき | 1,528 | | | |
| | さはぐるみ | 298 | | 298 | 六月廿八日 |
| | いぬつけ | 395 | | 10 | 七月廿三日 |
| | むしかり | 486 | | 9 | |
| | やまらるし | 2,000 | | 21 | 七月廿一日 |
| | やかまら | 5,448 | | 425 | |
| | ひもの | 17,500 | | 3,920 | 五月十六日 |
| | もみちぎ | 730 | | 15 | 五月廿一日 |
| | もみちぎ | 740 | | 16 | |
| | さす | 40 | | 19 | 七月二十日 |
| | やう | 12,320 | | 13 | |
| | まかり | 2,000 | | 2,760 | 五月二十日 |
| | う | 2,041 | | 18 | 五月十二日 |
| | けや | 1,370 | | 83 | 五月十五日 |
| | か | 3,747 | | 94 | |
| | おほ | 2,797 | | 405 | |
| | く | 971 | | 177 | 五月十八日 |
| | ほ | 410 | | 39 | 五月九日 |
| | く | 57 | | 31 | |
| | いた | 565 | | 57 | 七月十日 |
| | く | | | 52 | |
| | ま | 17,200 | | | 發芽セス |
| か | | | | | |
| き | 310 | | | | |
| は | | | | | |
| や | | | | | |
| ま | | | | | |
| ば | | | | | |
| う | | | | | |
| し | | | | | |
| お | | | | | |
| ぼ | | | | | |
| り | | | | | |
| や | | | | | |
| ん | | | | | |

| 生 長 調 査 | | | 備 考 |
|---------|-------|-------------------|------------------------------|
| 幹 長 | 根 ノ 長 | 重 量 | |
| 1,2 | 1,3 | | 140 本現在本數 |
| 0,8 | 1,0 | | |
| 6,2 | 7,5 | 1,9 | |
| 4,3 | 8,3 | 2,3 | |
| | | | 發芽本數750本 |
| 1,5 | 2,5 | 0'05 _g | |
| 1,4 | 2,3 | | |
| 1,5 | 1,1 | | |
| 5,5 | 1,5 | 9,6 | |
| 2,3 | 2,5 | 10,0 | |
| 0,9 | 1,3 | 1,0 | |
| 3,3 | 2,0 | 0,4 | |
| 2,1 | 1,5 | 0,2 | |
| 有10,100 | 5,100 | 0,76 | |
| 無 9,500 | 4,960 | 0,62 | |
| 2,5 | 6,5 | 0,9 | 重量細小ニ過キ重量測ルヘ
カラサレルヲ以テ記入セス |
| 3,2 | 6,0 | 0,4 | |
| 3,9 | 8,0 | 0,5 | |
| 2,5 | 2,6 | | |
| 0,2 | 2,7 | 1,0 | |
| 4,0 | 6,0 | 1,0 | |
| 4,6 | 5,8 | 0,3 | |
| 5,6 | 5,0 | 01,7 | |
| 5,4 | 4,2 | | |
| 0,5 | 1,2 | | |
| 0,4 | 0,45 | | |
| | | | 總本數
360 |
| | | | 275 |
| | | | 本 數
27 |
| | | | 16 |

被覆物厚薄試験

| 被覆物厚薄 | 樹種 | 播種粒數 | 播種月日 | 發芽粒數 | 發芽月日 |
|-------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 厚 | すぎ | 12,320 | 四月廿五日 | 1,380 | 五月十八日 |
| | | ククク | | 2,590 | ククク |
| 中 | あさから | 1,320 | | | |
| | | ククク | | | |
| 薄 | こようまつ | 172 | | 12 | 六月三十日 |
| | | ククク | | 13 | ククク |
| 厚 | こうやまき | 1,528 | | 18 | ククク |
| | | ククク | | | |
| 中 | もみ | 730 | | | |
| | | ククク | | | |
| 薄 | けやき | 3,747 | | 130 | 五月十六日 |
| | | ククク | | 210 | ククク |
| 厚 | からまつ | 4,367 | | 320 | 五月十五日 |
| | | ククク | | 1,275 | ククク |
| 中 | きはだ | 250 | | 70 | 六月六日 |
| | | ククク | | 100 | ククク |
| 薄 | いたやかい | 565 | | 150 | 六月四日 |
| | | ククク | | 16 | ククク |
| 厚 | おほねさ松 | 971 | | 26 | 六月九日 |
| | | ククク | | 35 | ククク |
| 中 | うりかへ | 2,041 | | 39 | 五月廿四日 |
| | | ククク | | 34 | ククク |
| 薄 | あかまつ | 2,797 | | 55 | 五月二十日 |
| | | ククク | | 1,850 | ククク |
| 厚 | あかまつ | 2,797 | | 1,748 | 四月三十日 |
| | | ククク | | 1,792 | ククク |
| 中 | あかまつ | 2,797 | | 282 | 四月三十日 |
| | | ククク | | 309 | ククク |
| 薄 | あかまつ | 2,797 | | 49 | 四月廿六日 |
| | | ククク | | | |

| 生長調査 | | | 備考 |
|------|------|-------|---|
| 幹長 | 根ノ長 | 重量 | |
| 1,6 | 1,2 | 0,015 | 被覆物ニハ凡ク苗ヲ用ヒタリ
厚二寸 } トセリ
中一英寸 }
薄五分 }
現在本數
9
8
12 |
| 1,6 | 1,8 | 0,040 | |
| 1,8 | 2,7 | 0,030 | |
| 4,0 | 5,5 | 5,0 | |
| 3,5 | 3,5 | 4,3 | |
| 5,4 | 5,0 | 5,3 | |
| 1,3 | 1,1 | | |
| 1,6 | 1,3 | | |
| 1,1 | 1,45 | | |
| 1,3 | 1,60 | | |
| 1,5 | 1,5 | 0,6 | |
| 1,5 | 1,0 | 0,6 | |
| 6,0 | 6,0 | 2,0 | |
| 6,5 | 6,0 | 1,9 | |
| 7,0 | 6,0 | 1,9 | |
| 0,31 | 0,48 | 0,18 | |
| 0,15 | 0,21 | 0,02 | |
| 0,23 | 0,25 | 0,08 | |
| 0,14 | 0,34 | 0,02 | |
| 0,16 | 0,42 | 0,04 | |
| 0,13 | 0,43 | 0,06 | |

被覆物厚薄試験

| 被覆物厚薄 | 樹種 | 播種粒數 | 播種月日 | 發芽本數 | 發芽月日 |
|-------|------|--------|------|-------|-------|
| 厚 | ひのき | 17,500 | | 1,000 | 七月廿三日 |
| 中 | ク | ク | | 4,500 | ク |
| 薄 | ク | ク | | 4,200 | ク |
| 厚 | まらかば | | | 60 | |
| 中 | ク | | | 54 | |
| 薄 | ク | | | 62 | |
| 厚 | けやき | | | | |
| 中 | ク | | | | |
| 薄 | ク | | | | |
| 厚 | みすぶさ | | | | |
| 中 | ク | | | | |
| 薄 | ク | | | | |
| 厚 | ゐぬつげ | | | | |
| 中 | ク | | | | |
| 薄 | ク | | | | |

| 生長調査 | | | 備考 |
|-------|-------|------|--|
| 幹長 | 根長 | 重量 | |
| 2,00 | 4,0 | | 發芽期日へ大部分暴中休那(重量小ニ過キ)ニ付キ發生セシ日不明ナル(測ルヘカラス)ヲ以テ記セス |
| 2,0 | 2,5 | | |
| 2,0 | 3,0 | | |
| 0,95 | 4,3 | | |
| 0,50 | 1,7 | | |
| 0,65 | 3,8 | | |
| 15,50 | 1,875 | 1,50 | |
| 12,60 | 6,800 | 0,84 | |
| 11,50 | 7,000 | 0,75 | |
| 0,4 | 0,55 | | |
| 0,7 | 0,30 | | |
| 0,6 | 0,55 | | |

床ノ硬軟試験

| 硬 軟 | 樹 種 | 播種粒數 | 播種月日 | 發芽本數 | 發芽月日 |
|---|-------------|--------|------|--------|-------|
| 硬中軟
硬軟中硬
軟中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟
硬中軟 | さ は ら | 31,255 | | 21,880 | 五月十六日 |
| | ク | 36,910 | | 27,070 | 五月十二日 |
| | ク | 27,965 | | 18,170 | 五月十一日 |
| | あ か ま つ | 2,797 | | 138 | 五月廿六日 |
| | ク | | | 175 | |
| | ク | | | 93 | |
| | う り か へ で | 2,041 | | 1,920 | 七月廿三日 |
| | ク | | | 1,830 | |
| | ク | | | 1,890 | |
| | い た や か い で | 565 | | 26 | 六月九日 |
| | ク | | | 28 | |
| | ク | | | 26 | |
| | き は だ | 250 | | 210 | 六月二日 |
| | ク | | | 230 | |
| | ク | | | 238 | |
| | す ぎ | 11,300 | | 2,280 | 五月十八日 |
| | ク | | | 1,800 | |
| | あ さ が ら | 1,320 | | | |
| | ク | | | | |
| | ク | | | | |
| け や き | 3,747 | | 290 | 五月十五日 | |
| ク | | | 508 | | |
| ク | | | 378 | | |
| 五 葉 松 | 172 | | 8 | 七月十二日 | |
| ク | | | 15 | | |
| ク | | | 9 | | |
| か ら ま つ | 5,448 | | 376 | 五月廿八日 | |
| ク | | | 358 | | |
| ク | | | 320 | | |
| ね す み さ し | 205 | | | | |
| ク | | | | | |
| い ぬ つ げ | 380 | | | | |
| ク | | | | | |

| 生 長 調 査 | | | 備 考 |
|---------|-------|-------|---------------------------------------|
| 幹 長 | 根 毛 量 | 重 量 | |
| 0,15 | 0,21 | 9,2 | 14,960 }
20,030 } 現在本數
11,150 } |
| 0,18 | 0,26 | ク | |
| 0,24 | 0,23 | ク | |
| 0,15 | 0,28 | 0,18 | 床ノ硬軟ハ大ナル影況ナカリシモノノ如シ |
| 0,20 | 0,24 | 0,20 | |
| 0,17 | 0,25 | 0,26 | |
| 3,8 | 4,9 | 3,15 | |
| ク | ク | ク | |
| 1,4 | 2,1 | 0,30 | |
| 6,5 | 8,5 | 1,0 | |
| 4,6 | 9,0 | 0,7 | |
| 4,2 | 9,5 | 0,4 | |
| 9,0 | 7,0 | 2,3 | |
| 13,0 | 9,0 | 3,2 | |
| 11,5 | 6,0 | 1,7 | |
| 0,23 | 0,23 | 0,07 | |
| 0,19 | 0,18 | 0,04 | |
| 6,0 | 3,3 | 3,2 | |
| 4,0 | 5,0 | 7,0 | |
| 5,5 | 4,0 | 4,8 | |
| 11,625 | 7,70 | 0,875 | |
| 10,500 | 8,125 | 0,625 | |
| 12,76 | 6,625 | 0,925 | |
| | | | 現在本數 |
| | | | 9 |
| | | | 11 |
| | | | 13 |
| | | | 標準木 |
| | | | 5本 |
| | | | 4 |
| | | | 總 |
| | | | 木 |
| | | | 50 |
| | | | 13 |
| | | | 6 |
| 2,3 | 3,6 | 0,20 | |
| 3,2 | 5,6 | 2 | |
| 0,60 | 0,45 | | |
| 0,50 | 0,55 | | |
| 0,32 | 0,40 | | |

床ノ硬軟試験

| 硬 軟 | 樹 種 | 播種粒數 | 播種月日 | 發芽本數 | 發芽月日 |
|-------------------------------|-----|-------|-------|------|------|
| 硬
中軟
硬
中軟
硬
中軟 | あ | 2,223 | 四月廿五日 | | |
| | ら | ク | | | |
| | き | ク | | | |
| | ひ | ク | | | |
| | の | | | | |
| | き | | | | |
| | ク | | | | |
| | す | | | | |
| | も | | | | |
| | さ | | | | |
| | ク | | | | |
| | ク | | | | |

| 生 長 調 査 | | | 備 考 |
|---------|---------|--------|---|
| 幹
長 | 根
ノ長 | 重
量 | |
| 2,6 | 2,2 | 0,07 | 發芽本數
950
1100
1200
本數餘り少キ爲メ測定セズ
ク
ク |
| 2,4 | 1,8 | 0,06 | |
| 3,0 | 2,2 | 0,07 | |

被覆物種類試験

| 種類 | 樹種 | 播種粒数 | 播種月日 | 発芽本数 | 発芽月日 |
|-----|-------|--------|------|-------|-------|
| ワモワ | ラカ灰 | 1,552 | | 353 | 六月五日 |
| | あおだこ | | | 142 | |
| 木ワ | 灰葉 | 1,370 | | 1 | 五月廿四日 |
| | うりかへで | | | | |
| 木ワ | 灰葉 | 17,200 | | | |
| | えらんば | | | | |
| 木ワ | 灰葉 | 8,00 | | 6 | 11,16 |
| | うるし | | | 不 | |
| 木モ | 灰葉 | 403 | | 10 | |
| | わんざい松 | | | 403 | |
| ワ | 灰葉 | 971 | | 不 | |
| | 五葉松 | | | 10 | 五月廿四日 |
| モ | 灰葉 | 171 | | 27 | |
| 木 | 灰葉 | 18 | | 6 | |
| ワ | 灰葉 | 13 | | 4,500 | 七月廿三日 |
| | ひのき | | | 10 | |
| 木 | 灰葉 | 17,500 | | 3,500 | |
| モ | 灰葉 | 4,367 | | 3,000 | |
| 木 | 灰葉 | 121 | | 3,75 | 五月十八日 |
| | からまつ | | | 2,05 | |
| 木 | 灰葉 | 41 | | 51 | 六月十四日 |
| | こなら | | | | |
| 木 | 灰葉 | | | | |
| | やまうるし | | | | |
| 木 | 灰葉 | | | | |
| | あかづら | | | | |
| | かづら | | | | |

| 生長試験 | | | 九月末日 | 備考 |
|------|------|-------|-----------------|--|
| 幹長 | 根長 | 重量 | | |
| 2,9 | 4,5 | 1,0 | 620 | 一般ニ乾燥スギタル爲床面ニ龜裂ヲ見ルニ至リシ爲五月十七日ノ晩霜ニ堪エシ多數ノモノモ枯死スルニ至リ |
| 0,35 | 2,4 | 重量少ニ過 | | 床試験ノ床面ハ石垣ノ上ニ棧シ得ニ乾燥シ易キ位置ニアリシハ此不稔ノ結果ヲ見シ原因ナランカ |
| 0,30 | 2,1 | ヤ潤ルコト | | |
| 0,35 | 2,30 | ヲ得ス依テ | | |
| 0,70 | 3,6 | 記入セズ | | |
| 1,5 | 5,0 | 2,0 | | |
| 1,3 | 4,8 | 1,8 | | |
| 1,1 | 3,9 | 1,5 | | |
| 1,0 | 1,8 | 1,0 | | 現在本数 |
| 0,8 | 1,2 | ク | 18 | 18 |
| 0,7 | 1,0 | | 24 | 22 |
| 0,7 | 1,5 | | 21 | 10 |
| 1,8 | 1,5 | | 8 | 16 |
| 1,5 | 1,5 | 1,5 | | |
| 1,8 | | 1,5 | | |
| 2,3 | 2,5 | 1,5 | | |
| 1,5 | 5,5 | 1,2 | | |
| 3,5 | 9,0 | 1,2 | | |
| 3,8 | 9,5 | 1,3 | | |
| | | | 10 ⁸ | } 現在本数 |
| | | | 4 | |
| | | | 0 | |
| | | | | 未*發芽セズ |
| | | | | ク |
| | | | | ク |
| | | | | ク |

◎紀念品の贈呈

松田、百瀬、両先生紀念品醃金と、本校々友會特別會計を以て、募り松田校長先生へ、金時計、金鏡、金磁石一揃を、百瀬先生へ七寶銀備時計一個を贈呈した。醃金額左の如し。

一金百九拾貳圓八拾錢也
 内 金(七十二圓六十錢 在學生分
 (百二十圓六十錢 卒業生分)

未納醃金は明治四拾一年八月末日を以て打切り、
 明治四十一年九月 右委員 米山太郎吉
 同 林 重郎
 福澤桃重先生へ、木曾産の重箱一重ねを本會より紀念品として、贈呈したり。
 加賀美物事へ、福島産の硯箱一ヶを本會より紀念品として贈呈したり。

◎長野縣立甲種木曾山林學校各學年職員一覽表

| 年 度 | 校 長 | 首 席 教 諭 | 教 諭 | 助 教 諭 | 教 授 囑 托 | 書 記 |
|--------------------|-------|---------------|-------|-------|--------------|-------|
| 明治三十四年度
(郡立) | 松田力熊 | (助教諭)
手塚長十 | | 浮田吉太郎 | 林 重郎
青沼正人 | 鈴木實造 |
| 同
三十五年度
(郡立) | 右 同 人 | 手塚長十
大城朝詮 | 米山太郎吉 | 浮田吉太郎 | 林 重郎
中野有作 | 右 同 人 |

| | | | | | | |
|-----------------------|---------------|---------------|---------------------------------|------------------------|---------------|------------------------|
| 同
三十六年度
(郡立) | 右 同 人 | 大城朝詮 | 米山太郎吉
手塚長十
浮田吉太郎
百瀬重四郎 | 林 重郎 | | 右 同 人 |
| 同
三十七年度
(郡立) | 右 同 人 | 大城朝詮
米山太郎吉 | 手塚長十
浮田吉太郎
百瀬重四郎
林 重郎 | 征矢野茂樹
西本龜千代
福澤桃十 | 千賀與四郎 | 鈴木實造
安井正夫 |
| 同
三十八年度
(郡立) | 右(同 人) | 米山太郎吉 | 手塚長十
浮田吉太郎
百瀬重四郎
林 重郎 | 西本龜千代
福澤桃十 | 千賀與四郎 | 安井正夫 |
| 同
三十九年度
(縣立) | 右 同 人 | 右 同 人 | 百瀬重四郎
林 重郎
大島五郎
里河内祐紀 | 西本龜千代
福澤桃十
征矢野茂樹 | 赤浦力次
澤柳友一郎 | 安井正夫
杉本 謹吾
森田長次郎 |
| 同
四十年
度
(縣立) | 松田力熊
江畑猷之允 | 右 同 人 | 百瀬重四郎
林 重郎
小松吉次郎
江崎熊太郎 | 福澤桃十
征矢野茂樹
高木本枝 | 赤浦力次
澤柳友一郎 | 安井正夫
森田長次郎 |

| | | | | | | |
|--------------------|--------|-------|------------------------------------|-----------------|---------------|-----------------|
| 同
四十一年度
(縣立) | 江畑 敬之允 | 右 同 人 | 江崎 熊太郎
小林 吉次郎
林 重郎
有川 仙之助 | 征矢 野茂樹
高木 本枝 | 赤浦 力次
加賀 明 | 安井 正夫
森田 長次郎 |
|--------------------|--------|-------|------------------------------------|-----------------|---------------|-----------------|

探險遠足部便り

岳 坊 生

吾山林學校校友會探險遠足部は毎年多少の活動をか
殊に昨年の如きは随分振つたものであつたけれ共本年
は種々なる都合上昨年の後を襲ふ程の事は出来な
會員諸君に申譯けない次第である
僕は今役員の一人として逐次自分の豫定と大体の有様
を述べて見ようと思ふのである何せよ第一學期は三
學年と二學年との旅行などで吾部の事業としては何す
る事も出来なだったので吾部の委員が集て相談した結果
暑中休暇の初めに於て淺間登山を兼ねて同山麓の國有
林に就き尙伐木、製材等を視察すべく一決したのであ
る、で直ちに顧問の先生に話して有志者を募つたけれ
共試験後やら夏の事とて病人が出来て案外に應募者が
少數であつた、然し吾々は人数にはオカマイなく七月
卅一日より八月一日にかけて登山すべく決した、最も

此事に就ては先輩たる北澤時三郎君が出来得る限り便
宜を取計て呉れると親切に書面を送つて呉れた、同君
は當時岩村田小林區署在勤であつた、其處で愈卅一日
になると皆處定の場處小諸町に集まつて初めた鹽野よ
り登る豫定であつたけれ共都合で小諸より登る事にな
り途中雷雨に悩まされつつ午前三時四十分頃頂上に達
し御來光を拜し霧の晴るゝを待ちて四方の景色を眺め
且つ硝火口を望みつゝ一週して下りに就き午前拾時頃
小諸町へ着して是れより落葉松林を見に行く筈であつ
たが都合で駄目であつたけれ共自分は一人で同山麓總
ての事を視察した此時日田小林區署在勤の瀬在實君も
供に登る事を望んで居つたが多忙の爲行かれなつた。
次に御嶽と駒ヶ岳へ同時に登つた是は非常に突然であ
つたけれ共近き故か有志者が夥しいものだ、九月拾壹
日に發表して晝頃に御嶽山へ四拾名駒ヶ岳へ二十名許
り募集者があつたので學校と交渉の結果土曜日を一

休み日曜日にも二日掛りて登山する事にした拾貳日午前
三時頃より準備に掛り御嶽登山者は四時に出發した其
人員五拾を數へた駒ヶ岳登山者は五時半出發其人員貳
拾名であつた其れ何れ共業や細帯を用意して行つた
恰もよし天氣晴朗にして一点の雲も認めざりしは吾校
健兒の勇氣に恐れて雨も風も遠く北海へ逃げ去つたの
であらう。

◎弓術部便り

靜 雲

拾叁日夕刻には何れも無事にして勇ましく歸られた
是れは餘事であるが僕は其一週間後數名と共に御嶽山
へ登り大に雨風の爲めに悩まされ或人の如きは將に千
尋の谷へ吹き落されんとしたけれども初意が冒險の積
り故行者や小屋の人の止むるを聞き入れず其日の内に
頂上まで行きて泊り翌日晴るるを待ちて山廻りをなし
又遠近の諸山の景を眺めて山を下り大瀧に一泊し三日
目には帝室林野管理局木曾支廳玉瀧出張所管内に於て
實行しつゝある檜の天然更新の林に就きて視察をなし
其日の夕刻歸校した

此二學期に尙確水の紅葉を見又舊棧の探險に行かうと
思つたが學校の方の都合で見合せざる事にした、
第三學期には兎狩りやら霽中西野の風俗人情を視察な
すべく行く積りである、先づ本學年度は此位のものて

是以上はとて不可能の事であらうと思ふ現時の情
弱に流れて居る學生には此登山や探險は行はれ易くし
て最も妙藥なる事であらうと思はれる來學年度の諸
君振て活動し給ひ殊に吾校の性質より見ても此探險遠
足は最も必要であるのだ、登山の記事は又折を見て書
く事にす。

吾が校、弓術部に就ては、多年之れが設置に苦しみ、
時に師門を叩き是れが發展を切望し、時に或は同志相
會して、之れが設置に力を盡したりしが、時運未だ熟
せざりしにや、企圖皆水泡に歸しぬ。
去つて、月を經、年を重ねて、今日に至りぬ。
計らざりき、同志の聲一度此の事に及ぶや。噫、此の
機關の活動の時期迫れるにや、吾等の情緒は、大旱の
雲霓のうれと等しく、動議一隅に起れば、三隅忽ち響
應するの境遇に進みぬ。されは茲に見るありて、明治
四十一年五月を以て、新に吾が校、運動界に弓術部の
生れ出すの機運に接しぬ。

環、吾等多年の渴望一朝に滿ち、登天の慷慨も暫々ならざる誠に謂なしとせず。即ち矢場を校舎裏に設け朝な夕なに、弓矢引くねの絶え間もなく、榮え行くこゝろいと嬉し、只、望むらくは、此の奮發一時的ならずして、益々本部の發展を圖られむ事を切望して止まず。

◎明治三十九年度會計報告

收支決算表

| | |
|----------------|-----------|
| 一金貳百六拾圓四拾錢參厘 | 總收入金 |
| 一金壹百九拾六圓四拾七錢參厘 | 總支出金 |
| 差引剩餘金六拾參圓九拾參錢 | |
| 明治四十年度へ繰越金 | |
| 内 譯 | |
| 取入の部 | |
| 一金七拾六圓貳拾四錢七厘 | 前年度繰越金 |
| 一金百八拾貳圓九拾五錢 | 會費會合費及寄附金 |
| 一金壹圓貳拾錢六厘 | 雜收入 |
| 計金貳百六拾圓四拾錢參厘 | |
| 支出の部 | |
| 一金貳拾圓貳拾四錢 | 校友會例會費其他 |

百四十六
 一金八圓七拾五錢五厘 運動會の爲商店よりの雜費
 購入代
 一金百拾參圓參拾五錢參厘 印刷其他雜費
 一金五拾四圓拾貳錢五厘(出納原簿に依る)
 計金百九拾六圓四拾七錢參厘
 右之通り相違無之候也
 尙右三十九年度會計は總て當時の副會長にして會計顧問たる自分の取扱に屬するものにして其後就任せられたる現會長には關係無之一切の責任は自分に於て負ふものに候右爲念書添へ候也
 明治四十一年十月木曾山林學校校友會副會長
 前會計顧問 米山太郎吉

◎明治四十年度會計報告

收支決算表

| | |
|------------------|-------------|
| 一金貳百五拾參圓參拾參錢五厘 | 總收入金 |
| 一金百參拾壹圓九拾九錢四厘 | 總支出金 |
| 差引剩餘金百貳拾壹圓參拾四錢壹厘 | 明治四十一年度へ繰越金 |
| 内 譯 收入の部 | |
| 一金貳百五拾參圓參拾參錢五厘 | 總收入金 |

金六拾參圓九拾參錢 明治三十九年度繰越金
 金百八拾八圓五拾錢 會費
 金九拾錢五厘 雜收入
 支 出 の 部
 一金百參拾壹圓九拾九錢四厘 總支出金

内
 金五拾四圓 會報印刷費
 金貳拾四圓七拾貳錢 テニス部費
 金壹圓六拾貳錢 擊劍部費
 金拾六圓九拾錢 運動會費
 金九圓七拾壹錢 會合費
 金六圓七拾貳錢 新聞購讀費
 金四圓〇四錢 通信費
 金拾四圓貳拾八錢四厘 雜費
 右の通り相違無之候也
 明治四十一年十月一日木曾山林學校校友會副會長
 前會計顧問 米山太郎吉

◎寄宿舎便り

四月以來寄宿舎の變遷としては各室便所に電燈を敷設され合内の整頓一變す又正副組長を廢して全部組長と

改正せり従つて寄宿舎の相談すへき事情は凡て會合して相談する事となる又九月以來各室に林業上有益なる繪畫を掲げて朝夕常に念生を勵ましむる機務たり昨多以來各便所には風呂桶の小なる様な手洗所を設けて萬事整頓せり風呂場下駄箱など新調され萬事都合なり九月より炊夫も變りて新しき炊夫を雇ふ又食堂の配膳には各自の名札を置き乱雜の弊を一掃せり目下物價騰貴して寄宿舎生活も意外に困難なり舍内不完備の爲め病氣に襲はれ外泊する者多し舍生一同に寄宿舎新築の一日も早からん事を希望す

◎編輯部便

○雜誌の体裁の宜しくまい事や、内容の趣味に乏しきこと、之れが配列の正しからぬ事や、會々誤謬のあることや、其他さまざま不備の点が多くて、少しの價値を認むる事が出来なくて、諸君の意を満すことの出来ぬのは編輯員の罪で決して外のものに不足を云ふことは出来ぬ譯で、何とも申譯のない次第です。唯次號が意氣清新なる新任編輯員の手により光輝ある發行を諸君と共に待たう

○今度の編輯に就いては色々の事故のために遂に發行が遅れた上に前に云ふた様な無價値なものが出来たのだ、其事故と云ふのは第一編輯の根本となるものが全然誤つて居た事は諸君の意を満す事の出来ななだ所の一大原因である。

○其の根本たる一大原因とは編輯員たる研究部の役員が其當を得ななだ事である。即ち我々が其の材でなかつたが爲である。校友會の役員が研究部に對して餘り慎重で無かつた爲め我々が研究部役員となり、他の多くの通材を外にして、遂に編輯に當る事となつた。他に多くの通材の存するを自ら編輯を以て任じたのは勿論其の責は我々に歸するのであるが、亦幾分役員が撰舉人たる會員にも其の責は歸するだらう。

○我々は天性愚頓で其の上少しも修養のないもので殊に雜誌の編輯とか、印刷とかに就いては少しも見たことも無ければ勿論経験はなく、如何にすればよいやら知る譯もないのみならず我々はかような事は大嫌いであるから、好きこころ物の上手であるの反對なのである。

○四拾年度に於ては遂に雜誌を發行せず、故に系統を失ひ。又校友會の記事其他の記録は少しも無いから更に

に四拾年度に於ける事は知ることが出来ぬのみならず先年投書された諸君や、原稿を書いた諸君が今年も去年の事にこりて投書されるものも少なく、原稿を書くものも少く、雜誌の材料が乏しく、編輯員が頭をさげ頼んで見ても容易には諾はれず、承諾されても、直ぐは書いて呉れぬ事もあつて、自然編輯に手間取れ、發行が遅くなつた。次號は大に振はす様にしたいから大に投書して呉れ給へ。

○今迄は研究部とか、雜誌部とかには、それぞれ一人の先生が顧問となられてゐて、雜誌編纂などには大に力を添へて下さつたようであるが、今度は他の部の顧問はあるか、合資研究部に限つて顧問かない。

絶対に無いと云ふ譯でもないか、名があるのみで實かない、と云ふのは顧問である米山先生が病氣のため永らく欠勤されて居たが、遂に職を退かれた事だ。うれたから先生に相談すると云ふ事も出来ねは、力添へをして貰ふ譯にも行かぬから、どうしても編纂がうまく行かぬ。

○本會報の主意から打算して通信欄の價值あることは吾輩の云ふまでもないことである、もて本會長が兼日先輩諸君全部の消息を乞ふてそれを紙面に漏らさず

陳ね以て會報主目的を遺漏無く發揮されよと云ふこと七月末に發信したのであつた、速かに二十有餘名の諸君からは御返事があつたが其他の諸君からは何等の便りもない、たゞ我輩は寒心に堪えん。

○如何に諸君が官邊なり實業なり其職務に多忙とは云へ一年に一回や二回の通信が書けんと云ふ程の事もあるまいと思ふ、よし時間があつても本會に對し母校に對し何程の情熱も湧かんからと云ふ會員もあるまい、兎にやれ諸君が今後本會と母校との發展に多大の御助力あらんことを御願する次第です。

○葉書便り欄には都合上三通の風筒状も合せ掲げましたから御承知を願ひます。

○前年集めた原稿も僅かに存して居つたから其内て松田校長の告別の辞と高橋君の會山獨語と白澤博士の説と木村君の詩を出しました。

○旅行日誌に就ては前にも一寸書いて置いた通り全部を載せて雜誌の大部分を占領する様なことをしてもそれ程の價値は確かに無いことでもあり且つ吉野地方の旅行は度々あつたことでもあり、爲めに今回は主要なる觀察調査のみを載せることにしたので、本年は二三年共に吉野京都大坂方面に向つたのである。

○本年度の校友會は種々の方面に活動する爲めに我輩の部も存外經費の豫算が少なくて一冊十錢乃至十二錢の小冊子を作らねはならんことになつて居つたのであつたが、他から多少の融通もつくことになつたから稍々擴張したのであるが爲めに本誌發行時日も多少遅れんければならんことになつたのである。

○必ず卒業生諸君にお忘れされてはならんことは、轉任移動若しくは吉岡其他特種事項の諸君にありたる場合に會員自身否さらは知友より其由を速かに御報被下下さる事である。

木曾山林學校沿革略史

明治三十三年二月西筑摩郡に郡立實業學校設立の議あり、郡に教育調査委員を設け學校の種類及程度につき詳細なる調査を遂げ多數の意見により乙種程度の山林學校を適當と認め同年十月臨時郡會を召集し其設置の件を諮り滿場一致を以て之を可決せり、當時郡に於て山林學校の設立を必要とせし主意大要左の如し。
一、當郡福島町外十五ヶ村は古來木曾谷と稱して山嶽重疊の間に介在し農耕に適するの地は僅々四千三印

町歩に過ぎざるに反して林野の面積頗る廣く御料林の三十四万餘町歩を始めとし民有林野四万八千餘町歩の多きに及びり。

二、地況既に叙上の状態なるを以て住民は其生業を森林の生産物に倚頼せざる可からざるは必然の勢ひなり然るに今其森林の状況如何と顧るに、かの御料林が到る處鬱蒼たる林相を呈し所謂木會五木と稱し貴重なる樹種に富めるに反し民有林に至つては維新以來林政頗る弛み濫伐は其極に達し荒廢の状見るに忍びざるものあり、嘗て僅の植林の舉ありしも當時森林思想の幼稚なる其計劃も空しく失敗に了りて遂に今日に及びり、是即ち本郡が新に山林學校を設立して斯業に關する一定の素養ある人物を養成し一は以て民有林の荒廢を防ぎ其蓄積を増し一は以て郡民が其餘惠を蒙るへき御料林を愛護するの精神を涵養せしめ兩々相俟て其美果を收めんとする所以なり

三、加之本部は全國有数の森林地として其伐木運材法の如きは最も我郡林業の模範となるに足るを以て茲に在學する生徒は日常實習の間多大の便益を享受することを得て他日公私の林業に従事するに際し其獨特の技能を發揮することを得へし。

次て明治三十三年十月二十九日郡立乙種山林學校設立の認可を経たり。

明治三十四年四月教育勸諭廳本を下賜せらる。

同年同月二十日授業を開始す。在學生徒數六十七名なり

同年五月十五日開校式を舉行す

同年七月十九日學校程度を甲種に変更し之が認可を経たり

是より先き程度を甲種に進むるの緊要なるを認め

同年五月十六日臨時都會を開き組織變更の件を議

決し之が認可を得るに至れり

同年同月實業教育國庫補助法により同年より向ふ五ク

年間毎年金千二百圓つゝ交付の旨文部大臣より達せらる

同年十月八日 兩陛下の御眞影を拜戴す

同年十二月廿四日徵兵令第十三條及文官任用令第三條

により徵兵猶豫一年兵志願及び卒業生無試験にて判任

文官に任用の件を文部大臣より認可せらる

同年縣費より補助として金壹千五百圓、三十六年度以

後は毎年二千圓宛交附せらるることなれり

同三十五年四月實習林として西筑摩郡福島町福島區有

山林八十二町三反六畝十歩を向ふ七十七ヶ年を期し郡

福島町福島區との間に地上權を設定し地代を拂はず伐

期に其所得税を平分するの契約成立せり

同三十七年三月第一回卒業生三十八名を出せり

同三十八年三月第二回卒業生三十四名を出せり

同三十九年三月第三回卒業生三十名を出す

同三十八年十二月の長野縣通常縣會に於て明治三十九

年度より縣立に変更するの件を可決し同年二月十日文

部大臣の認可を経たり

同四十年三月第四回卒業生三十八名を出す

同四十一年三月第五回卒業生二十六名を出す

◎卒業生の諸君にして久しく御通信無之隨つて今回調

査候ものにては或は舊に或は最近に誤謬も有之候と

信し爲めに最も確實なる住所氏名の諸君に向つての

み會報を發送仕り申候



◎ 投稿規則

- 一、用紙は半紙大にして、一行二十三字詰たるへし。
- 一、假名は平假名を用ひ、句讀点を施すへし。
- 一、題目を改むる毎に用紙を別にすへし。
- 一、誌上には匿名を用ふるも原稿には氏名を附記すへし。
- 一、原稿は返附せず、採否は編輯者の意見による。

◎ 會費遲滞者に告ぐ

卒業生諸君にして本會々費滞納の諸君有之會計整理上
 一方ならぬ迷惑を感じ居り候間此際至急納入相成度候
 万一次號發行迄に御納入無之に於ては會報紙面に御姓
 名を掲げ以て特に御催促申上ぐ可く候

明治四十二年一月卅日印刷
 明治四十二年三月七日發行

編纂人 木曾山林學校校友會

長野縣西筑摩郡・福島町

同縣長野市西長野町二百卅八番地内三番

印刷人 堀賢吉

同縣同市旭町廿七番地

印刷所 信濃新聞株式會社